

活動報告

# 安曇野の屋敷林

その歴史的まちなみを訪ねて



屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト

# 発刊によせて

安曇野市長 宮澤宗弘



『活動報告 安曇野の屋敷林 その歴史的まちなみを訪ねて』の発刊おめでとうございます。安曇野市周辺に点在する屋敷林は、北アルプスとその裾野に広がる田園風景の景観と併せて日本の原風景的な豊かな景観を形成しており、全国的に誇れる地域の宝です。屋敷林の歴史的な背景については、防風、防雪、燃料や建材の目的で屋敷の周囲に植林されてきました。しかし、近年、その維持管理の難しさなどから年々減少し、屋敷林を背景にした景観は失われつつあります。

このような状況の中にあって、安曇野ブランドデザイン会議に属する「屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト」では、屋敷林の保全と歴史的・文化的な価値に着目され、積極的に活動をいただいております。その活動にはたいへん意義深いものを感じ、心から敬意を表する次第です。

プロジェクトでは、これまで安曇野市内外約50か所の集落を回り、所有者から屋敷林の維持管理の課題や今後屋敷林をどうしていきたいかなどの聞き取り調査を実施され、本書ではそうした調査結果を踏まえ、屋敷林を取り巻く周辺地域の歴史や文化を探りながら、プロジェクト独自に安曇野の屋敷林の実態とその価値についてまとめられております。

本書の発刊により、市民に屋敷林の景観的な価値にとどまらず、歴史的・文化的価値について理解を深めていただくとともに、屋敷林保全活動に取り組むきっかけとなることを期待しております。

最後に、本書の作成にご尽力をいただきましたプロジェクトの皆様をはじめ、調査にご協力をいただきました屋敷林所有者の皆様方に深く感謝申し上げ、発刊によせてのご挨拶とさせていただきます。

# 『安曇野の屋敷林』 目次

発刊によせて	安曇野市長 宮澤宗弘 / 1
本書に収録した屋敷林の所在地 / 3	
屋敷林は公共財産	高見沢賢司 (元長野県松本地方事務所長) / 4
安曇野の屋敷林について	土田勝義 (信州大学名誉教授) / 5
先人の知恵が息づく屋敷林	場々洋介 (屋敷林と歴史的まちなみプロジェクトリーダー) / 6

## 1 穂高 ..... 7

1-1新屋 / 8	1-2古厩 / 10	1-3島新田 / 12	1-4小岩岳 / 14
1-5耳塚・橋爪 / 16	1-6原木戸 / 18	1-7富田 / 20	1-8狐島 / 22
1-9荒神堂 / 24	1-10本郷 / 26	1-11等々力 / 28	1-12白金 / 30
1-13田中 / 32	1-14久保田 / 34	コラム [重文・曾根原家住宅] / 36	

## 2 明科 ..... 37

2-1塩川原 / 38	コラム [篠ノ井線廃線敷] / 40
-------------	--------------------

## 3 堀金 ..... 41

3-1岩原 / 42	3-2川口 / 44	3-3扇町 / 46	3-4下堀 / 48	3-5西小路 / 50
3-6南原 / 52	3-7中堀 / 54	3-8小田多井 / 56	コラム [大庄屋山口家] / 58	

## 4 豊科 ..... 59

4-1重柳 / 60	4-2寺所 / 62	4-3徳治郎 / 64	4-4本村 / 66	4-5吉野 / 68
4-6中曾根 / 72	4-7下鳥羽 / 74	4-8中飯田① / 76	4-9中飯田② / 80	
4-10真々部 / 82	コラム [古民家再生の実例——「蔵久」] / 84			

## 5 三郷 ..... 85

5-1住吉 / 86	5-2上中萱 / 88	5-3下中萱 / 90	5-4及木 / 92
5-5北小倉 / 94	5-6楡 / 96	5-7二木 / 98	5-8下長尾 / 100
5-9上長尾 / 102	5-10野沢 / 104	5-11七日市場 / 106	5-12藤ノ木 / 108
コラム [三郷の天然記念物] / 110			

## 6 梓川 ..... 111

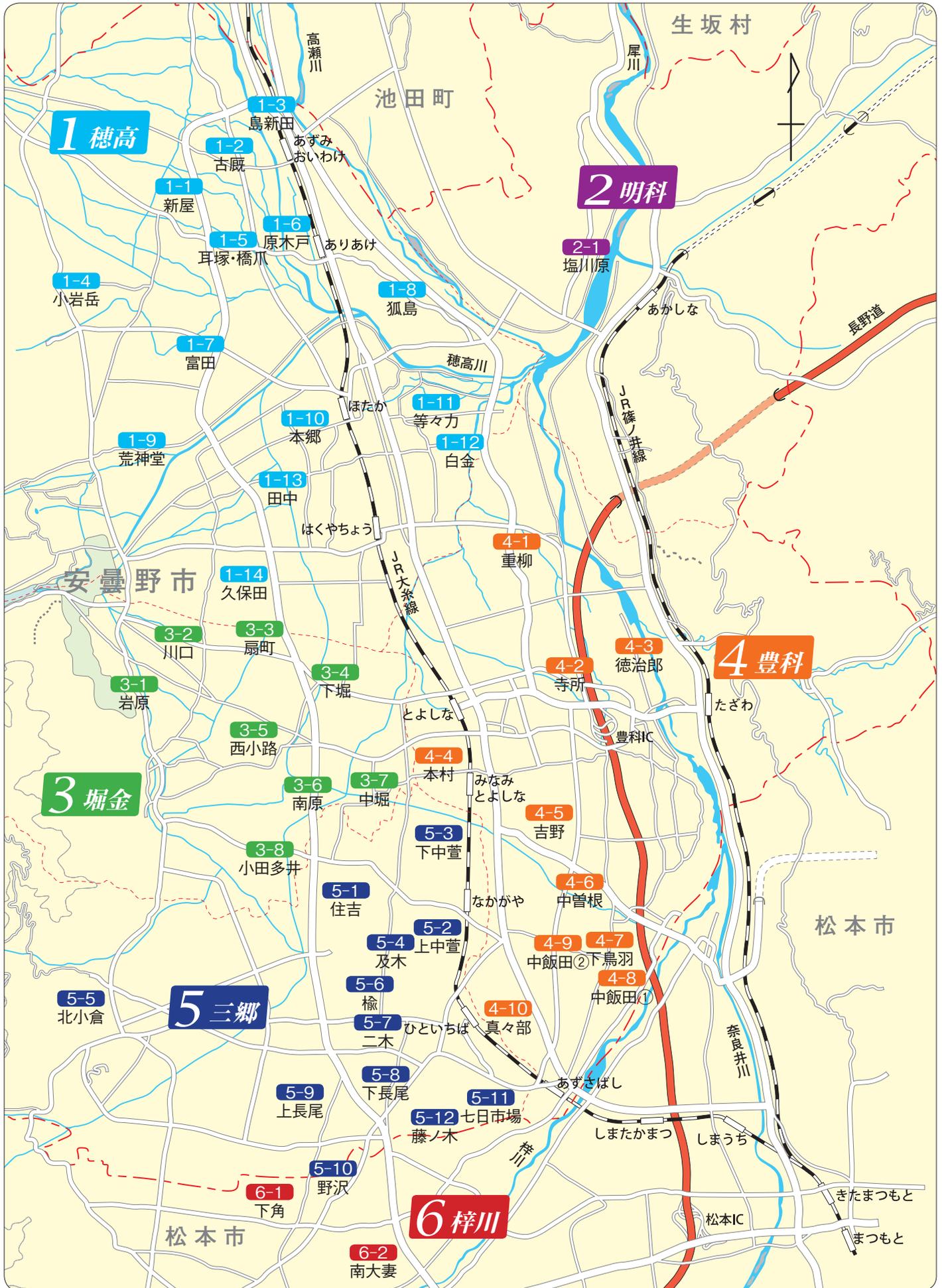
6-1下角 / 112	6-2南大妻 / 114	コラム [梓川の巨木] / 116
-------------	--------------	-------------------

屋敷林考——私と庭の樹木—— 松岡淳夫 / 117

屋敷林所有者へのアンケート調査の報告 / 118

「第1回屋敷林サミットin安曇野」の報告 / 119

あとがき 参考文献一覧 制作スタッフほか / 120



本書に収録した屋敷林の所在地

# 屋敷林は公共財産

高見沢賢司（元長野県松本地方事務所長）



松本地方事務所長としての2年間は、わたくしの県職員生活の中で最も豊かな2年間でした。様々な方々との出会い、新しい時代にむけて、夢を共有することができました。その中でも、屋敷林保全事業に始まった取り組みが、このように市民の有志の方々によって引き継がれ、確実に脈打っていることが何よりもありがたいことだと感謝しています。

もとをただせば、屋敷林保全事業は建築士の方々と地方事務所職員とのフランクな座談会の中から生まれました。2003年12月11日の夜、地方事務所の3階会議室です。テーブルを囲んで屋敷林についてそれぞれの想いを出し合っている中で、場々さんからだったと思いますが、「登録制度」というアイデアが出されました。屋敷林に関心を寄せ合うという素地が従来からあったからこそでしょうが、取り組みが具体的な形を取り始めたまさにそのときでした。

これからも、息の長い、少しずつでも着実な努力を続けていっていただきたいと思います。景観はそうしたたゆまぬ意識と努力によってしか磨かれないと思うからです。

屋敷林は、陰影のある景観のためには欠かせない構成要素です。もしこれがなかったら、安曇野は平板な一盆地に過ぎないでしょう。北アルプスの峰々を背景にし、川や堰に沿う緑の回廊、その空隙を埋める屋敷林と寺社林、これらがあってこそ安曇野だと思います。その並木はいつかの時点で誰かが植え、誰かが手入れを続けてきたものです。一朝一夕にできたものではありません。木が枯れ、あるいは折れてしまったことも必ずあるはずですが、それを補い、支え、育ててきたからこそ豊かな緑を繁らせているものです。屋敷林も同じです。生活の中で出来上がってきた稀有な公共財産です。

これを保全するため「ファンド」（基金）をつくったらどうか、と夢想しています。浄財を集め、屋敷林の手入れ費用の一部を支援する仕組みを、地域で、NPOでつukれないものか。行政による支援は一時、県で行いましたが、税金を使う以上どうしてもそれなりの手続きが必要になります。そこで民間の有志で浄財を集め、簡便で速やかな支援ができないものか。もしそうなったらその一端を担わせてもらいたい。美しい深みのある地域づくりにそうした形がかかわれるのは楽しいだろうな……。こんなことを考えています。

# 安曇野の屋敷林について

土田勝義（信州大学名誉教授）



安曇野の屋敷林については、ここ10年ほど前から地元の景観育成サポーターの方々や松本地方事務所で色々な調査や、保全事業等が行われてきましたが、私はそれと知らず後発かつ独自で景観生態学的研究をテーマとして調査を行ってきました。実は屋敷林に関心をもったのは、かつて旧制諏訪中学の教員であった地理学者三澤勝衛の『風土論』を以前に読んでからです。彼は屋敷林はその土地の風土を表わす貴重な指標であると述べています。その面で安曇野の屋敷林から安曇野の風土を見てみよう、5年前ころの定年直前から安曇野の屋敷林についてぼつぼつ調査を始めました。その後プロジェクトが発足し、その会員にもさせていただき、いくつかの現地調査にも参加しました。

自分の研究やプロジェクトでの現地調査に係わった点から、安曇野の屋敷林を考えてみると、それぞれの屋敷林はそれぞれの特徴を持っていることです。すなわち屋敷林の広さ、位置、樹種、樹齢、下層植生、水分条件、土壌条件、管理法などが異なっています。さらに屋敷林ビオトープとしての機能（屋敷林生態系）も持っており、その姿も屋敷林ごとに異なっております。要するにそれぞれ個性があるということです。

安曇野の屋敷林の全体的な特徴としては、敷地が広く、ボリュームがあること、樹種（針葉樹や広葉樹）が多い、大木が多い、庭園と一体化している（観賞用に利用）、林床植物が豊か（安曇野本来の野生植物が残存している）、本棟造の家屋ほんむねづくりと共存している、などがあります。まだまだ未知のものが沢山あるでしょう。これは他の地域の屋敷林にはない特徴だと思いますので、そういう意味でも価値があると思います。一方、他の目で見ると、安曇野の森林＝里山として機能していて、その存在はほとんどが田園である安曇野の営農や人々の暮らしに寄与してきました。これら歴史的変遷はまだほとんど手つかずですが、GIS（地理情報システム）などの利用での解析が望まれます。

いくら特徴や価値があってもこれを存続し、維持していくことは大変です。その方法は地元の方々と智慧を出し合い、また公的な支援を得るしかないでしょう。そのために、もっとその大切さをPRし、訴えていくしかないと思います。多くの方々の熱意と汗の結晶によるこの本はきっとその大きな力となってくれることと思います。

# 先人の知恵が息づく屋敷林

場々洋介

(屋敷林と歴史的まちなみプロジェクトリーダー)



安曇野市は平成17年10月に、穂高町、豊科町、明科町、堀金村、三郷村の5つの町村が合併して一つの市となりました。北アルプスの麓に広がる景観のすばらしいエリアです。

水と緑と北アルプス、そして田園の風景がその景観を醸し出しています。いくつもの扇状地からなり、川の水も途中で地下に浸透してしまうため、水の確保が非常にむずかしくて、先人たちは何本もの縦堰・横堰を引いて、水のネットワークをつくりました。こうしてようやく一面の水田が開かれましたが、人々は自分たちの家や集落を北アルプスの季節風から守るため、あるいは暑い夏の日差しから涼を得るために、屋敷のまわりに樹を植えました。こうした屋敷林がこの安曇野には、2,000から3,000か所もあるといわれています。

安曇野の屋敷林は、たとえば散居村に象徴される富山県の砺波平野などとは違い、神社・仏閣の寺社林とともに緑の屏風をつくって集落を守っています。しかし近年では、近所への落ち葉の気がねや、毎年かかる剪定費用の負担に、所有者によって伐採されていくケースが増えてきました。安曇野の風景は刻々と変化しているわけですが、身近な屋敷林の緑も失われつつあるのです。

平成15年、県松本地方事務所の高見沢所長が長野県の事業として、屋敷林の保全のための登録制度をスタートさせ、その時からプロジェクトがスタートしました。県の景観サポーターとしての活動は、平成20年安曇野ブランドデザイン会議の一プロジェクトとしてさらに発展しました。私たちの「屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト」は単に屋敷林を調査する活動だけではなく、地域の文化の足跡や環境も含めて調査し、今後の新しいライフスタイルも提案していきたいと考えています。

都市化の進む安曇野では、屋敷林は緑の環境のシンボルであり、そこには緑の中に住む心の豊かさがあります。今回の私たちの安曇野周辺の調査は、屋敷林に関する計画の第一ステージであり、今後基金を集めて維持管理に充てる計画も考えていますし、またボランティアを募り手入れのできない屋敷林の保全をお手伝いするのも一つかと思っています。

今回の調査で、長い歴史の中で作り上げられた先人たちの知恵が、屋敷林のある暮らしの中に息づいていることを知りました。今回の冊子が、安曇野の未来を考える上でいくらかでも貢献できれば幸いです。

# 1 穂高

穂高は安曇野市の北西部に位置し、燕岳から常念岳へと連なる北アルプスを源とする中房川と烏川の扇状地によって形成されている。地域の約3分の2は山地で、西側山麓は松林、平地の中央部は水田、扇端の東側は湧水に恵まれわさび田やニジマスの養殖池が広がっている。穂高には水田の中に規模や種類も様々な数多くの屋敷林が点在し、北アルプスを望む田園風景の中の重要な景観要素となっている。



# 1-1 あらや 新屋 白壁の土蔵が並ぶ屋敷林

安曇野市穂高有明



白壁の蔵が並ぶ屋敷林



赤沼千史宅の母屋と屋敷林



赤沼千史宅の蔵は音楽スタジオに改装されている

「新屋」という地名の由来は、中世までの古厩郷ふるまやを母村として開発され、近世に独立した村という意味である。地勢は、燕岳を源流とする中房川扇状地の扇頂・扇央部に位置している。

古くからの開発があったと思われ、西の山麓沿いに穂高古墳群に含まれる古墳が8基存在する。そのうちの1基は、坂上田村麻呂に成敗されたという八面大王の伝説を伝える魏石鬼岩窟ぎしきのいわやである。

明治に入って周辺の村と有明村を構成したが、新屋はその中心地となり、小学校や郵便局・駐在所、後には農協なども置かれた。

新屋には、国の重要文化財に指定された曾根原家住宅がある。この住宅は17世紀中期から後期にかけての建築とされ、本棟造が確立する前の、石置板葺いしおきいたぶきで切妻平入ひらいりの民家建築である。

## 赤沼千史宅の屋敷林

赤沼千史宅は、東側に美しい白壁の土蔵が2棟あり、その間を行くと屋根が高い、総二階建ての大きな母屋がある。煙出しの小屋根が上がり、かつては養蚕を営んでいたことが知られる。



北側から屋敷林を見る



真正面には有明山が見える 左が赤沼淳夫宅の塀。



赤沼淳夫宅の庭の美しい紅葉



赤沼千史宅の入口

### 赤沼淳夫宅の屋敷林

赤沼淳夫宅は、広域農道から西側にやや離れた場所に位置し、静かなたたずまいの中にある。屋敷林は、周辺の数軒の家の樹木が一体となって、北側を中心に配置されている。北側から見ると森のような大きな屋敷林である。

樹種は、カエデ・イチョウをはじめとした落葉広葉樹が多い。南側には、カキなど果樹が見られる。また赤沼淳夫宅の門は諏訪片倉館の迎賓館の門を譲りうけたもの。碌山美術館の設計者今井兼次氏がよくここを訪れた。

屋敷林に囲まれた母屋と、内部を改装した土蔵がある。入口には塀や門がある。東側から北側にかけては、近年美しい塀が造られ、屋敷林とともに背景の有明山や北アルプスと非常によく調和している。



赤沼淳夫宅の門



# 1-2 古厩<sup>ふるまや</sup> 有明山を背景にした屋敷林

安曇野市穂高有明



最近まで天蚕を続けていた中村宅のたたずまい



吉田宅の母屋 2棟並んだ土蔵の間を入ると築170年余りの切妻平入、亜鉛鋼板葺きの母屋がある(改築前は板葺き)



堀屋敷跡の北に位置する吉田宅の池(旧穂高町景観賞受賞)

古厩という名は古代の厩<sup>うまや</sup>に由来するもので、安曇野唯一の厩家を示す地名である。松本から越後糸魚川に向かう古道の千国道沿いに古代の厩家があったのであろう。

中房川扇状地の扇端に位置し、北から東側に中房川と乳川が合流した乳房川が回り込んでいる。中房川から取水した農業用水の北堰が立足・古厩地域の149<sup>㍊</sup>を灌漑する。その開削は中世末の天正・文禄年間(1573～96)の頃といわれている。

仁科氏の支族とされる古厩氏は、古代からの集落を受け継いで郷町を造った。その町並みの長さはおよそ2町(約200<sup>㍊</sup>)余で、南北に鍵の手が設けられている。古厩氏はこの郷町中央の西の背後に堀屋敷をつくり、居館としていた(古厩氏居館跡)。

## 有明の天蚕

古厩村をはじめとした有明地区の特産品に天蚕がある。天蚕は「やまこ」とも「やままい」とも呼ばれる日本原産の野蚕で、山野でクヌギやナラなどの葉を食べて繭をつくる。緑色の繭から取れる天蚕糸は優雅な光沢を持ち、「繊維のダイヤモンド」とも



左は江戸時代の古厩村の郷倉



旧郷町沿いの生け垣



百瀬宅の堀と屋敷林



百瀬宅の門かぶりの松



中村宅の天蚕用の籠

呼ばれ貴重品とされてきた。

天明年間（1781～89）から、篤志家が家蚕とは

別に天蚕の卵を採取し飼育を始めたと伝えられる。明治30年ころが最盛期で、京都西陣・岐阜・新潟・桐生・足利などの機業地に送られ名声を博した。

### 古厩の屋敷林

古厩の屋敷林は堀屋敷跡周辺と、その西方約500mほどにあり、旧郷町沿いには生け垣と一体となった樹木群が古道の雰囲気を残している。

乳房川の土手から望む有明山を背景とした古厩の屋敷林は美しい。

近世の古厩村の年貢米を保管した郷蔵は、近くの庭先に移築され再利用されている。



# しましんでん 1-3 島新田 茅葺の民家のある屋敷林

安曇野市穂高北穂高



武井姓 4 軒の家で構成された屋敷林



茅葺の民家を再生した武井孝夫宅の母屋



増築された別棟 白と黒のシックな外壁である。

島新田村は、江戸中期に編纂された松本藩の地誌『信府統記』によると、青木新田村の川上に開発されて、慶安2年（1649）に青木新田村から分村している。江戸前期に全国的に大規模な開発が進んだ時期に成立した新田村の一つである。

開発が遅れた理由としては、高瀬川と穂高川に挟まれた島状の地帯であるため、洪水の被害が大きく農地に適さなかったことが考えられるが、堤防工事などによりこうした氾濫原にも水田が作られるようになったのであろう。

明治以降は北穂高村を経て、昭和戦後穂高町となった。昭和43年には農事組合法人「北穂高農業生産組合」が設立され、農業構造改善事業により圃場整備が実施された。整然とした田圃は大型農業機械による稲作が可能になったが、この地を通っていた糸魚川街道（千国街道）は部分的、断続的にしか確認できなくなってしまった。

糸魚川街道が池田通りと松川通りに分岐する付近を追分といい、JR大糸線の安曇追分駅はこのことに因んでいる。分岐点付近に置かれていた石碑には



2棟建つ土蔵が美しい



北側の屋敷林



武井孝夫宅の西側 JR大系線に面しており、低い塀と倉庫が配置されている。



生け垣の手入れも行き届いている

「右大町みち 南無阿弥陀仏 左松加わ（松川）」と刻まれていたが、道路拡幅により現在は島新田会館の前に移されている。

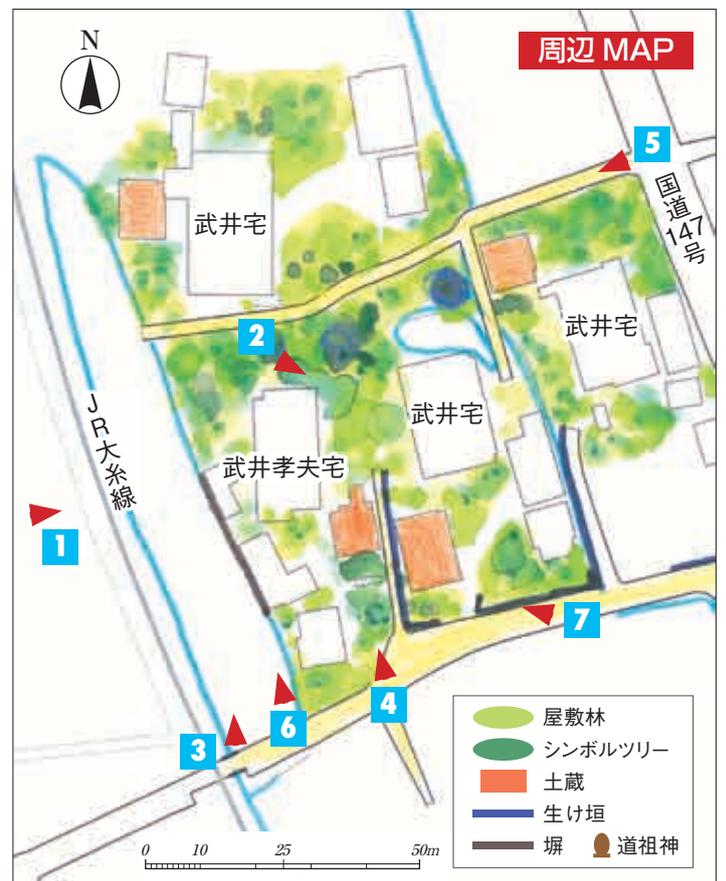
### 新島田の屋敷林

島新田の屋敷林は追分周辺に残っている。中でも追分の北西方（松川村方面）約200㍍に存在する武井姓4軒の家屋周辺はみごとである。1区画約2,000平方㍍（約600坪）程度あり、石垣・生け垣・竹垣・路地などで区画されている。樹木は主として北側と西側に配置され、樹種はケヤキのほか、ヒノキ・スギ・マツ・コウヤマキなどの針葉樹が多い。

その他にも追分の前後100㍍には土蔵や屋敷林の面影が残る家が散見される。

### 武井孝夫宅の屋敷林

母屋は築160年ほどの茅葺寄棟造の民家を再生したものである。湿気対策のための基礎のかさ上げや軒の切りつめなど、通風・採光に工夫して快適な生活ができるように改修されている。増築された別棟の外壁は黒塗りの板壁と白の漆喰壁で、母屋との調和にも気配りが見られる。



# こいわたけ 1-4 小岩岳 小岩城址につながる屋敷林

安曇野市穂高有明



中世の城下集落の雰囲気が残る静かな通り



小岩岳公民館と大きなケヤキの森



伊藤宅の古い井戸

小岩岳（小岩嶽とも表記する）には、中世古厩郷の領主古厩氏が築いた山城の小岩岳城がある。その麓には城下集落が営まれていて、小岩岳の集落を囲んで二重の堀が巡らされていた。

天文19年（1550）府中（松本）に攻め込んだ武田晴信（信玄）は、小笠原長時を追い、松本平と安曇野をほぼ手中にしたが、この小岩岳城はその後も抵抗を続け、2年後の天文21年末についに落とされている。武田家臣の駒井高白斎が記した『高白斎記』にはその激しい戦いの様子が詳しく載っている。

地勢は西山の山麓に立地し、藤尾沢（富士尾沢）・天満沢の沢水を利用して開かれた集落である。地域内には大門遺跡など縄文時代の遺跡や、古墳が点在し、古くから人が住んでいた地域である。本格的な開発は古厩氏によるものと推定され、古道の千国道が集落を通り、宿城的機能を担っていたと考えられる。

江戸時代は嵩下村を構成し、明治以降の<sup>たけのす</sup>有明村を経て、昭和戦後穂高町となった。昭和47年（1972）からこの地の山麓一帯が、中房から引湯した穂高高



生け垣の連続する静けさ



矢野口宅の屋敷林と本棟造の家



伊藤宅の屋敷林と古井戸



伊藤宅と小島宅の屋敷林

原温泉郷として開発され、温泉付別荘や旅館が建ち並んだ。

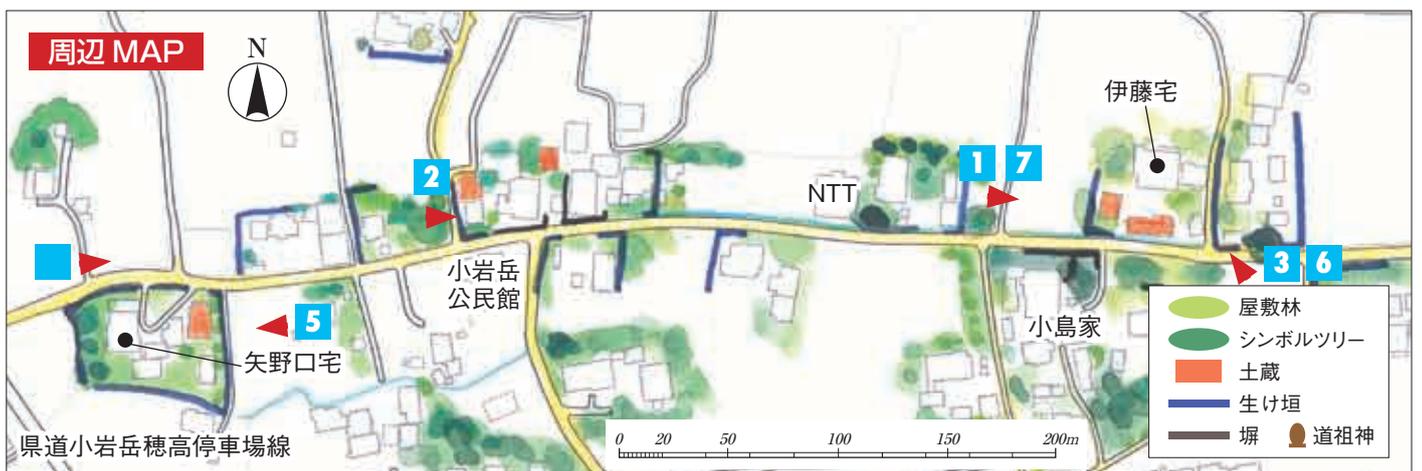
### 小岩岳の屋敷林

小岩岳の屋敷林は、小岩岳城址へ続く大手道沿いにあり、元は配下の武士たちの屋敷であったためか、一軒当たりの規模が大きい。また、他の集落とは異なり、間に田圃を挟みながらも、屋敷が房状に配置されていることが中世の城下集落の特徴といえる。屋敷林はスギなどの針葉樹が比較的多く、樹高も高

い。敷地の全方向に配置されている家が多く、集落全体で深い屋敷林を構成している。

### 本棟造の建物

集落内には、大規模な本棟造の母屋、美しい土蔵や土壁の塀などが多く見られる。茅葺寄棟の母屋もある。現在畜産を営む伊藤宅の母屋は、かつて養蚕の桑を収納したであろう地下室を備えている。山麓線近くの矢野口宅には、大きな本棟造の母屋があり、背景のスギを中心とした屋敷林との調和が美しい。



# 1-5 みみづか 耳塚・はしづめ 橋爪 緑のトンネルをなす屋敷林

安曇野市穂高有明



生け垣と屋敷林に囲まれた大通り



林芳郎宅の屋敷林 昭和10年(1935)の大火事の際は防火林となった



中央は大きなエノキ

耳塚は中房川扇状地の扇端部にあり、中房川水系の油川や中沢北堰が流れ下っていて、古代から農耕の適地であった。耳塚公民館付近からは弥生土器片ちがわが出土している。乳川の河岸段丘上の良田地帯に開拓された、耳塚・古厩・立足の集落を通る古道が千国道の一つと考えられている。

耳塚の名の由来は、集落の南東にある径10程ほどの塚にある。これを地元では、坂上田村麻呂に成敗された八面大王の耳を埋めた塚と伝えているが、実際は穂高古墳群に含まれる円墳の一つであろう。

江戸時代には単独で耳塚村を構成していたが、租税もきつく、農業だけでは生活が困難なため、流木の処分や薬草掘り、新切(開田)事業などで生活を維持していたようである。

橋爪村は千国道が烏川を渡る付近に中世から存在し、江戸初期には4軒の小村であったが、安政2年(1855)の書上では37軒に増えている。しかし、ここも烏川の洪水に悩まされた村であったようである。

明治5年(1872)戸長制の実施によって耳塚の個人宅に戸長役場が開かれ、明治7年には周辺の諸村



4 県道沿いの歴史のある林幸夫宅



5 北から耳塚の屋敷林を見る

と合併して有明村となった。その後、大正5年(1916)に新屋に役場を新築移転するまで、耳塚は有明村の行政の中心地であった。

### 耳塚・橋爪の屋敷林

耳塚・橋爪の屋敷林は、主要地方道の塩尻鍋割穂高線が乳川を渡った西側の道沿い両側と、それと交差する南北の古道沿いに見られる。茅葺屋根の民家もある。耳塚公民館の前にあった道祖神は香取神社の境内に移された。西の外れには耳塚堂などがある。



6 中島宅の落ち葉の処理



7 林幸夫宅の土蔵の軒に吊るされた天蚕用の籠往時を偲ばせる



8 土蔵の残る裏通り



9 生け垣と石積みの残る大通り



# はらきど 1-6 原木戸 ハナノキもある屋敷林

安曇野市穂高北穂高



敷地の南東の隅にあるケヤキの古木は原木戸のランドマークになっている



臼井宅の手前は以前わさび田であった



圃場整備された農地は縦横に水路が整備され、農道からは水路に架けられた橋を渡って田圃に入る

原木戸集落のある北穂高の<sup>あおけみ</sup>青木花見村と、その北に位置する島新田村は、穂高川と高瀬川の間にある中洲の上に発達した村である。

安曇野市の他の地域は農業用水の確保に苦心したが、この地域は低湿地のうえ高瀬川の水害を被ることが多く、農地の維持に苦労することが多かった。寛政元年（1789）の水害が最たるもので、多くの人々が故地を捨てて穂高川対岸の貝梅村などへ住居を移している。

松本から糸魚川へ至る道を「糸魚川街道」と公式に称するのは明治20年代からであったという。江戸時代は途中にあった番所の名をとって千国街道、また糸魚川方面からは松本街道ともいった。この道が青木花見、島新田を通り、追分から分かれて高瀬川を渡り池田に向かっていった。

## 原木戸の屋敷林

この地域の屋敷林は街道の両側に、ぽつぽつと散見される。途切れ途切れの屋敷林の間から、圃場整備された農地の向こうに望む北アルプスの眺めはすばらしい。しかし、JR大糸線の有明駅や安曇追分



街道沿いの白井宅



ハナノキ



強風で折れたモミの木



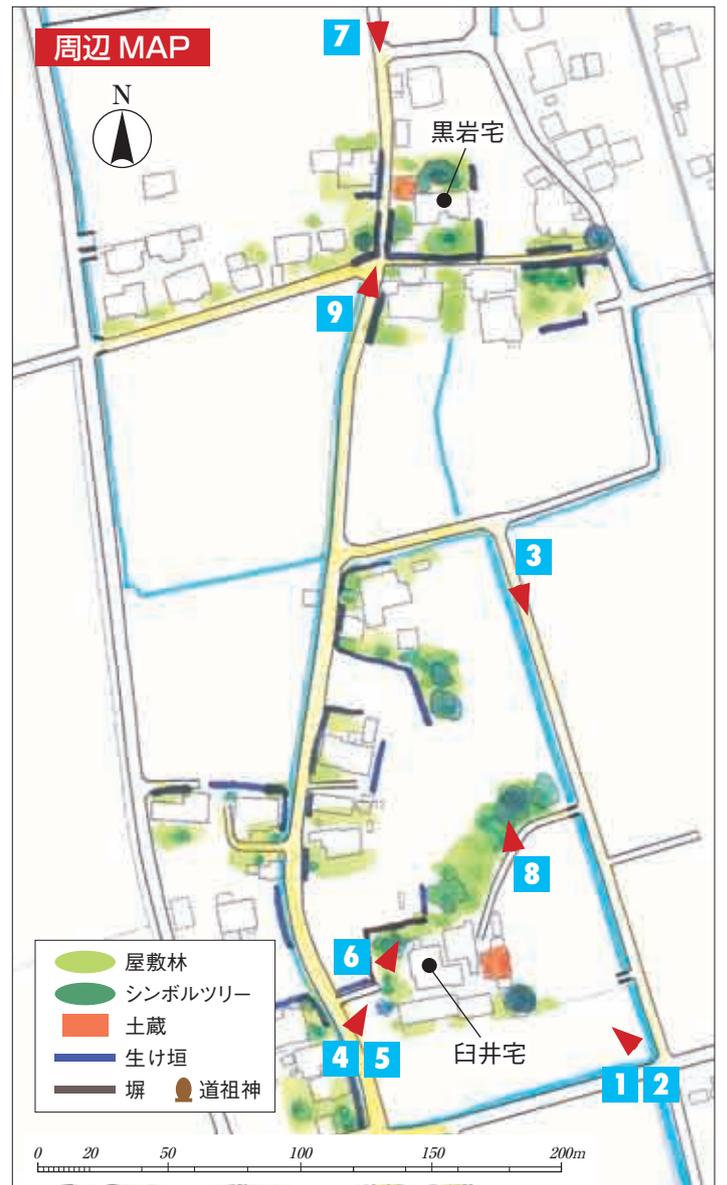
善光寺に献木されたというヒノキ



白井宅の庭



手入れの行き届いた黒岩宅 北側にあった樹木は新宅の建材に使われたそうだ



駅から徒歩圏に位置するので、新興住宅が増えつつあり、景観保護策が待たれる地域でもある。

街道沿いに植えてあったハナノキの大木が倒されたり、モミの木が折れたりするほど西風の強い地域でもある。

街道沿いの白井宅の西側にはハス池を中心とした前庭があり、その南西隅には環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に分類されているハナノキが植えられている。

# とみた 1-7 富田 山裾に広がる屋敷林

安曇野市穂高有明



蝶ヶ岳のみえる屋敷林



金森宅の屋敷林とそば畑



金森宅には樹齢 200 年ほどのケヤキがある

富田村は江戸前期に烏川の氾濫原に開発された新田村である。松本藩の地誌『信府統記』には嵩下村たけのすの枝郷から承応元年（1652）に分村したと見える。水利は烏川から取り入れた中沢と中房川から引いた富田堰により、現在は昭和38年（1963）に完成した烏川をサイホンで越す拾ヶ堰の用水も使っている。

明治以降は有明村を経て、昭和戦後穂高町となった。戦前までの80戸ほどの住宅が県道小岩岳穂高停車場線をまたいで「木戸」を構成している。中心地にはお宮の松の木で作られた小さな精米所があったが、現在は取り壊されている。隣には農協の大きな穀物倉庫が建っているが、時代の変化にともない他の企業に売却されて面影のみが残っている。

広域農道より東の県道沿いに平行して、戦後開拓地ができ、統一された家並みができたが、現在まで残っている家屋は少ない。それより南側に新しい住宅地ができ、現在では600戸以上の世帯数となって穂高では人口急増地帯である。

平成5年（1993）にはジャスコがオープンし、それを機に広域農道沿いは商店が立ち並び、大きな商



4 内山宅の生け垣を巡らす屋敷林



5 第1回穂高町景観賞(平成6年)を受賞した道 ブロック塀が生け垣になったことが評価された

業エリアとなった。富田地域は「木戸」を中心とした古いエリアと、戦後にできた新しいエリアとがはっきりと二分されている。

### 富田の屋敷林

戦前の80戸ほどの住宅をつなぐように通りがで、屋敷林も連続した景観となっている。西は妙教寺があり、南に伊夜比古神社が森を作っている。

中木戸の一部の道路拡幅を機に、道沿いのブロック塀が生け垣に変わり、平成6年に第1回の穂高景観賞を受賞している。屋敷林はスギ・ヒノキが中心だが、金森宅のケヤキは樹齢推定200年といわれている。

### 内山宅の屋敷林

富田地区の中心に位置し、敷地の北側に大きなケヤキが4本あった。古木のため枝が折れたり、落ち葉のこともあり、平成21年に伐採された。かつて板葺であった母屋は、築約150年の家を再生したもので趣がある。また長屋門の建築も美しい。

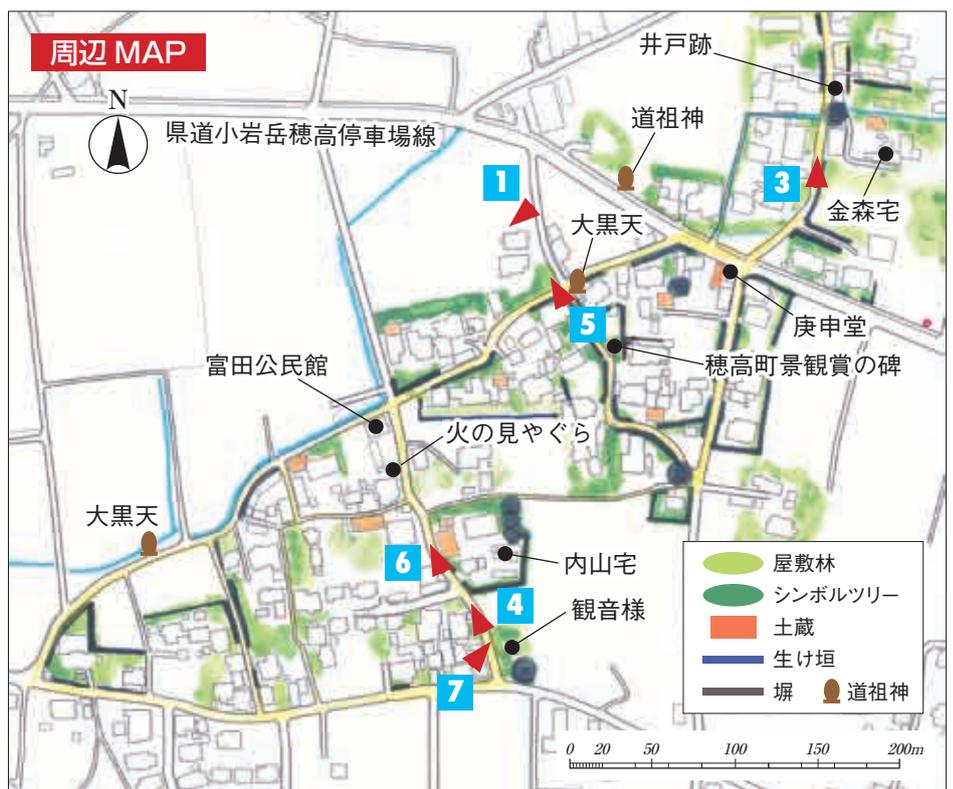
南側には「お観音様」と呼ばれる観音堂があり、サクラの古木が良い雰囲気のある場所である。



6 内山宅のケヤキは平成22年に伐採されもはやない



7 お観音様から見る富田地区の古いエリア



2 は地図外

# 1-8 きつねじま 狐島 小道の美しい屋敷林

安曇野市穂高北穂高



生け垣と屋敷林は小道の静かな景観をつくる



緑の小道は豊かな空間



細い小道は地域の生活道路

「狐島」の地名の由来には三説ある。一説は中世にこの近隣の地侍であった古厩氏・穂高氏・等々力氏・貝梅氏・渋田見氏の狐（監視者）がいた島（洲）という意味で狐島と名づけられたという説。二説目は、高瀬川・穂高川の氾濫原（洲・島）には藪林が多かったことから、狐が住んでいたのが狐島といったという説。三説目は、坂上田村麻呂に敗れた八面大王が白狐の姿になって逃げ、この地（川島の里）まで来て力尽き果てたので、村人たちは手厚くこれを葬り、村名を狐島としたという説である。

## 高橋宅の庭

安曇野高橋節郎記念美術館の南西約200mの所に湾曲した細い道が残されている。その両側は手入れの行き届いた高低、粗密さまざまなイチイ・ソヨゴ・カキツバタなどの生け垣で構成されている。その一面の落葉広葉樹が多い中に、常緑の広葉樹がほどよく配置されている美しい庭を持つ家が2軒並んでいる。ここはいわゆる屋敷林ではないが、すきま風対策、建材・燃料調達といった屋敷林の役割が少なくなった現代、「新しい屋敷林」（宅地緑化）の参



安曇野高橋節郎記念美術館と生家の屋敷林



生家の庭にある珍しい多行松



生家は民家再生され登録有形文化財として美術館の一部となる



寄棟茅葺の母屋

考になる庭である。

### 安曇野高橋節郎記念美術館

美術館は、穂高町（現安曇野市）出身の漆芸家高橋節郎の芸術を顕彰し、後世に伝える目的で狐島の高橋節郎生家に建てられた。生家の南東側に建ち、既存建屋、庭とは渡り廊下で結ばれている。

苔むした既存の庭には多行松（赤松の園芸品種）のほか、スイリュウヒバ・イブキ・イチイ・コウヤマキなどの針葉樹と、サクラ・カエデ・ウメ・ツツジ・カキなどの落葉広葉樹がほどよく配置されている。

茅葺の母屋は、江戸中期の創建と推定され、美術館開館に合わせて改修がなされた。母屋と米の一時貯蔵庫として使われていた「南の蔵」は生涯学習施設として利用されている。西側道路からのアプローチに使われた「蹴出し」、「馬車回し」として使われた古木も残っており、この地方の昔の農家のたたずまいに触れることができる。国の登録有形文化財に登録されており、屋敷林保護の一つの方法ではないかと考えられる。



# 1-9 荒神堂 シダレザクラの美しい高台の屋敷林

安曇野市穂高牧



1

広葉樹が多い寺島宅の屋敷林



2

古い土蔵が残る通り



3

寺島宅の長屋門前と屋敷林

荒神堂集落は、烏川扇状地北側の川窪沢川の段丘上に発達した集落であり、牧地区の北東部に位置する。

地名の由来は、大同2年(807)八面大王を退治した坂上田村麻呂が、堂宇を建立したうちのひとつと伝わる荒神堂があるからというが、むろんそれは伝承にすぎない。

集落の南側には栗尾山満願寺方面から流れる川窪沢川が流れ、集落の中央部には栗尾沢川が流れている。縄文時代の荒神堂遺跡があることから、古くから人が住んでいたことが知られる。荒神堂はかつては草深村に属していたが、元和3年(1617)に牧村が成立し、南を流れる川窪沢川を挟んで接していた牧村に編入した。近年は、眺望に優れていることもあり、暮らす人も増加した。

## 荒神堂の屋敷林

荒神堂は集落全体が屋敷林に覆われている。周囲には田園が広がっており、集落全体が田圃の海に浮かぶ屋敷林の島のように見える。

荒神堂の集落内には、土蔵や古い建物も多く見ら



4 南側より眺める荒神堂の屋敷林 高台に浮かんでいる島のように見える



5 隣あう屋敷の樹木 その間に水路が流れる



祀られた道祖神や大黒天



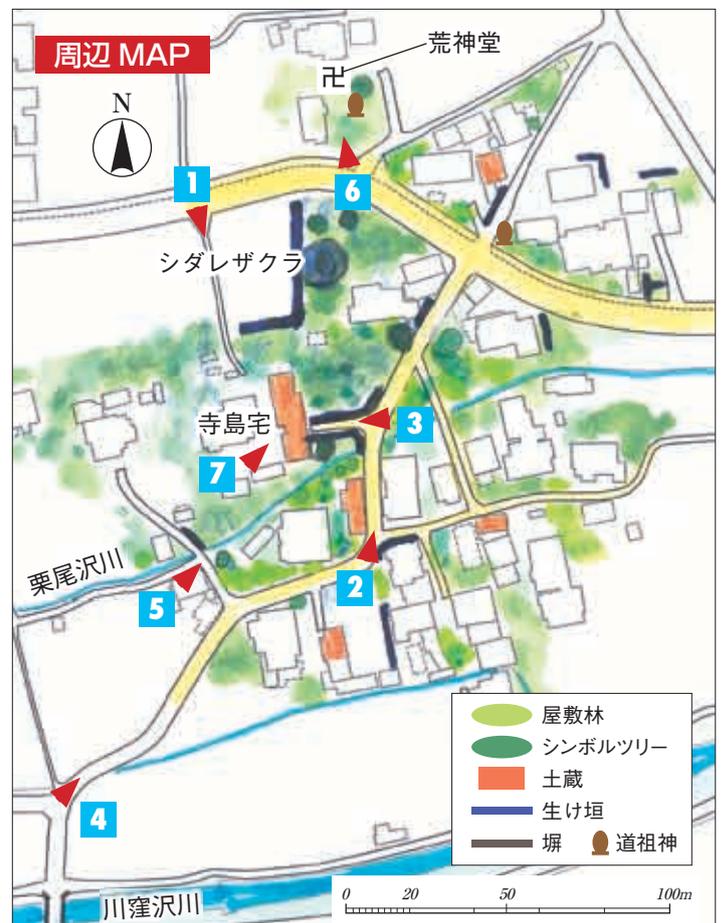
7 菊づくりにはケヤキの落ち葉が最高という（寺島宅）

れる。新設された道路が集落を迂回しているため、集落内を通る小道は細く、また湾曲していて、昔の面影がよく残されている。

集落は高台にあり、東側の安曇野一带、西・北側の北アルプス、南側の烏川沿いのアカマツ林などの眺望がすばらしい。

### 寺島宅の屋敷林

集落の中心に位置する寺島宅は、周囲を深い屋敷林で囲まれている。東側には長屋門があり、その周囲に竹が多く配置されている。門を入ると中は広く明るい。北と南に大きなケヤキがあり、庭では当主が菊づくりに励んでいる。ケヤキの落ち葉は肥料に大変よいとのこと。北側にはサクラや落葉樹も混ざり、春にはいっそう美しい屋敷林である。敷地内には土蔵、門、蚕室の三者が美しいバランスで建っている。



# ほんごう 1-10 本郷 穂高のまちなかの屋敷林

安曇野市穂高



西側にはアルプスおろしの季節風を防ぐため高いスギの屋敷林がある



平林伊三郎宅のケミヤ（作業小屋）は珍しい稲藁葺の切妻屋根である（2 3）

本郷は、『延喜式』に見える穂高神社に由来する古代穂高郷の中心地（本郷）の意味で、中世穂高氏の居館が穂高神社の裏手（西側）にあった。

江戸時代には穂高宿を中心とした町分が保高町村として分かれ、本郷は保高村となった。明治期の東穂高村を経て、大正10年（1921）穂高町となり、昭和戦後の合併で周辺の村を合併した。

地勢は、扇状地の扇央にあたり水が乏しかったが、文化13年（1816）拾ヶ堰の開削により田中や上原が開田された。穂高神社の直属の氏子であるため、神社の東向きに対して、これを恐れ多いとして集落の各戸は南向きに建てられているものが多いともいう。

## 本郷の屋敷林

穂高駅の西側にあり、ホームから見ると北アルプスと民家の屋敷林と田園が美しい場所である。比較的交通量の多い県道と北側の生活道路の2本の道に面して集落がある。2軒の平林宅には高い杉の屋敷林があり、民家と塀が歴史を感じさせる。安曇野市福祉の里の側から西陽があたった屋敷林はなお一層美しい。



本郷の集落を抜ける道



北側から見た民家の塀と屋敷林



平林良介宅の庭

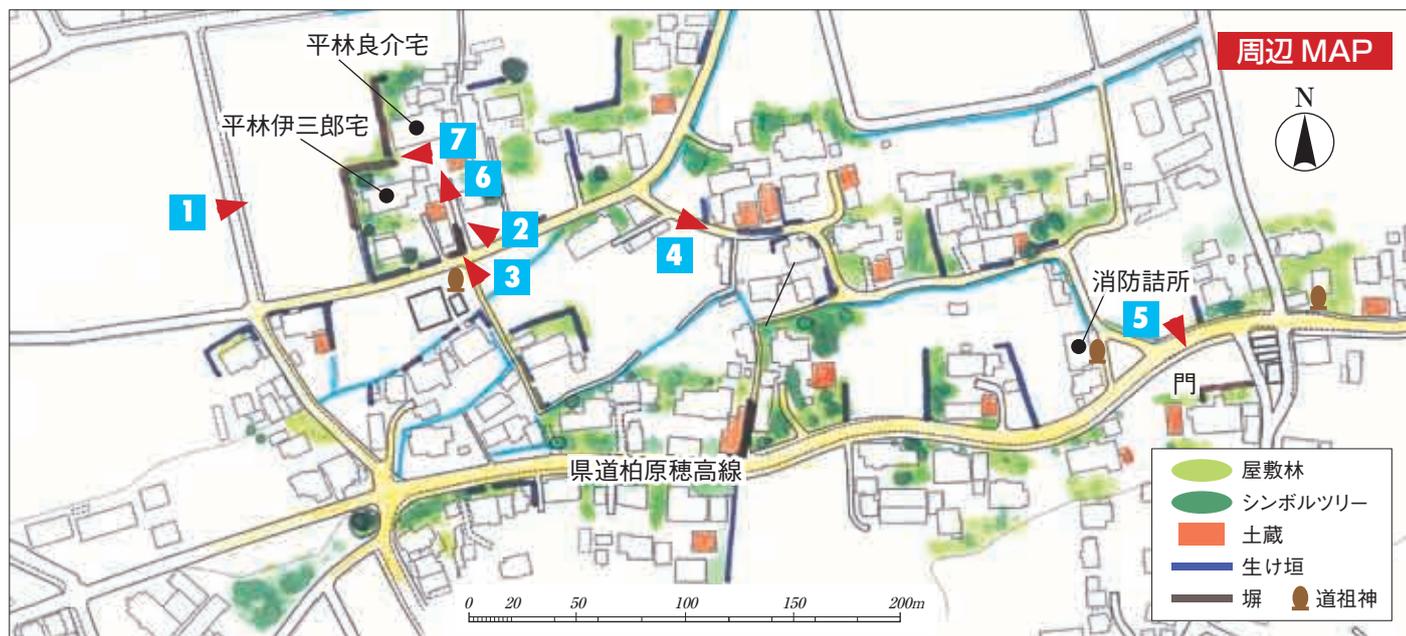


屋敷内から見た塀と屋敷林

### 平林伊三郎宅

平林宅の母屋は、明治20年ころ大町・松川の古材を利用して建設されたというが、一部二階建てで蚕室にも利用された。離れもあるが、夏は涼しいとのこと。戦後は20名ほどの人が疎開して暮らしていたという。

土蔵は曾祖父が明治17年に建設したことが梁の墨書で知られる。近年改築されて趣味の部屋になっている。ケミヤ（作業小屋）は土蔵より古く、この辺りでは茅は入手困難であったため、稲藁葺の屋根である。



# とどろき 1-11 等々力 水郷に浮かぶ屋敷林

安曇野市穂高



大王わさび農場に向かう小道から北方を見る



穂高神社から流れる欠の川（矢原堰の流末） 三川合流地点に流れる



オリンピック道路から西を見る

烏川扇状地の扇端に位置するため湧水が多く、水郷地帯を形成している。欠の川（<sup>かけのかわ</sup>矢原堰の流末）や穂高川が流れ、わさび田が多い。

中世の土豪に等々力氏が見え、周囲を川に囲まれた戦国時代の等々力城跡がある。集落内には道祖神が多く、辻々の6か所に双体像が祀られており、昭和50年のNHK朝の連続テレビ小説「水色の時」を記念した道祖神公園もある。

観光名所の大王わさび農場もこの地域に含まれ、平成9年に開通したオリンピック道路により車の流れもだいぶ変わったが、この地域から見る北アルプスと田園は安曇野を象徴する風景である。

## 等々力の屋敷林

旧家が多いので屋敷林も多い。一方このあたりはわさび田も多く、日照の確保のため常緑樹が少ない場所でもある。いたる所にわさび田を作った残土で小山が築かれ、この地域の特有な風景となっている。アカシアなど河川木の多い場所でもある

## 等々力家住宅

江戸時代の等々力村の庄屋を勤めた家で、松本藩



静かな町のたたずまい



等々力家住宅の屋敷林



望月宅（白金区）の屋敷林 礫山とゆかりのある家



道祖神や石仏を祀った辻



道祖神公園近くの欠の川



1 2 3 8 は地図外

主がこのあたりで鴨猟をする際は「御本陣」として休息所となった。母屋には殿様座敷があり、長屋門は安曇野市の有形文化財に指定。庭園は桃山様式をくむものといわれ、ビヤクシンは市の天然記念物に指定されている。屋敷の南西側に大きな屋敷林があり見事である。

# 1-12 しろかね 白金 文化の香薫る屋敷林

安曇野市穂高



北より見る白金地区 左端が厳島神社



相馬安兵衛宅の洋館内部



相馬宅の洋館と庭園 一般公開はされていない

烏川扇状地の扇端に位置し、集落は犀川の旧河床を流路とする万水川よろずいがわの自然堤防上に立地している。集落の周辺は低湿地で、湧水を利用したわさび田が広がっている。付近の三枚橋からは古墳時代から平安時代にかけての遺跡が見つかっており、古代からの水田が営まれた地域と考えられる。

中世の史料には、穂高神社の式年造営に白金郷が奉仕した記録がたびたび見える。江戸時代は白金村として一村をなし、明治期の東穂高村を経て、昭和戦後穂高町となった。

## 白金の屋敷林

田園風景の中にまとまった集落である。なかでも相馬安兵衛宅は、新宿中村屋の創設者・相馬愛蔵の生家である。相馬宅の屋敷林は、スギ・ケヤキをはじめとした多くの種類の樹木から構成されており、住宅の北西隅に多くが配置されている。住宅と屋敷林の間の庭や住宅南西側の庭も美しい。前者は日本式庭園、後者は刈り込まれた針葉樹の多い庭となっている。

## 相馬安兵衛宅

建物は南北に長く、南側は天井の高い洋風応接間



白金区で整備した湧水公園



奥が相馬宅の洋館と屋敷林



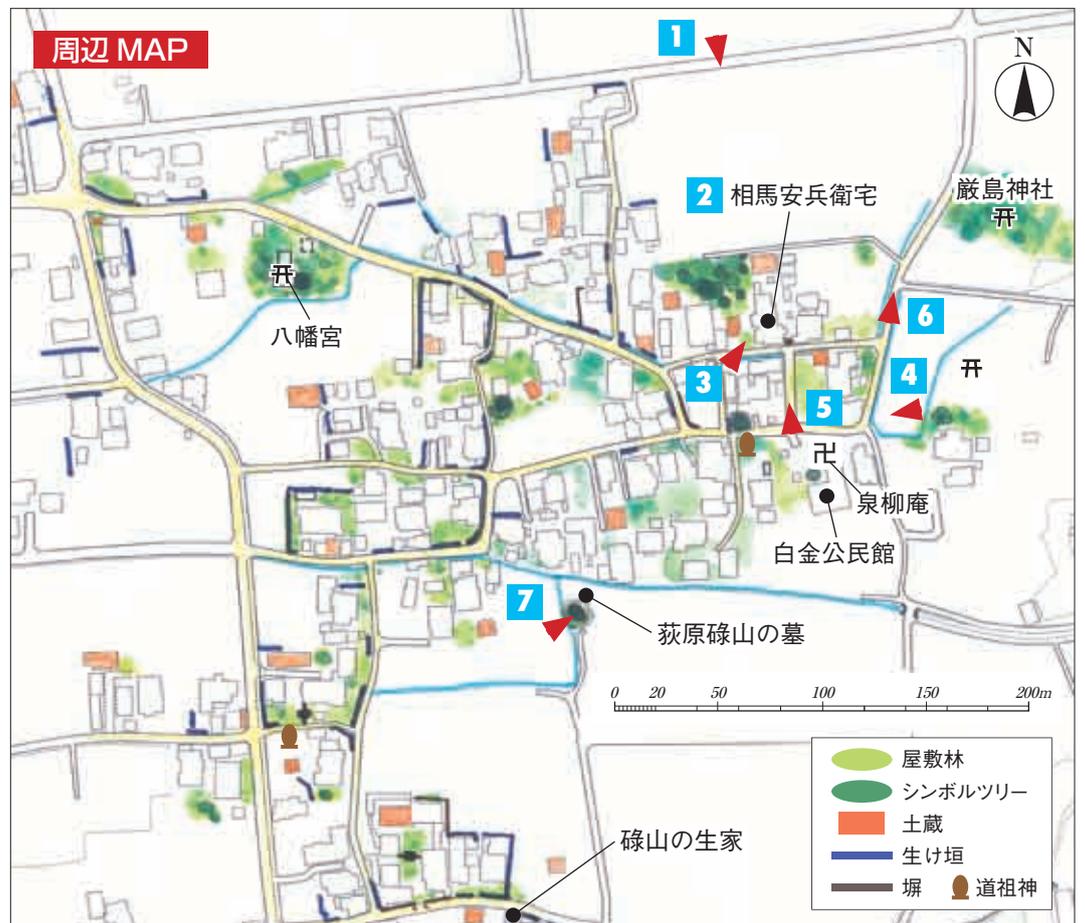
厳島神社



荻原碌山の墓からみる白金地区

となっており、相馬愛蔵や妻の黒光に関する資料が残されている。ここは白井吉見の小説『安曇野』の舞台となった建物で、彫刻家荻原碌山も時おり相馬宅を訪ねては相馬夫妻と談じていた。建物の北側は、日本式庭園に面した座敷となっている。

集落の東の段丘下には、相馬宅に骨接ぎの術を教えたという河童を祀った小祠の森があり、現在は厳島神社を祀っている。また、集落の南西には荻原碌山の生家と墓がある。



# 1-13 たなか 田中 拾ヶ堰沿いの屋敷林

安曇野市穂高



道祖神と田中の屋敷林 「文政七年」(1824)と刻まれた道祖神



二十三夜塔は女性たちの月待ち講で建てたもの



土蔵のある古い通りから常念が見える

田中は烏川扇状地の扇中央氾濫原上にあつて、古代・中世ころまでは穂高沢（本沢・殿沢）、中沢、芝沢などの自然流を用いてわずかに開拓されたものと思われる。

文化13年（1816）拾ヶ堰の開削により、田中の東半分は拾ヶ堰の水を主用水にするようになり、また拾ヶ堰開削により余力の生じた穂高沢などの水を利用して、拾ヶ堰より西（上段）の開発も進められた。

寛文2年（1662）の「保高組田中軒別書上絵図」には「千国道」の名称で、田中の西を柏原に向かう道が描かれている。穂高町における「千国道」の初見は文明15年（1483）の穂高神社文書である。

田中の名が示すとおり開発の遅れた地域であったが、江戸後期の拾ヶ堰の開削により一気に水田化が進んだものの、親村の保高村からは幕末まで独立することはなく、枝郷のままであった。平成16年「担い手育成基盤整備事業」も完了し、大型農業機械による稲作が可能になった。

## 田中の屋敷林

田中の屋敷林は拾ヶ堰に架かる田中中央橋、田中



伊藤敏雄宅の土蔵とまちなみ



拾ヶ堰の流れる屋敷林 左側は拾ヶ堰沿いの「あづみ野やまびこ自転車道」。



すでに解体された繭倉



地下にある蚕種や桑の保管場所



伊藤宅の繭倉 一部に糞を掃除する仕掛けがある。

南橋周辺に見事なものが多く残されている。個々の屋敷林は大きくはないが、旧家が多く、生け垣・土蔵も残されており、田中中央橋のたもとにある道祖神、遠望される常念岳や拾ヶ堰（並走するあづみ野やまびこ自転車道）と一体となって安曇野を代表する景観を形成している。樹種はスギ・ヒノキ・マツ・イチイなどが多い。

### 伊藤敏雄宅

伊藤敏雄宅は拾ヶ堰右岸にある。この付近は生け垣や板塀が多く、堰と交差する古道の雰囲気をよく残している。南側の舗装市道から宅内に入ると、南側に二階建の蚕室がある。現在車庫として使われている建物の地下には3間×3間の部

屋があり、室温が一定に保たれ蚕種の孵化時期の調整や、桑の保管などに使われていたという。西側には棟木に「万延二年（1861）築」とある土蔵がある。

樹木は主として西側に配され、西の拾ヶ堰側から見ると、手入れの行き届いた生け垣と樹木の奥に古民家がひととき美しく見える。



# くぼた 1-14 久保田 栗尾道沿いの屋敷林

安曇野市穂高柏原



1

栗尾道沿いのたたずまい 手入れのゆきとどいた生け垣と屋敷林が美しい岡村宅



2

大きなケヤキの木と塀 屋敷が時代を感じさせる望月宅

「久保田」の地名は、窪んだ地形から称えられたといわれ、一時期村名として「窪田」の字があてられていたこともあったという。

地勢は、烏川右岸に広がる扇状地の扇頂付近に位置する。現在は水田が多いが、扇状地であるため水の確保が難しくカシワなどが生い茂り、山林原野の地であった。

元禄11年（1698）に柏原村の内原に開発が行なわれた。それは犀川から水を引く矢原堰の成立によっ

て、それまで矢原村が用いていた西山から流れる矢原沢の水に余裕が出たからと考えられる。農民たちが集落をつくり「当新久保田」（久保田新田）の名がついたが、幕末まで親村柏原村の枝郷であった。

集落内を栗尾道の一つである、豊科新田から牧の栗尾山満願寺へ登る道が通っている。成相新田宿の芝切（開発者）の後裔にあたる新田町村の庄屋の藤森与兵衛がこの栗尾道にたくさんの道標を建てた。

寺子屋師匠で謡の師匠でもあった安田庄司は、明治初期、研成学校の事実上の支校である西柏学校建設の先頭に立って尽力し、自宅を仮学校として使用するなど、柏原村新郷における寺子屋から近代学校への橋渡しをした。

## 久保田の屋敷林

久保田の屋敷林は、豊科から穂高牧の満願寺へ続く栗尾道の近くにある。栗尾道の変形五差路前の望月宅や、敷地の東側にケヤキがあり、北側には広葉樹・落葉樹のある屋敷林を持つ家がある。栗尾道よりやや北に離れて、大きなケヤキのある安田宅がある。この家の屋敷林は南側に多く配置され、敷地内



安田宅にある大きなケヤキの愛称は「トトロの木」



変形五差路のオープンスペース



栗尾道の住民の手作り看板がある



常念岳を望む望月宅の屋敷林

の樹種はケヤキが多いが、南側の小道のさらに南側の家の針葉樹と一体となって見える。

### 久保田の家並み

変形五差路の前にある望月宅は、交差点に面した東側に大規模な蚕室が建っており、東側から北側には美しい土壁と板壁で造られた塀がある。また、北

側には石垣や土手も設けられている。交差点に栗尾道の案内標識が立てられている。

大きなケヤキのある安田宅は、母屋は比較的最近建築されたものだが、美しい切妻屋根となっている。この家の南側を通る小道は、家の南西側で鉤の手に曲がっており、雰囲気が良い。



# 重文・曾根原家住宅

曾根原家住宅は、長野県内に残っている木造本棟造系の民家のうちでは最も古い建物であり、建築年代は定かでないが、17世紀中頃の建築と考えられている。

時の幕府の出した「慶安御触書」と同時期であり、農民の生活も住宅に厳しい制約を受けていた時代に、農民の住宅としてこのような規模の建物が建築されていたことは、当家が農民の中でも高い位置にあったことを示すものと思われる。

この建物の特長は、切妻屋根の<sup>ひら</sup>平の側<sup>ひら</sup>に入口がある<sup>ひら</sup>平入の建築であり、また間取では表側の客座敷および裏側の寝室が本建（身舎）より突き出た形となっており、後世に完成する<sup>つまいり</sup>妻入の本棟造の形式のように大屋根の中に収められていない。これは、本棟造の様式ができあがるまでの過程を示す姿として、江戸時代の民家研究には重要な建物である。

曾根原家住宅は、昭和48年6月国の重要文化財に指定され、昭和51年10月文化庁の指導により、建築当時に近い姿の解体復元修理に着手し、昭和52年12月完成した。



重要文化財・曾根原家住宅の外観



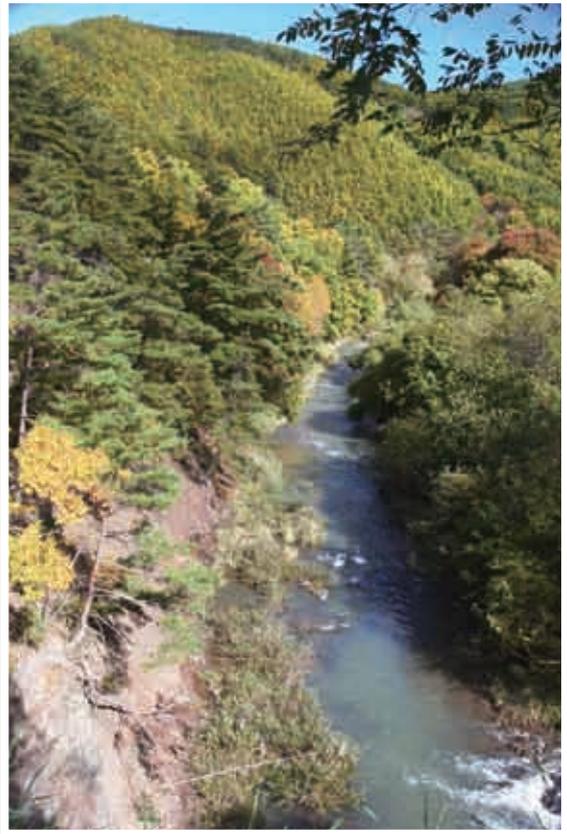
囲炉裏のある才工（居間）

## 2 明科

明科は安曇野市の北東部に位置し、東の筑摩山地と犀川および高瀬川の河岸段丘によって形成されている。地域の約3分の2は山地で、平地は松本平の最低部に位置し、ここで犀川・穂高川・高瀬川の三川が合流する。一本となった犀川は筑北山地の中を貫流し、善光寺平で千曲川と合流している。

明科は湧水にも恵まれているが、平坦地や田畑は少ない。山に囲まれ風の影響も少ないことから、他の地域に比べて屋敷林の規模も小さくその数も限られている。

明科町はながく東筑摩郡に属していたが、平成17年（2005）の町村合併で穂高町・豊科町・堀金村・三郷村と合併し安曇野市となった。



# しおがわら 2-1 塩川原 長屋門のある屋敷林

安曇野市明科七貴



塩川原の真島宅の長屋門と屋敷林

塩川原が含まれる明科七貴地区の母体は、明治8年（1875）に成立した北安曇郡の七貴村で、江戸時代の中之郷村・鵜山村・押野村（上押野・下押野）・塩川原村・萩原村・萩原新田村からなっていた。それが昭和戦後の町村合併で、東筑摩郡の中川手村・上川手村・東川手村、北安曇郡陸郷村の一部と合併して、東筑摩郡明科町をつくっていたが（このとき中之郷と鵜山地区は北安曇郡池田町に編入）、平成17年（2005）に南安曇郡の4町村と合併して安曇野市となった。したがって七貴地区は、行政上は北安曇、東筑摩、南安曇と変遷したのである。

明科七貴地区は、高瀬川の左岸と犀川の左岸に挟まれた段丘上に位置し、高瀬川と犀川が合流する岬状の丘陵を押野崎と呼び、その尾根の北方には大穴山がある。この大穴山の山麓、旧七貴村の東半から旧陸郷村の範囲に、古代から中世にかけての大穴庄があった。

## 五カ用水

水利に恵まれない地帯で、北安曇の農具川支流の内川から約12<sup>キロ</sup>にわたり取水し、七貴地区の押野・

塩川原・萩原、陸郷地区の中村・小泉の5か村に水を引いた。この五カ用水が小泉まで完成したのは天保3年（1832）のことであった。

近世は善光寺街道や千国街道の本通りからは外れたものの、松本平と北安曇を結ぶ交通の要衝で、明治35年（1902）には犀川に犀川橋が架けられ、大正3年（1914）には高瀬川に安曇橋が架けられ、大町、穂高に乗合自動車走った。養蚕の盛んな地域でもあった。

## 塩川原の屋敷林

塩川原の特徴としては、高瀬川・犀川の段丘に発達した地形であり、北面に大穴山の山地を配して南側に傾斜していることである。東西に連続した山麓の狭い耕地に集落が点在している。したがって、集落も小規模となって、北山に防風を期待しているので、安曇野のように、平坦地の中に散在する集落をそっくり包み込むような形の屋敷林は見あたらないようである。

それでも場所によっては、南からの風に対するかのように、屋敷の南側や東側に往年の樹木が残って



真島宅の長屋門を北から見る



堀内宅の長屋門



真島宅を西から見る



真島宅の長屋門の角に大きなケヤキが3本

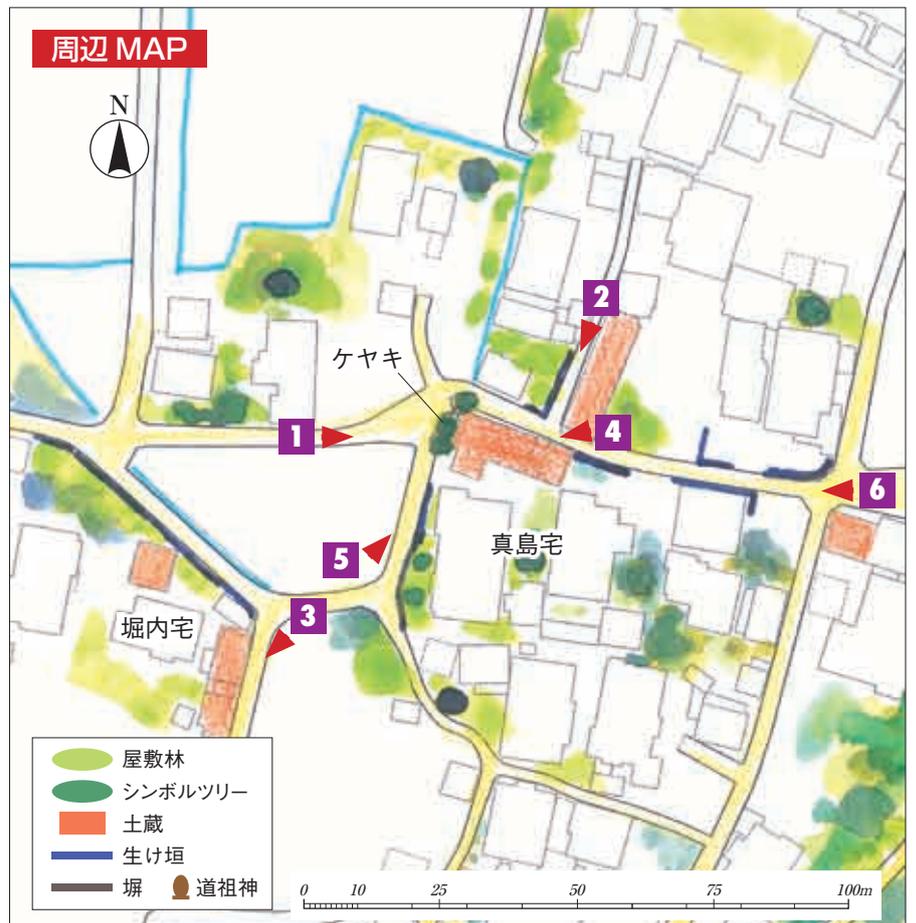
いる。また、三川合流地点の付近では南西風に対するかのように、川筋に大きいケヤキの大木が列をなして繁茂し、地区全体の防風林の体をなしている所もある。

### 塩川原の集落

塩川原は眼前に犀川を見下ろす眺望のよい所である。塩川原山の東麓には須恵器窯跡があり、古代の布目瓦も出土している。



緑に囲まれた小道



# 篠ノ井線廃線敷

旧国鉄篠ノ井線は明治35年（1902）に全通し、長野県の南北を結んで多くの人や物資を運搬してきた。昭和45年（1970）に電化されて蒸気機関車が姿を消し、昭和63年（1988）には新白坂トンネル完成にともない、旧三五山トンネルから旧第二白坂トンネル間の約4<sup>km</sup>が廃線となり、86年間の役目を終えた。

この区間はレンガ造のトンネルや信号所など当時の面影がよく残っている。漆久保トンネルや三五山トンネルも改修により通行できるようになり、ウォーキングコースとして整備された。沿線には3万本ともいわれるのケヤキ並木が続き、紅葉や新緑の時期には多くの人を訪れる人気のコースとなっている。



レンガ造の漆久保トンネル



ケヤキ並木の続く廃線敷

# 3 堀金

堀金は安曇野市の西部に位置し、常念岳を源とする烏川扇状地によって形成されている。地域の約3分の2は山地で、標高700m付近から万水川までが水田を中心とした平地となっている。

堀金には東傾斜の田園風景の中に比較的規模の大きな屋敷林が点在し、常念岳を背景に美しい景観を形成している。



# 3-1 いわはら 岩原 山麓にたたずむ屋敷林

安曇野市堀金烏川



道路沿いの生け垣と板塀に囲まれた屋敷林



道辻に立つ新屋の双体道祖神



田多井堰沿いに続く、美しい石垣と生け垣

岩原の集落は烏川扇状地の扇頂に位置し、その地名は石混じりの畑が多かったことによるものであろうが、烏川上流には定規岩・冠岩・屏風岩などの大きな岩が点在し、これが地名の由来となったとの説もある。

中世には烏川から引いた岩原堰によって開発が始まったようで、西の背後には岩原城跡がある。城主は細萱氏から仁科氏の支族堀金氏に代わったとされる。その麓には明治の排仏毀釈で廃寺になった安楽寺跡がある。

江戸時代、寛永4年（1627）の検地の際に堀金村から独立し、寛永19年には139石余とみえる。烏川の奥には松本藩の藩林があり、岩原村の庄屋山口家はその材木奉行を兼務した。山口家は南安曇の諸村で構成される長尾組の大庄屋も長く勤めている。

## 岩原の屋敷林

県道鍋割穂高線（通称・山麓線）と田多井堰に挟まれた新屋という小さな集落が、複数の屋敷林を形成している。S字にカーブした東西道路が屋敷林の景観に変化を与え、カーブ正面のケヤキの大木がラ

カーブの正面に立つケヤキの大木



4



5

石垣に囲まれた屋敷林とケヤキの大木



6

北側から見た山麓線沿いの屋敷林



7

ケヤキの大木へと続く緑の小路

ンドマークとなっている。また、田多井堰沿いには美しい石垣と生け垣が連続し、屋敷林と農地を明確に区分している。

### 新屋の道祖神

岩原村には北から北海道、上手、中村、新屋などの集落があるが、新屋集落の山麓線沿いに西面し、基壇を上げ屋根を掛けた双体道祖神がある。高さ120センチ、幅90センチの大きな白い花崗岩の自然石を用いており、背面には「当村石師千代吉」と刻まれていて、製作した石工の名が知られる。石工の名が刻まれた道祖神碑は南安曇に6基、北安曇に5基と少なく珍しいという。



# 3-2 川口 かわぐち 常念岳の麓の屋敷林

安曇野市堀金烏川



花に彩られた丸山宅のアプローチ



齊藤宅の屋敷内に建つ漆喰海鼠壁の土蔵



多様な樹種で構成されている丸山宅の屋敷林

川口集落は、岩原・倉田・扇町の村境に位置し、上堀金堰と下堀金堰の取入口に近いことが地名の由来といわれている。寛政4年（1792）から文政4年（1821）にかけて、川口村として独立しようとしたが、戸数が足りなかったために認めらず、現在も行政区分上は岩原・倉田・扇町の各区に属している寄り合い集落となっている。

親村の一つ、岩原は寛永4年（1627）の検地の際に堀金村から独立し、岩原村として成立したが、倉田は元禄年間（1688～1704）に上堀金村から新切（開発）され、扇町は元禄12年（1699）に柏原・下堀金両村の入会原に開発されたが、それぞれ村としては独立せず、上・下堀金村の枝郷にとどまった。

そのくらい後発の地域だったのは、水に乏しく容易には水田が開かれなかったためであるが、江戸後期に開かれた拾ヶ堰により、下流の余水を上流側で使えるようになったりして、現在のような一面の水田風景が生まれたのである。

## 川口の屋敷林

常念岳へと続く県道沿いの北側に、美しい屋敷林



母屋の手前に建つ斉藤宅の旧蚕室



道端の石垣の上に立つ馬頭観音



水鏡の田んぼに映る美しい屋敷林

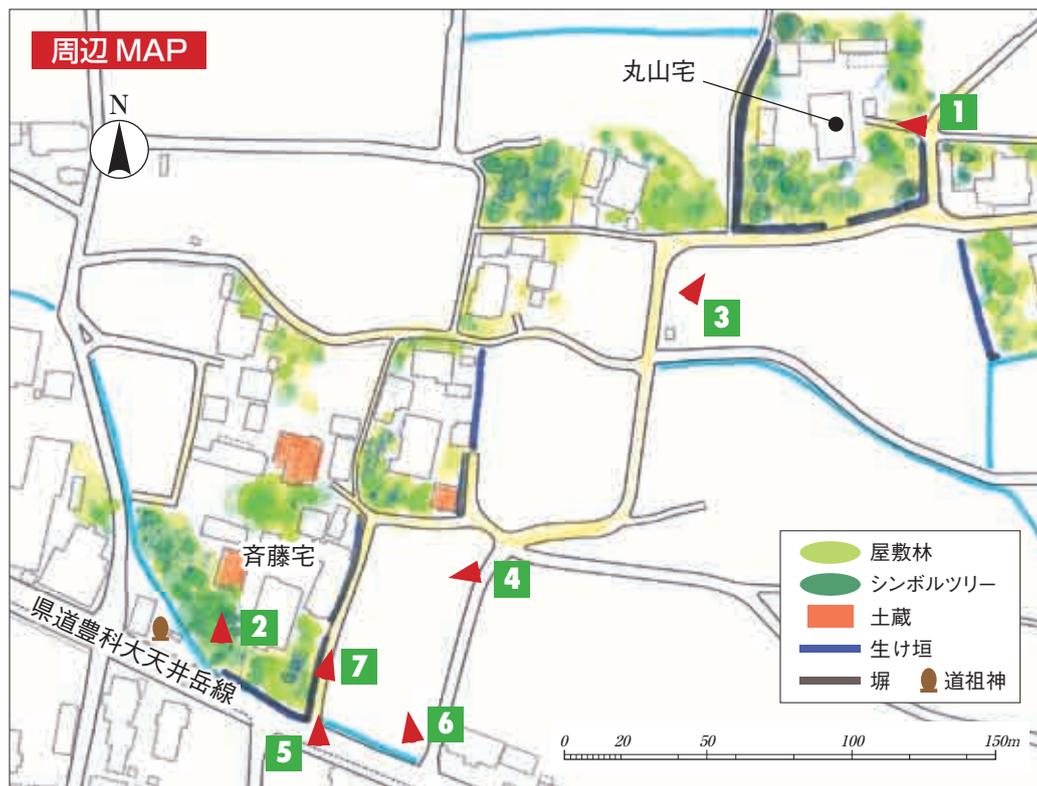


道路沿いに続く直線上の石垣と生け垣

が点在している。どの屋敷も敷地が広く、未舗装の道路や旧蚕室の建物、海鼠壁の土蔵などが、屋敷林の景観のアクセントになっている。屋敷林の背後には常念岳が間近に迫り、田園風景と北アルプスとの調和が美しい。

### 川口の石造物

須砂渡に向かう県道の脇に、6基の石碑を祀った一角がある。いずれも江戸後期のもので、奥から二十三夜塔、庚申像、天神宮、双体道祖神、道祖神文字碑、念仏供養塔であるが、どれにも造立者は「川口村中」と彫り込んである。



# 3-3 扇町 おうぎまち 道沿いに続く緑の屋敷林

安曇野市堀金烏川



唐澤宅を西から見る



かつては県道であった静かな通り



堀廻（新堀）堰沿いに続く桜並木

扇町は、堀金・柏原両村の入会原を元禄12年（1699）に開墾してできた集落である。集落を東西に貫く道を中心に南北に町割され、北は柏原村と接している。集落全体が扇を広げた形となっていることから、末広りの縁起を含めて扇町と呼ばれるようになった。

この一帯が水田化されるのは文化14年（1817）以降で、拾ヶ堰の開削後のことである。拾ヶ堰の開削によって、下堀金堰に余水が生まれたことで開田が可能となったが、水田は全体の3分の1に過ぎなかった。下堀金村の枝郷として幕末に至った。

## 扇町の屋敷林

南側のバイパス道路完成によって、県道の旧道沿いに古い集落と屋敷林が昔のまま残っている。水路のある旧道沿いにケヤキの大木が点在し、両側のイチイの生け垣と合わせて、緑がトンネルのように連なっている。敷地の南側には雑木林が残り、自然樹形の落葉高木が背景の常念岳の美しいアクセントとなっている。また、集落の西側には堀廻（新堀）堰沿いの桜並木があり、桜の名所でもある。



唐澤宅の水車小屋跡



常念岳を望む通り



扇町の変形三差路



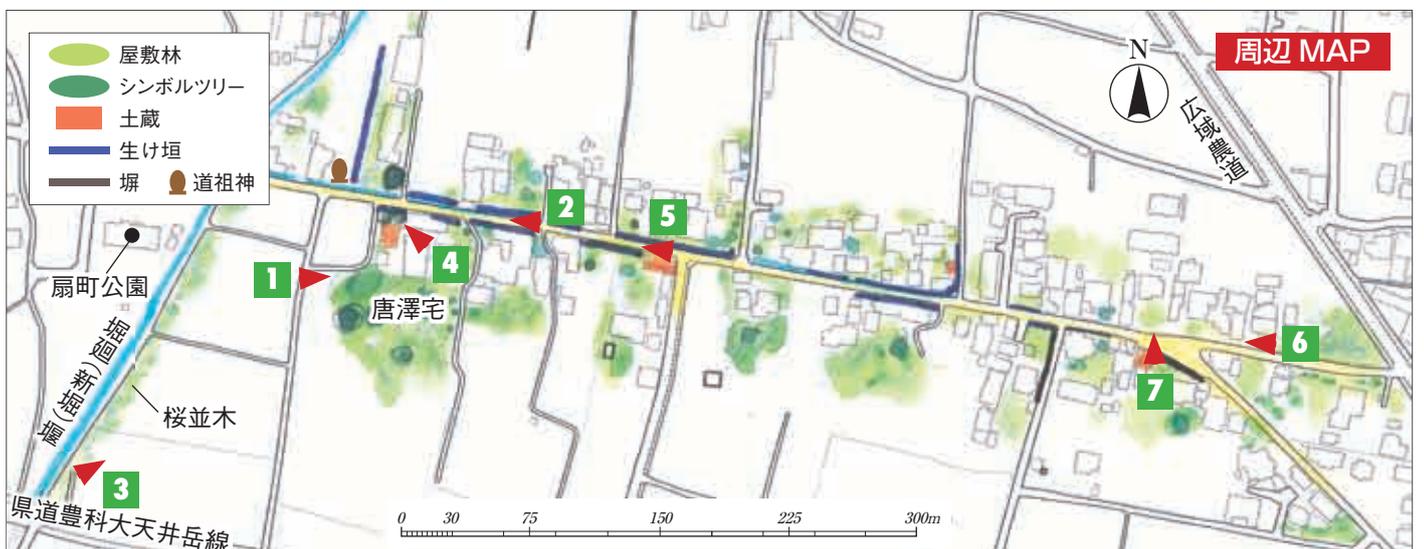
昭和 30 年代の共同井戸跡

集落内の旧道に沿って石積み水路が流れ、本棟造などの規模の大きい家屋や、瓦屋根に白壁の立派な土蔵が建ち並んでいる。集落内には阿弥陀堂跡の碑があり、集落境には道祖神と馬頭観音が並んだ祠や、二十三夜塔や庚申塔などが並んで祀られている。

### 唐澤宅の屋敷林

約1,650坪の敷地にケヤキ・キハダ・サイカチ・

シナノキなどの多彩な広葉樹が植えられ、屋敷林というよりは雑木林の森のようである。母屋の建物は築約85年で、水田に面した西側には「おかしら」の文字が刻まれた土蔵、街道に面した北側には水車小屋も残っている。現在は鉄板に覆われている水車小屋の屋根は以前は茅葺であった。



# 3-4 しもほり 下堀 河岸段丘沿いの屋敷林

安曇野市堀金烏川



街道沿いの屋敷林と本村の道祖神



土蔵が残り板塀が続く趣のある小路



水路や源氏塀が美しい屋敷林沿いの小路

下堀は烏川扇状地の扇端に位置し、中心となる本村集落の東は河岸段丘崖となって一段下がっている。烏川の自然流を利用した下堀金堰によって古代から開発された地域で、<sup>あご</sup>字中村からは土師器が出土している。

下堀金堰は途中で神明沢・中沢・北沢に分かれるが、中沢は別名を二日市場堰といい、このあたりに中世の二日市場があったことを示している。古地図には古町・町浦・町はりという町割に関係した地名も見られる。

江戸前期の慶安4年（1651）の検地で上・下堀金村に分かれている。文化13年（1816）の拾ヶ堰開削は下堀金村を含む10か村によって計画されたもので、同村の平倉六郎右衛門は測量と土木工事の指揮に当たっている。この拾ヶ堰開削によって下堀金村の石高は230石余増加した。

## 下堀の屋敷林

屋敷林の残る集落は、拾ヶ堰西の諏訪神社の東側と、河岸段丘沿いの二つの地区に分かれている。諏訪神社の東側は表参道にあたる旧道沿いに屋敷林が



4 河岸段丘上段の大木が形成する緑のトンネル



5 常念岳を背景にした美しい田園風景と屋敷林



6 段丘崖に沿って斜面林を形成している黒岩宅の屋敷林

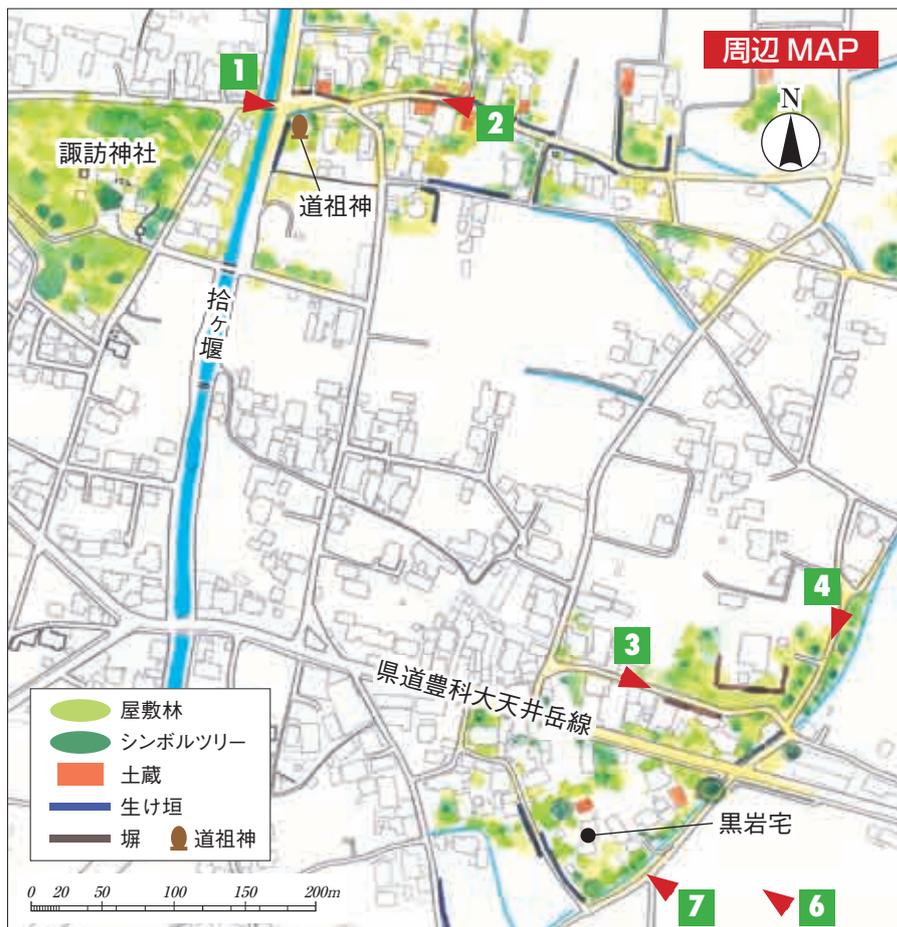


7 河岸段丘沿いに連続している屋敷林

点在し、板塀や土蔵とともに歴史的な風情を感じさせる。河岸段丘沿いには南東斜面に沿って屋敷林が斜面林となって連なり、常念岳を背景に美しい田園風景を形成している。また、集落内には傾斜地に小路が多く残り、多様な樹種の屋敷林と石垣や生け垣が独特の集落景観となっている。

### 黒岩宅の屋敷林

河岸段丘沿いの高台にあり、南風を防ぐために南側にも屋敷林が広がっている。昭和30年代に陽あたりを確保するため、南側のケヤキの大木を3、4本伐採したようである。以前あった本棟造の母屋は昭和50年代に建て替えられたが、敷地内の4棟の土蔵は今も残っている。



5 は地図外

# 3-5 にしこうじ 西小路 小路沿いの屋敷林

安曇野市堀金烏川



1

カーブした小路の正面に位置する米倉宅の屋敷林



2

古民家再生した建物とクロマツが調和した米倉宅の屋敷林



3

広大な敷地を覆う唐沢宅の屋敷林

西小路が含まれる上堀は江戸前期の慶安4年(1651)の検地で堀金村が上・下堀金村に分かれたものだが、ここは烏川からの自然流を上堀金堰として利用し、古くから開発され地域である。堀金小学校付近の遺跡からは平安前期の住居址が見つかり、「惣道寺」と書かれた墨書土器が出土している。

ここに古道の仁科道が通っており、中世には仁科氏の支族・堀金氏が居館を築き、城下集落が形成された。居館跡は通称「堀屋敷」と呼ばれ、その前を大庭といい、ほかにも蹴出・佃・番匠田などの地名が残っている。また、南の町尻には小林寺・大覚寺・大勝寺の寺を集め寺町をなしていた。

西小路はこうした城下集落の西の部分で、堀金氏支配下の地侍たちが集住した区域と考えられる。

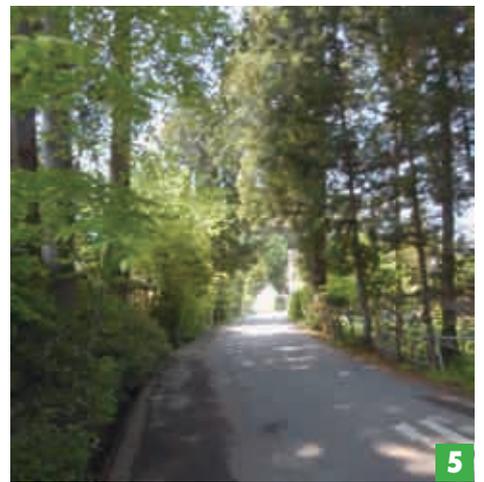
## 上堀西小路の屋敷林

諏訪神社から北西に向かう街道沿いに、大規模な屋敷林が連続している。広大な敷地に立派な庭のある屋敷林も多く、諏訪神社の寺社林から連なる迫力のある森のような景観となっている。屋敷林は北側に比較的多く配置され、スギ・ヒノキ・ケヤキの高



4

水鏡に映る美しい屋敷林



5

屋敷林の中を通る緑のトンネルをなす小路



6

道端の桜の古木の下に立つ双体道祖神



7

岩原宅のコナラの古木の切り株（元長野県天然記念物）

木が多く見られる。かつてケヤキの巨木があり、巨大な切り株が残されている屋敷もある。

### 米倉宅の屋敷林

玄関のクロマツは樹齢約300年で、門かぶりになっている。庭の手入れは2年に1度、庭師一人で約5日が行い、剪定した枝は木の根元に置き肥料としている。母屋は約13年前に外観を活かして古民家再生したもので、庇が吊構造となっている北側の座敷は、堀金の寺の庫裏を移築して利用している。



# 3-6 南原 みなみはら 松本城の城門に映える屋敷林

安曇野市堀金烏川



明治時代に松本城から移築した青柳宅の旧松本城城門（安曇野市有形文化財）



道端に並ぶ道祖神などの石碑



屋敷林を背景にした青柳宅の海鼠（なまこ）壁の土蔵

南原は、「原」という地名が示すように、長らく開発の手が付かず原野になっていた場所である。それが江戸前期の延宝6年（1678）以前に、烏川からの上堀堰の利用と、田多井堰や神沢・中沢・寺沢の末流を集める深沢の水によって原野を開き、足りない分は梓川から引いた小田多井堰の余水ももらって、上堀金村を親村として開発された集落といわれている。その後、文化13年（1816）に奈良井川から水を引いた拾ヶ堰が開削され、さらに水田が開かれた。

## 南原の屋敷林

南原には集落の北端に、田園の中に独立した立派な青柳宅の屋敷林がある。道路側には明治時代に松本城の旧城門を移築した門があり、これに沿って石垣と生け垣が続いている。以前と比べて屋敷林は3分の1程度に減少したが、本棟造の母屋と門、多様な樹種により構成された屋敷林が田園風景と見事に調和している。

## 南原の道祖神

青柳宅の門前、道路の向かい側の基壇上に5基の石碑が並んでいる。寛政10年（1798）の念仏供養碑、



4 水鏡に映る、多様な樹種により構成された美しい屋敷林



5 道路沿いの美しい石垣と生け垣

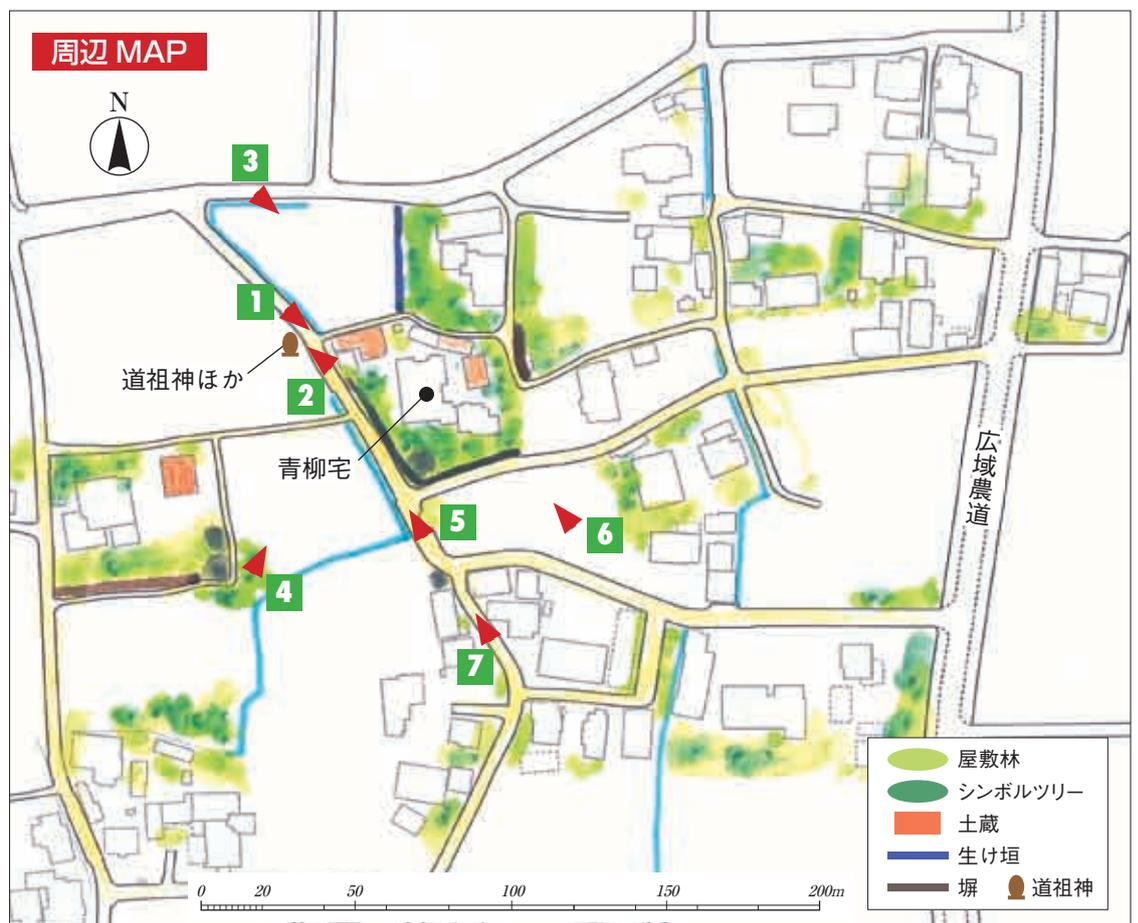


6 屋敷が隠れてしまうほどの緑の森



7 道路沿いにあるマツの古木と屋敷林

天保12年（1841）の庚申塔、無銘の庚申塔と二十三夜塔のほかに、文政12年（1829）の酒器を持つ双体道祖神が立つ。像の向かって左には「上堀金南原」と刻まれている。毎年2月9日にはこの道祖神前で甘酒祭りが開かれる。子供たちが前を通る人に甘酒を振る舞い賽銭をもらう古くからの祭りである。



# なかほり 3-7 中堀 拾ヶ堰が流れる屋敷林

安曇野市堀金烏川



屋敷林の中をゆったり流れる拾ヶ堰



中堀公園北の屋敷林



清兵衛木戸に並ぶ道祖神などの石碑

中堀は江戸前期に開発された新田村である。中央の道に沿って両側に短冊型の屋敷割りがなされ、南北に長い宿場町のような街村を形成しているのが特徴である。地勢は烏川扇状地の扇端に位置し、中萱・住吉・小田多井・上堀金・下堀金・成相本村・成相町村・新田町村の各村境に成立した。

貞享騒動の翌年の貞享4年（1687）、筑摩郡会田組執田光村の（和田）甚左衛門が中心となって出願し、松本藩の命令で用水の工事が始まった。当初は真鳥羽堰を延長した中堀堰によったが、天保14年（1843）勘左衛門堰、弘化元年（1844）温堰、弘化3年（1846）拾ヶ堰に加入して水利が安定した。最初22戸だった村も、明治6年（1873）には123戸と大きく発展している。

## 中堀の屋敷林

南北に長い街村をなす集落で、中央を拾ヶ堰が東西に横切っている。主に北アルプスを望む西側に屋敷林が続いている。表通りにはケヤキの大木が多く見られ、特に拾ヶ堰との交差部分はケヤキが連続して美しい景観となっている。拾ヶ堰より北側ではス



4

北アルプスを背景に田園風景の中を流れる拾ヶ堰と直交して連続する屋敷林



5

道に沿って流れる水路と石垣



6

塀に囲まれた佐々木宅の屋敷林



7

未舗装の小路沿いに続く美しい生け垣

ギなどの針葉樹も多い。

### 佐々木宅の屋敷林

道路より一段下がった集落の南端の角地に建ち、約1,000坪の敷地は母屋が見えないほどの緑に覆われている。現在はコンクリートとなっている周囲の塀は、大正時代までは趣のある板塀であった。高床式に増築された母屋の南側には、モチノキやカシが植えられた立派な和風庭園がある。



# 3-8 小田多井 南北に連なる屋敷林

安曇野市堀金三田



田園風景の中のケヤキを主体とした丸山宅の屋敷林



下村の道祖神 文化7年（1824）の造立



生け垣と一体化した一志宅の屋敷林

小田多井は江戸前期に成立した新田村である。寛永16年（1639）田多井・田尻両村の入会原に「四ツ家」ができたのが、その前身であった。

その後、慶安元年（1648）温堰末流の住吉神社を横断する御手洗堰を延長して、24戸の小田多井新田村が成立した。この頃、松本藩領内でも新田開発が進み、成相新田・住吉など各村が成立している。5年間は無税であったが、慶安5年（1652）初の検地があり、87石であった。

しかし、温堰末流の御手洗堰は水量が不安定であったために、寛文13年（1673）新堰掘替願を提出。なかなか認められず、以後出願を繰り返し、ようやく延宝6年（1678）分水口を上流の野沢に付け替えた小田多井堰の開削が実現した。享保7年（1722）には小田多井村の石高は104石に増加している。

## 小田多井の屋敷林

広域農道の西側に平行して、南北に街村をなす集落が連なっている。県道田多井中萱豊科線を境に集落が北と南の二つに分かれ、表通りに沿って屋敷林が点在している。集落内には規模の大きな屋敷林も



道沿いに連なる緑の生け垣



道沿いに屋敷林が連続した美しいまちなみ



ケヤキの大木と北アルプス

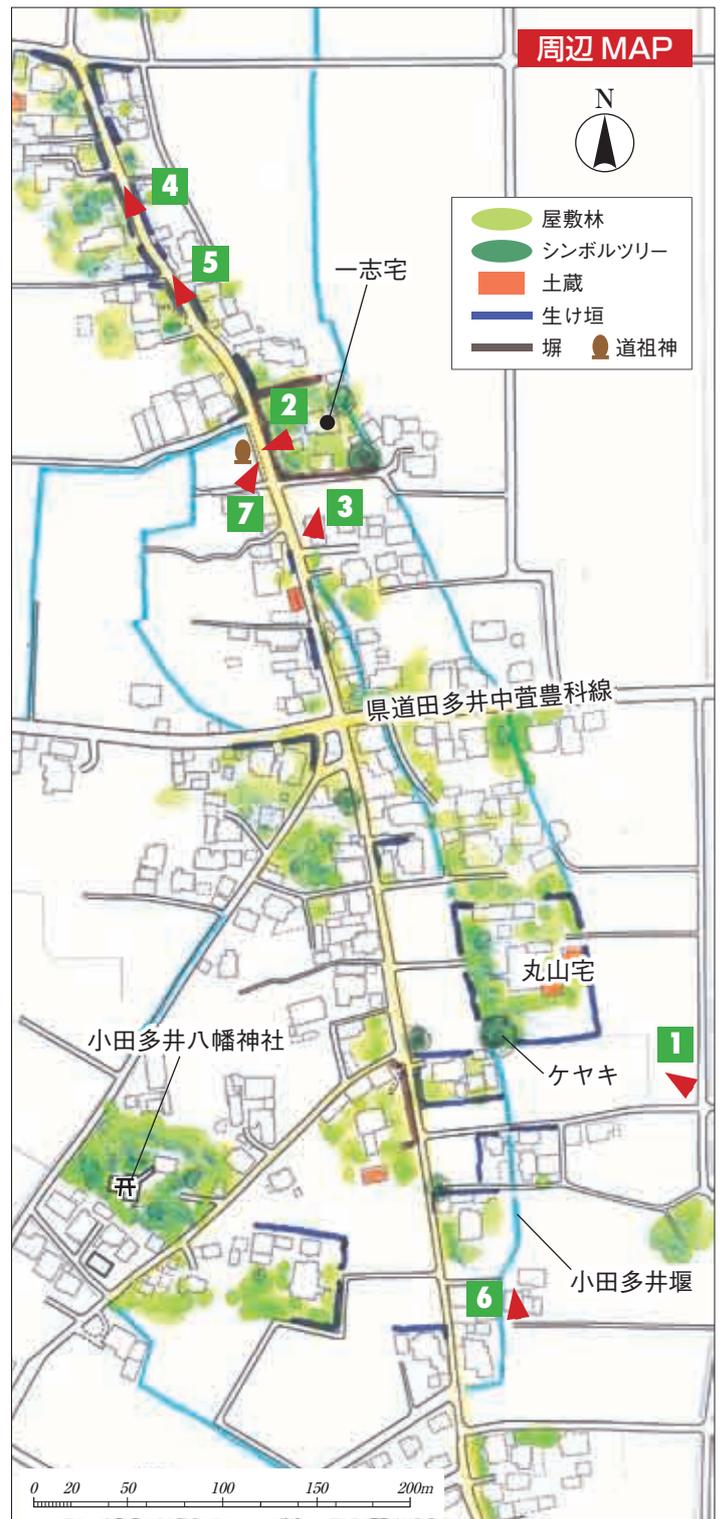


マツの古木と調和した一志宅の板塀

点在し、主に北アルプスを望む西側が針葉樹林、田園風景が続く東側が落葉高木で構成され、立派なケヤキの大木やアカマツの古木もある。

### 一志宅の屋敷林

約1,000坪の敷地は針葉樹主体の構成で、<sup>すき</sup>数寄屋造の母屋がほとんど見えないほどの屋敷林に覆われている。敷地内には見事な枝ぶりのマツの古木も多く、西側の板塀との調和が美しい。玄関へのアプローチとなる南側は生け垣が連なり、緑のカーテンのように屋敷林と生け垣が一体化している。



# 大庄屋山口家

山口家は松本藩長尾組の大庄屋を勤めた家で、母屋は元禄16年（1703）の建築と伝える。入母屋・棧瓦葺・平屋建（改築が加えられている）で、10畳間が7室連続し、東端には床書院付きの上段の間がある。門は薬医門。

庭園は江戸時代の延宝年間～天和年間（1673～84）の作庭とみられる。東西にやや長く、中央の池泉の西には亀島が浮かび、これに板橋・切石橋が架かる。北東には石組で滝を表現し、北には石造の五重塔を配置する。松本藩の材木奉行を兼務しており、その役所跡が隣接する。

松本藩主もたびたび逗留し、東端の床書院付きの上段の間から庭を眺めたという。明治時代には登山家のW.ウェストンが一夜の宿を求め、ここから常念岳に登った。22代の山口蒼輪（1913～50）は日本画家として著名である。

近世豪農の屋敷構えと庭園の豪壮さは地方でも希に見るものであり、板塀で囲まれた広大な敷地は背後の山並みと一体化し、安曇野を代表する美しい屋敷林を形成している。

庭園を望む書院の間など家屋の一部と日本庭園が見学できる（有料・火曜日休園）。



板塀で囲まれた広大な敷地の屋敷林 背後の山と一体化して見える。



平成 21 年に県の名勝に指定された山口家庭園



300年の歴史を持つ旧大庄屋邸の正面

# 4 豊科

豊科は安曇野市の東部に位置し、東の筑摩山地と梓川および黒沢川の扇状地によって形成されている。

山地は犀川東部に限られ、犀川西部にはゆるやかな平坦地に水田が広がっている。豊科には都市計画法による規制が敷かれてきた経緯もあり、田園風景の中に比較的規模の大きな屋敷林が点在し、北アルプスの眺望と調和した美しい景観を形成している。



# 4-1 しげやなぎ 重柳 ケヤキに囲まれた屋敷林

安曇野市豊科南穂高



丸山宅を東から望む



丸山宅に接して祀られる伊勢宮



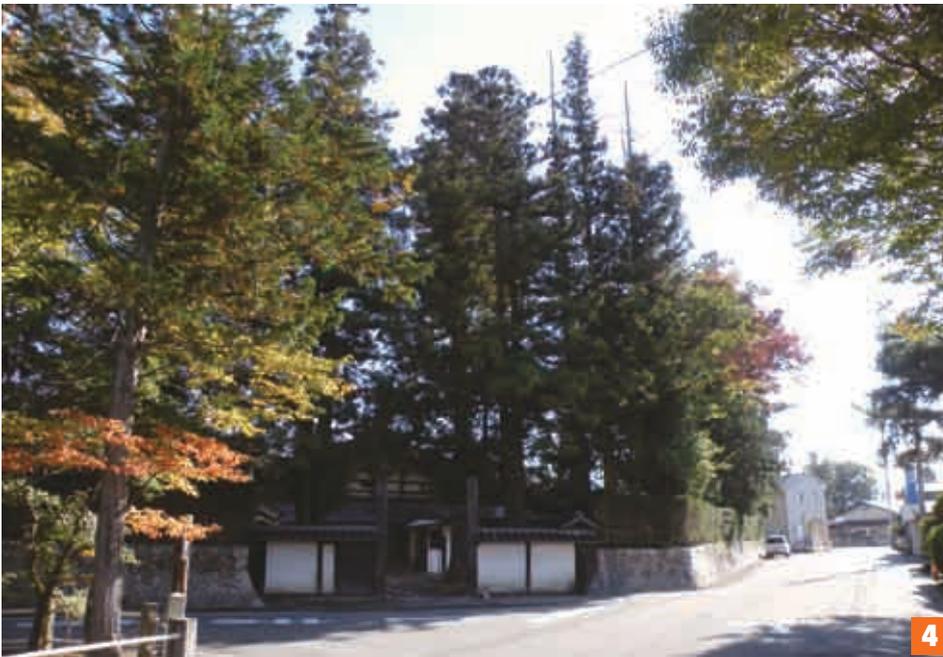
ケヤキの大樹

重柳は読んで字のごとく、かつてこの低湿地帯に群生していたヤナギのさま様に由来する。地勢は梓川扇状地の扇端に位置しており、西に万水川と東に犀川、そして集落の南東から北西に向かっては中曽根川が流れ、八幡宮を中心にした微高地に集落が形成されてきた。

初見は戦国時代の穂高神社文書に針俣はりまた（現在の踏入）とともに見える。中曽根川以北には安定した耕地は少なく、江戸中期に筑摩郡との郡境が決定され堤防が築かれたが、その堤防もしばしば決壊し、洪水被害の発生は少なくなかった。その洪水除けに祀ったのが伊勢宮であろうといわれており、集落南東部の最も犀川の影響を受けやすい場所に位置し、周りに配置された数本のケヤキと併せて、水害への守りを固めている。

## 重柳の屋敷林

東面のケヤキの大樹は伊勢宮の森と一体化して見事であり、北面に配されているスギの樹木とともに、近年開通した県道（オリンピック道路）から北アルプスを望む一番の風景をつくっている。しかし、周辺の



轟宅正面



轟宅の生け垣



轟宅の石積み



大きな馬頭観音の供養塔

水路の改修でコンクリートの3面張りとなつてからは、水分を多く必要とするケヤキの大き木が枯れてきたとのこと。

### 丸山宅の屋敷林

丸山宅は重柳地区の集落の南に位置し、屋敷に接して伊勢宮が祀られている。敷地は合計で3,000平方尺（約900坪）余を有し、田園の中に単独で建っている。玄関を西面に配しており、屋敷林と土塁が東面に見られる。これは犀川・中曾根川の洪水に対処したものとみられる。

### 轟宅の屋敷林

轟宅は八幡宮の東にあり、南東面にある石積みとその上の生け垣が見事な景観を醸している。さらに、

その内側に沿う形で置かれた、スギを主とする針葉樹の高木は見事。母屋はこの地特有の本棟造であり、冠木門を入り式台を右手に見ての戸は、手入れをしている家人の気持ちが伝わってくるよう。隣接する八幡宮の社叢と一体化し、その景観は地元にとってかけがえのない風景となっている。



## 4-2 てらどころ 寺所 生け垣の古道にある屋敷林

安曇野市豊科南穂高



岡村宅を東から望む



岡村宅正面の門



岡村宅の山桑の古木

寺所の地名の起源は「寺のあったところ」という意味で、そこに集落が営まれ、やがて郷村の名となった。文献上の初見は戦国時代の穂高神社文書である。

犀川の左岸河岸段丘上に位置し、犀川の旧河床を流れる中曾根川の自然堤防上に沿って集落が並んでいる。中心地域は当時も現在と変わらず観音堂付近（西ノ側）で、平安前期の土師器と須恵器が出土している。江戸前期の記録に、観音堂の北に松本城下の恵光院領が見える。熊倉からの古道・千国道が西ノ側を南北に通じ、踏入に通じていて、現在も古い面影を残している。

寺所東南部には中曾根川からの取水門跡があり、当初の矢原堰の取水口であったと考えられる。またこの下流域にある徳治郎地籍との間には払い水門跡があり、当地の水防の史跡は少なくない。

矢原堰の開削は、松本藩の保高組代官によって計画されたが、通水に失敗し、最後は矢原村の庄屋・白井弥三郎によって、犀川から取水して承応3年（1654）に完成した。これと同様の経緯をたどり、



岡村宅のスギ林



集落南側にある岡村宅を東から望む



別の岡村宅の南面に連なるスギの防風林



最初は梓川最下流から取水し（寛文2年〈1662〉）、後に奈良井川に取入口を変えた（貞享2年〈1685〉）勘左衛門堰と併せて、往時の工事の苦勞が忍ばれる。

### 岡村宅の屋敷林

岡村家は江戸時代に松本藩へ山繭を献上していたという。正面の門は明治初年に松本城から譲り受けたという「二の丸書院表門」。門前にはスギ林が広がっている。門をくぐるとすぐある山桑の古木は、江戸中頃から末期にかけて植えられたらしい。クワは本来落葉高木なので、このように高くなる。「寺所の山桑の古木」の名称で安曇野市天然記念物に指定されている。

これとは別に、集落南側にある岡村宅にはスギの防風林が連なっており、地元ではこのような防風林のことを「くね林」とも言っている。

# 4-3 徳治郎 土塁堤防が残る屋敷林

安曇野市豊科田沢



高橋宅を北側から望む



高橋宅の土塁を南側から見る

徳治郎とは、中世のこの地の開発名主（地主）の名前に由来すると考えられる。文禄年間（1592～96）集落の西側に犀川が流れていたとの記録（「田沢村神社之縁起」）があるが（現在の中曾根川）、氾

濫で流路が東へ移動し、徳治郎は親村の田沢本郷とは川を隔てた集落となった。

近世にあっても犀川の氾濫が頻繁に発生して水に浸かり、湿地を示す「花見」の字が各所に残っている所である。家々では家屋の南や東側に土塁を築いて洪水に備え、現在でも一部に残っている。犀川の度重なる洪水により田畑の開発は遅れ、江戸中期の検地によれば、耕地は現在の約2割にすぎないことが分かる。水防と五穀豊穰を祈念して、江戸初期には伊勢宮が創建されている。

## 高橋宅の屋敷林

屋敷は東より西側に分家2軒を配し、一族で災害に抗したと思われる。南東の土塁には自然のマツが生えており、樹齢は約300年を超えるだろうとのこ



高橋宅の土塁を東側から見る



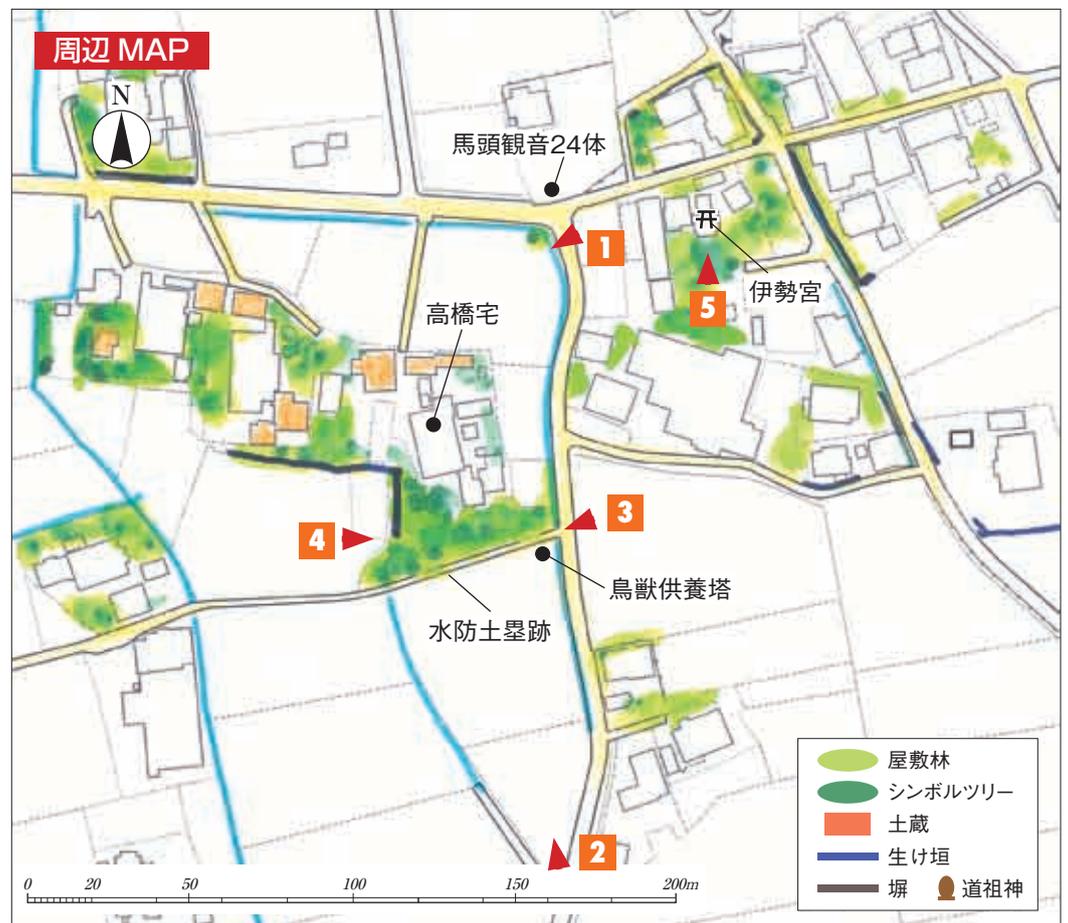
屋敷内を通る水路



水防のために祀られた伊勢宮

と。現存している土塁は明治初期に先代が人力で構築したといわれ、貴重な遺産である。昭和40年代の圃場整備事業の時にもこの土手は残され、今に至っている。南面土塁に自然のまま現存する樹木は更新期にあるが、当主が植栽計画を立てており、今後の保全にも期待がかかる。

雁行状に配された一族3軒の家並みを取り囲んでいる屋敷林は、南西面に多く配置されている。家屋のモノクロームの色調と、北東面に連続した白壁の色調とが見事にとけ合った素晴らしい景観である。



# ほんむら 4-4 本村 東南風に備える屋敷林

安曇野市豊科



小林宅を正面から望む



小林宅の西北に咲くシダレザクラ（安曇野市天然記念物）



小林宅を西から望む

本村地区は、字大海渡に平安時代前期の土器が出土していて、土地が良く地割も整えられて早くより開発されていることが知られる。中世末には成相氏が居館していて、成相郷の本郷として更に開発を進め、慶安13年（1608）からは成相本村と呼称されるようになった。

江戸時代は松本藩領成相組に属し、梓川から引水した成相堰を利用していたが、慢性的な水不足が悩みであった。しかし、寛政9年（1797）に勘左衛門堰が改修されたことで水不足が解消し、穀物の生産は大きく増えることになった。

本村の東を通る千国街道沿いに、成相新田宿（成相町村・成相新田町村）が成立。この宿には伝馬を差配する問屋があり、塩・塩漬<sup>わらび</sup>け蕨・竹荷が公用の主要な荷駄であった。

## 本村の屋敷林

千国街道から分かれて中萱を通り、飛驒に通じる飛驒道の西側に接しているが、堀金の中堀や住吉など近世の街村とは趣を異にする景観を呈している。やはり中世に成立した郷村の特徴を備え、各戸の家



丸山宅の屋敷林

4



安曇野市内最大の道祖神

5



丸山宅の長屋塀

6

屋はそれぞれの屋敷林を四周に巡らしている。

小林宅の屋敷林は、南・西・北に「岳おろし」に備えるための防風林が配されている。写真①の左手に斜めになっている大木はクリで、家人の庇護を受けて大事に養生されている。北西に咲くシダレザクラは、エドヒガンザクラともイトザクラとも呼ばれ、安曇野市の天然記念物に指定されている。

丸山宅の屋敷林は東側にこれだけ多数の高木があるのは珍しい。

### 本村の道祖神

成相氏の居館跡に隣接する公民館敷地に、3基の道祖神碑と1基の青面金剛像（庚申塔）が基壇の上に祀られている。

文字碑は高さ205㎝、幅180㎝という巨碑で、「柳盤」による雄渾な文字が刻まれている。背面には「弘化丁未秋改建 成相本村」の銘があり、干支から弘化4年（1847）の造立であることが分かる。



# よしの 4-5 吉野 古道にたたく屋敷林

安曇野市豊科



熊井宅を南東方向から望む



熊井宅の南面にあるチヂミガシワ

吉野という地名は、安土桃山時代の織田信長による禁制に「吉野郷」とあるのが初見であるが、その前身である「唐笠木<sup>からかさぎ</sup>」の初見は室町時代初期にまでさかのぼる。吉野とは佳字地名としてつけられたものであろう。

吉野は梓川扇状地の扇端に位置し、小字「唐笠木<sup>かじかいと</sup>」「梶海渡」は湧水と自然流による古代の開発の歴史を示している。中村・中原・荒井の各木戸は自然流（中沢）により、吉野町並みは中世末期成相堰

から分流した鳥羽堰の末流により、それぞれ成立したと考えられる。

吉野には、松本城下へ至る千国街道の三つのルートのうち、成相追分から分岐した松本道と熊倉道という二つの主要な道が通っている。とりわけ後者は江戸時代に架橋されていたこともある熊倉の渡しを通っていたため、このルートを経て多くの村から年貢が松本城下へ運ばれた。しかし、もう一つの長尾前の渡しの近くに梓橋が架橋され、新糸魚川街道が開通した明治23年（1890）以降は、しだいに利用されなくなった。

「鍛冶屋の屋敷」が語源とみられる梶海渡（鍛冶垣内）、「長者池」にまつわる長者伝説、平安時代の住居址8軒が出土した吉野町館遺跡など歴史的興味に尽きない地域である。

## 吉野の屋敷林

熊井宅は南面にヒノキの防風林が配置され、「岳おろし」といわれる山からの風に対応している。このヒノキ並木と熊井宅敷地との間に市道が通っているのはとても珍しい現象である。母屋は近年建て替



3

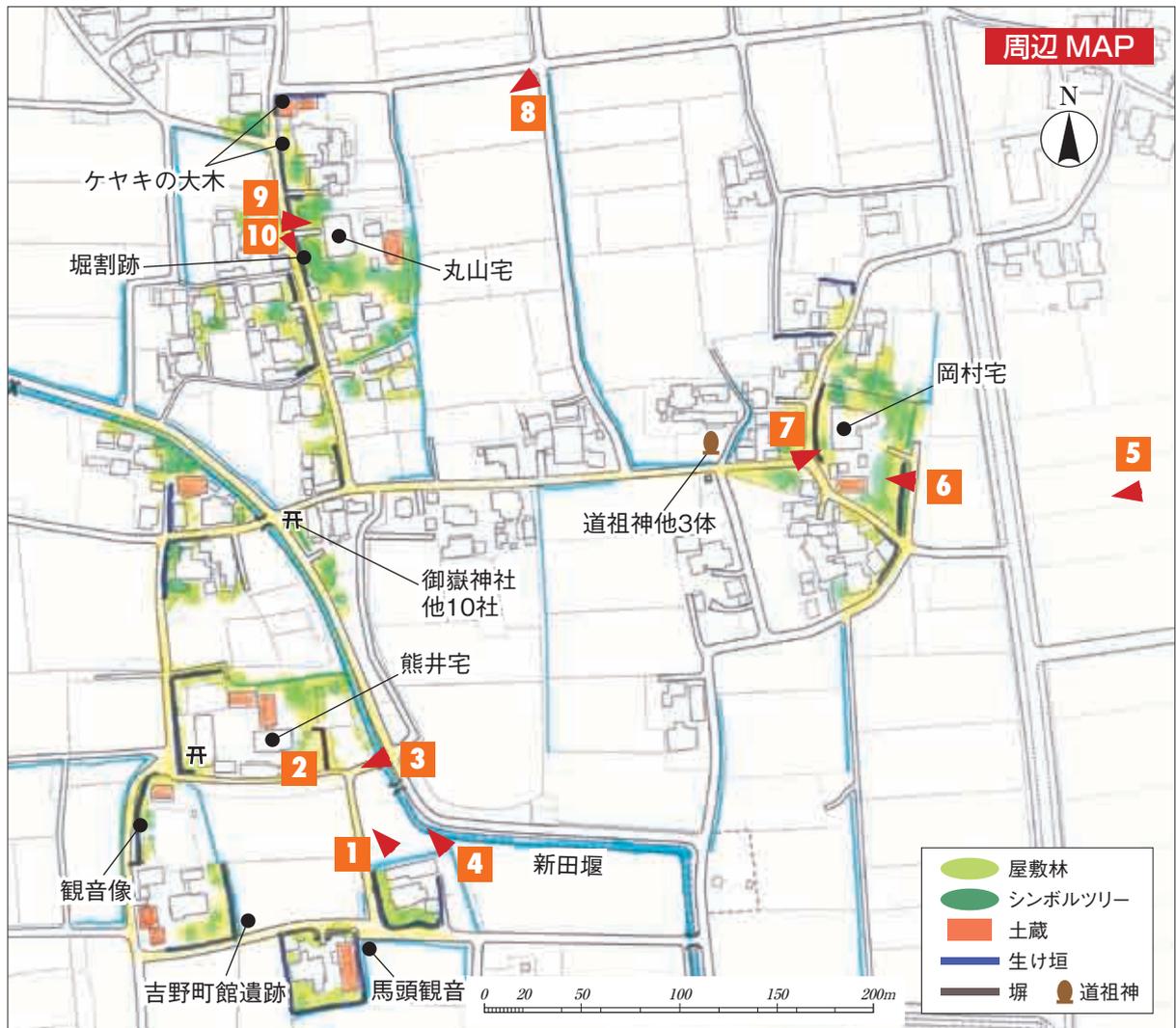
ヒノキ並木と熊井宅敷地との間を通る市道

えている。西側の土蔵跡から遺跡が発見された。また西面の樹木は近年道路の拡幅で伐採されている。屋敷の南面にチヂミガシワといわれる珍しい樹木がある。



4

近くを新田堰が流れる熊井宅





岡村宅の屋敷林の遠望

岡村宅は千国道に接し、敷地3,000平方メートル（約900坪）余の敷地には、本棟造の母屋、白壁の塀、屋敷林など安曇野の伝統的な風景が保持されている。近年は南側の土蔵が昔の面影を残したまま改造され、快適な空間を提供するアートカフェとして、多くの人々に利用されている。



土蔵を改造したアートカフェ



岡村宅の屋敷林



8

丸山宅の屋敷林を東から遠望



9

丸山宅の西側正門から母屋玄関を見る



10

丸山宅の屋敷をめぐらす堀割跡 「吉野の堀屋敷跡」として安曇野市史跡に指定

# 4-6 な か そ ね 中曾根 拾ヶ堰とともにある屋敷林

安曇野市豊科高家



東から望む山田宅遠景



山田宅の冠木門と塀



拾ヶ堰と山田宅

「そね」とは「湖中の浅瀬」、もしくは周囲より高い場所を意味し、水が引けば小高い台地になる部分を指す。そのような地形の中央部だということから「中曾根」という名がついたと考えられる。つまり、かつて梓川の氾濫原の中洲であったようで、その上流部（南端部）を上中曾根と呼ぶ。飯田地区などと同じく南北に長い中曾根地区は、大きく分けて南から上中曾根・北村・夫領・一丁田・元町・下中曾根などの集落から構成されている。

現在は西側に農免道路が通ったことで交通の要衝からはずれたが、古道の面影を留める各木戸では生け垣などがよく手入れされ、往時の趣きが味わえる。

## 中曾根の屋敷林

全体的には針葉樹が多いが、下中曾根にはケヤキの古木数本に囲まれた屋敷もある。上中曾根を除いては水路と道が南北に直線的に通っていることから、家屋の配置も南北に並ぶケースが多く、屋敷林の多くは東西側よりも南か北に多く配置されているように見受けられる。夫領から一丁田にかけては、茅葺屋根の古屋敷が4軒ほぼ並んで建っており、屋敷林、



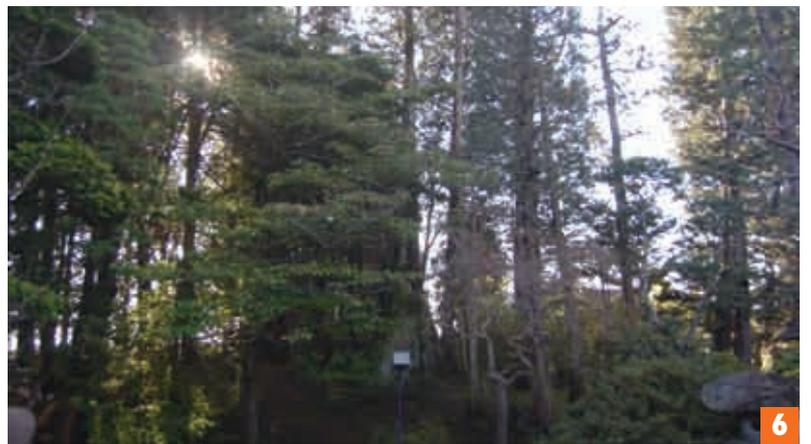
拾ヶ堰の右岸堤防上から見た山田宅の屋敷林 手前の生け垣の中に祀られた「水神様」は左岸の海野宅の敷地



右岸に祀られる「水神様」



中曽根に息づくお地藏さま 赤い毛糸の「べべ」に地域の温もりが感じられる



山田宅の南東面の屋敷林

庭園などと併せてとても懐かしい風景を保っている。

### 山田宅の屋敷林

山田宅の敷地南面は拾ヶ堰に面しており、拾ヶ堰の水位の方が山田宅の敷地より高い。そのことから、通水後には水防に関する苦労があったものと推測される。敷地と土手の間には「水神様」が祀られているが、その敷地は対岸の海野宅の敷地が堰敷で分断されたものである。

山田宅の屋敷林は針葉樹を中心に構成され、南東面の層の厚さは見事であり、岳おろしの強さが想像される。



7 は地図外

# 4-7 し も と ば 下鳥羽 古井戸とともにある屋敷林

安曇野市豊科高家



細田宅の屋敷林遠景



細田宅母屋の本棟造

鳥羽という地名の由来は、とま 苦（ムシロ）の材料であるすげ かや 菅や萱が繁茂していた場所という説や、川の渡河点を意味するとま 渡間やとば 渡場が訛ったという説など諸説ある。文献上では諏訪下社文書に、文明8年（1476）には「とま 戸間」と見え、天正7年（1579）には「鳥羽」と見える。

鳥羽郷の成立は、自然流の旧中曽根川を水源とした鳥羽堰による中村・太子村・寺村の各集落の古代開発に始まり、その後住吉庄の大規模用水路として開削された成相堰（現真鳥羽堰）により中世に確定したものとみられる。江戸時代の寛文6年（1666）の検地のとき上・下鳥羽村に分かれた。

全体的には水の乏しい地域で、飲用水の確保にも苦勞した歴史が下鳥羽わでの井戸などに見られる。中世末の豪族・丸山将監の館跡とされる鳥羽館跡や、長い歴史をもつ古刹日光寺、入会地に立ち入る際などに安全祈願をし

た山ノ神など、歴史の見どころが多くある。

## 細田宅の屋敷林

下鳥羽の細田宅の母屋は本棟造と唐破風の組み合わせがユニークな、築およそ200年の建物。西面と南面を中心にスギやケヤキなどの古木・高木が取り巻く様は現在でも圧巻だが、道路拡幅工事前はケヤ



細田宅の南・西面はスギやケヤキの高木が取り巻く



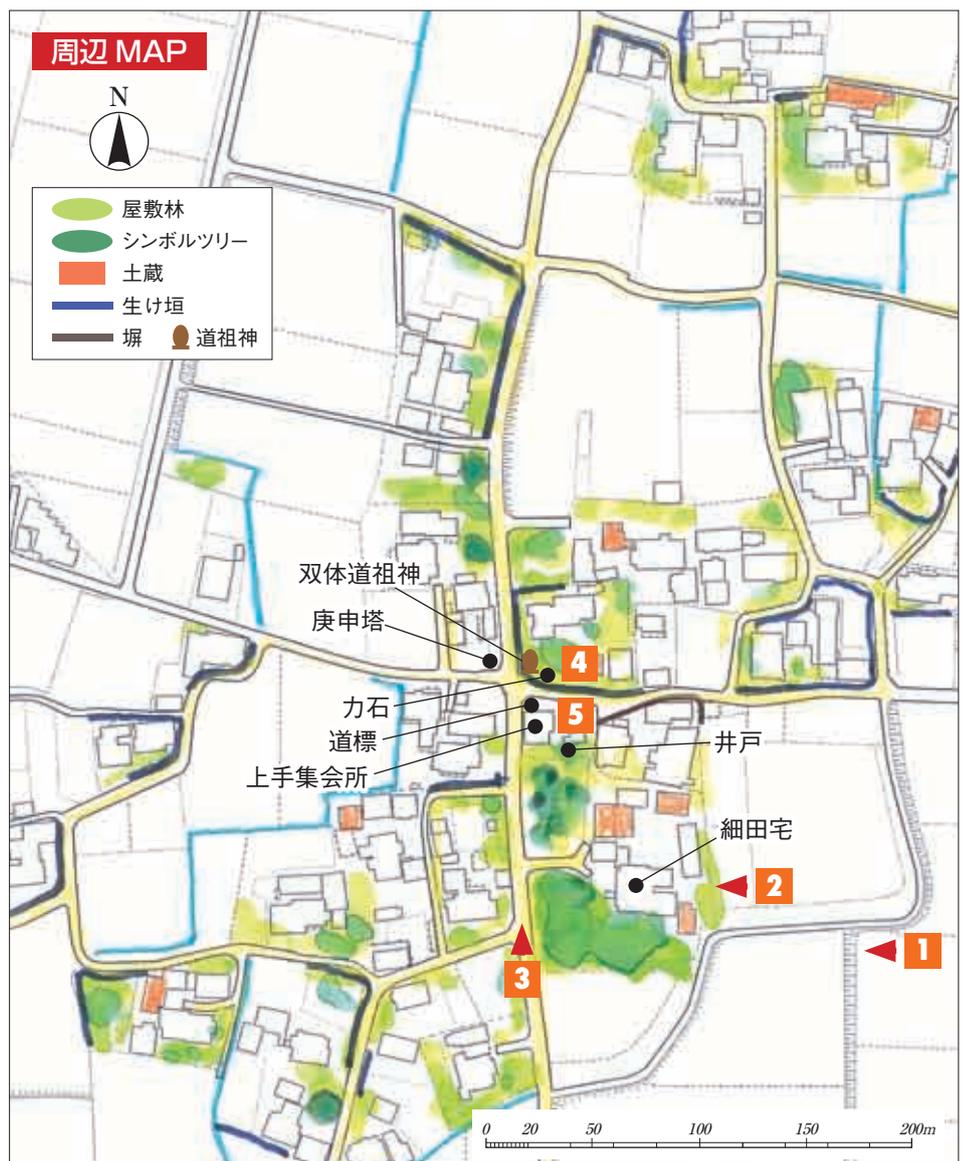
下鳥羽村の郷蔵跡と力石



下鳥羽上手の井戸

キがさらに5、6本はあったとのこと。江戸期には松本城からの来賓を迎える門もあったという。職人技の冴える東・南面の堀の石積みにも、歴史の移ろいを感じる。

細田宅の北側の上手集会所には郷蔵跡や生活用水として用いられた深井戸があり、近年まで使用されていた。また若者が祭りの際に力比べをした力石や、馬を繋いだ馬つなぎ石もある。現在も集落による祭りが続けられ、また昔をしのぶ共同作業の一つとして、井戸の汲み替えなどを行っており、これらを通して歴史を後世に伝える催しをしている地域である。



# なかいいだ 4-8 中飯田① せせらぎに連なる屋敷林

安曇野市豊科高家



街道に連なる屋敷林を東から望む



南北に流れる飯田堰

中飯田を含む飯田地区は梓川の氾濫原にあり、土壌は肥沃な反面、洪水による災禍とは常に背中合わせであった。この氾濫原の自然堤防（微高地）の上に、飯田堰に沿うかたちで形成された村落が旧飯田村（現在の飯田区・下飯田区）で、中飯田とはその中央部を指す。飯田堰とは古代から存在する自然流を取り込んだ用水路で、近世には勘左衛門堰が開削されたことにより、飯田堰に生じた余り水を利用して、さらに開墾が進んだ。

下飯田地区を通る千国街道には、かつて梓川を舟渡しする飯田前の渡しがあり、北の熊倉の渡し、南の長尾前の渡しに次ぐ交通の要衝でもあった。

飯田堰沿いの街道には、旧庄屋の屋敷などが点在し、戦国時代の遺構の飯田砦跡なども残っていて、豊かな屋敷林とともに往時の生活風景を想起させる。

明治23年（1890）の梓橋架橋により交通量が急減したことにより、古道や堰、本棟造の家屋や土蔵、そして屋敷林などが一体となって保全されており、安曇野の文化財としてこれからも残していきたい景観である。



飯田宅を含む集落全体を西から遠望する

### 飯田宅の屋敷林

集落南部にある飯田宅には、岳おろし（北アルプスからの風）を防ぐための防風林が南・西面に整えられている。主にスギ・ヒノキで構成され、角にはケヤキなども配されている。母屋の上座敷前に造られた庭園も見事である。西面は飯田堰沿いの街道に面している。これまで道路拡幅にかならなかったため、高木による屋敷林や古い石積みが保全されている。

また、集落北部にある別の飯田宅の母屋は築200余年を超える本棟造で、その庭園や源氏壁とあわせて安曇野一帯によく見られる本棟造の民家の特徴をととても良い状態で残している。江戸時代には庄屋を勤めており、屋号は「おかしら」といった。





集落の北部にある飯田宅の正面

4



5

源氏塀がめぐる飯田宅



6

街道に面して石積みが残されている



7

飯田砦跡（左）を東から望む



8

戦国期の名残をとどめる飯田砦跡



9

馬頭観音を集めた「つくれっ原観音堂」 かつて交通の要衝にあったことの名残ともみられる

# なかいいた 4-9 中飯田② 酒蔵を守る屋敷林

安曇野市豊科高家



東から見た飯野屋



屋敷正面（南面）の防風林は主にスギとヒノキ

現在、かりんとうの「蔵久」として人気の観光スポットとなっている飯野屋（屋号）は（84頁参照）、かつては造り酒屋であった。1,500坪（約5,000平方メートル）とされる敷地では、主に南・西・北面にスギなどの樹木を配している。文化7年（1810）建築という母屋ほか屋敷内の建物は、古い造り酒屋の歴代当主の努力により守られてきたもので、酒蔵の趣がこれほど残っていることは貴重である。

「安曇野は米どころ」という現在のイメージに反して、安曇野市内には酒蔵は意外と少ないが、この白壁と瓦屋根のコントラストは周囲の屋敷林と溶け合い、明媚を極める。5棟の建物が国の登録有形文化財に登録されている。

## 飯野屋の屋敷林

屋敷正面（南面）に連なる防風林は主にスギとヒノキで、外周を巡る堀も水路として健在である。酒蔵は一見今でも現役さながらの風情を表わす。煙突は釜場をさし、酒母部屋・麴室こうじむろと並ぶ酒蔵のシンボル。冬場の仕込み期は酒米を蒸すために、釜には毎日夜明け前から火が入れられた。



外周を巡る堀も水路として健在

3



築 200 年を超えた本棟造の母屋

4



中庭は店舗内から鑑賞できる

5



釜場の煙突

6



# 4-10 ままべ 真々部 信玄ゆかりの棒道にある屋敷林

安曇野市豊科高家



竹内宅の屋敷林



町通りの道辻の道祖神



竹内宅南の小道



「町通り」(別名：武田の棒道)はかつて信玄の命で整備された、軍事・経済道路

真々部の地名は、梓川の河岸段丘端で、崖欠け地形からきた地名という説など、諸説がある。梓川はしばしばこの付近で決壊し、真々部、上・下鳥羽の巾下(河岸段丘下)の村々を押し流した。

真々部を開発した幹線水路は、成相堰(現真鳥羽堰)、呑堰、梓川支流の旧中曽根川の3本で、巾下地籍の開発は平安時代にさかのぼるとみられる。

真々部を構成する主な集落は、南から上真々部・梓橋・中村・殿村・町通り・田中などで、真々部氏館のあった殿村には金竜寺など寺が多く存在し「七寺八小路」とも呼ばれた。ここは甲斐の武田氏が軍事拠点として整備した宿城の性格を持っている。

殿村の西を南北に貫く「町通り」は「武田の棒道」とも呼ばれた、戦国時代の軍事経済道路であった。以来この街道は梓橋が架橋される明治23年(1890)まで街道として機能し、大いに賑わいを見せた。

## 竹内宅の屋敷林(町通り)

竹内宅は海鼠壁や源氏塀と屋敷林のコントラストがよい。町通りに面して東向きに門を構える敷地は、南・西・北に針葉樹の高木を配し、よく手入れされ



田中の本山宅を東から遠望する



本山宅の源氏塀



梓川の支流の旧中曽根川による河岸段丘

ている。

### 本山宅の屋敷林 (田中)

田中は真々部の北東部に位置する集落で棒道とは接していない。本山宅は南・西・北面に防風林を配している。東面には広葉樹を、北西面はスギ・ヒノキなどの樹木を配しており、岳おろしを防ぐためのものであることが分かる。玄関は東を向いており、この面の樹木については低層の庭園の造りとなっている。本棟造の母屋とひとときわ存在感のある長屋門とが一体となって、迫力のある景観をつくっている。



7 は地図外



▲ 真々部田中地区

◀ 真々部町通り地区

# 古民家再生の実例——「蔵久」<sup>くらきゅう</sup>

本誌80頁で紹介した飯野屋では、母屋と酒蔵の一部を利用して、久星食品の経営するカフェレストランと、かりんとうなどの製造販売所「花林桃源郷 蔵久」が、順調に営業を続けている。

本棟造を筆頭に安曇野市内に相当数残っている伝統的家屋や建築物は、少子高齢化と景気低迷の流れの中で存亡の危機に面しつつある。それはすなわち安曇野の風景が一変することと同義といっても過言ではない。

「蔵久」の例は、所有者、事業者、地域の気持ちや努力が一致した事例として、今後の景観保全の取り組みへの参考となるのではないだろうか。



広い庭園部を利用した屋外カフェ



かつて味噌仕込み用の蔵だった建物を改造し、現在はカフェとして利用している



ホーロータンクが並ぶ仕込み蔵は今でも現役さながら（通常は非公開）



母屋の座敷はそばを中心とした食事処

# 5 三郷

三郷は安曇野市の南西部に位置し、黒沢川扇状地と梓川の河岸段丘によって形成されている。地域の約3分の2は山地で、平地の西側はリンゴを主体とした畑、東側は水田が広がっている。三郷には東傾斜の田園風景の中に屋敷林が点在し、集落内に多く残る小さな路地とともに独特な景観を形成している。



# すみよし 5-1 住吉 みどりと歴史・文化に触れ合う屋敷林

安曇野市三郷温



再生された神谷宅と屋敷林



度重なる道路拡幅後も生け垣と屋敷林が美しい通り



道路拡幅は松の木を残して東に広がった

住吉は江戸初期の元和元年（1615）に開発された新田村である。中世住吉庄の久木集落がおそらく黒沢川の洪水によって退転していたところに、天正年間（1573～92）武田氏の手による町割りが行われ、元和元年の新田開発により村として成立したと考えられている。

現在、黒沢川は住吉神社の南西で地下に浸透して河川敷が消滅した尻無川になっているが、かつては住吉神社の南を流れて神社前で北に流れを変え、現在の住吉集落の本通りを流れ、小住吉に至っていたという。住吉集落の屋敷地は本通りよりも高くなっており、両側が自然堤防であったことをうかがわせる。住吉の町割りが武田氏によってなされたとすれば、黒沢川の治水工事と切り離して考えることはできないだろう。

集落の特徴としては成相新田宿の宿場町割に酷似<sup>のみ</sup>した、計画的な街村があげられる。道裏に東西呑堰、その裏に東西大堰、さらに水田を隔てて東西大堰壒を通すなど、用水・地割・屋敷割が合理的に設計された様子が残されている。



4 何度も道路拡幅があり、美しい塀となった



5 本棟造の家並みと塀が連続する



6 珍しい石塀の家



7 朱塗りの正一位稲荷神社



8 屋敷と塀からは歴史を感じる



9 住吉上手の道祖神

昭和63年（1988）、当時の三郷村では「住吉の家並み」を「みどりと歴史、文化に触れあうプロムナード」として、村の総合計画の中で歴史的価値を位置づけた。その内容は、多くの古い民家群が南北に一直線に走る中道（かつての県道）の両側に整然と並び、石垣や生け垣で区画され、それを取り巻く古木の屋敷林がうっそうと茂る景観は他地域にはない、というものであった。しかしながらこの価値観も、時代の変化とそこに住む人々の要望によって、平成10年（1998）に道路拡幅工事が行われ、旧家並みの様相は一変した。

### 神谷家の屋敷林

神谷宅でも旧道路沿いにケヤキの大木でうっそうとしていたが、伐採され西側のマツの古木を残すため現状となる。母屋は本棟造、安政年間（1854～60）の建立、建坪120坪。10年前に補強工事と併せて改築再生した。敷地は600坪（約1,980平方m）、母屋前には前庭と庭園、一角に洋風庭園、生け垣を境に南側にカキが植栽され、付属建物・土蔵・駐車スペースに分けられている。屋敷林の手入れは年2回している。



かみなかがや  
5-2 上中萱 義民の里の屋敷林

安曇野市三郷明盛



1

宮澤家住宅の屋敷林



2

緑の小路



3

宮澤家住宅の母屋

中萱は、旧三郷村の北端、水田が広がる梓川左岸扇状地の扇央に位置し、常念岳の美しい山容を望める地にある。

中萱という地名の由来には、中界（中萱熊野神社由来記）と中小屋（中世領主の屋敷）の二説がある。

明暦3年（1657年）中萱堰が開削され、当地だけでなく周辺地域の新田開発が飛躍的に進んだ。上中萱と下中萱のそれぞれに庄屋と組頭が置かれ、独立した村の機能を果たしていたが、幕末に至るまで中萱村として一つの村を形成していた。

### 義民の里

上中萱村は、貞享3年（1686）の貞享騒動の首謀者・多田加助の居住した地で、堀と土塁の残る屋敷跡が「多田加助宅跡」として県史跡に指定されている。同地には、加助ら義民を讃えた貞享義民社（加助神社）が建てられ、一揆の同志28名が祀られている。また、当社の南方にある貞享義民記念館「義民の里」には、貞享騒動の資料が数多く展示されている。

### 宮澤家住宅

中萱駅から県道を西側へ進むと、国の登録有形文



道祖神と石塀の中を抜ける千国道



貞享義民顕彰慰霊碑（貞享騒動 300 年記念・昭和 61 年建立）



白壁と屋敷林の住宅



本棟造の住宅と屋敷林

化財に登録された「宮澤家住宅」が目に入る。母屋は昭和11年（1936）の建築で、木造二階建の入母屋造。立ちが高く、軒の出も深く、重厚な外観を呈する。座敷まわりの欄間彫刻も見応えがあり、二階の32畳の大広間は、公私にわたる接客場として使用された。昭和戦前の和風建築の一典型といえる。また、

母屋だけでなく屋敷内の土蔵や石塀、門なども文化財に登録されており、屋敷全体からも昭和初期の住まいの雰囲気を見せている。

敷地の南側には、ヒノキを中心とした中高木が植えられており、庭園を引き立てている。



しもなかがや  
5-3 下中萱 千国道沿いの屋敷林

安曇野市三郷明盛



歴史を感じる道沿いの家並み



白壁の土蔵が美しい



この地域の塀にはデザインの共通性を感じる

中萱の文献上の初見は、文明8年（1476年）の諏訪下社文書である。中世には上・下中萱を古道の千国道が南北に通過しており、史料からはここに定期市の六日市場が開かれていたことが想定され、人々の往来が多かった地域と考えられている。

千国道は、越後との交易の道として古くから開かれ、江戸時代には小谷村千国に番所が置かれたことから千国道と呼ばれた。中世の千国道は、安曇野に入ってから5本に分かれ、中萱地域には西の山麓から数えて3本目と4本目の2本が、ほぼ平行に走っている。

特に西山山麓から4本目の道は、下中萱村に六日市場を形成し、集落の発展を促した。これらの千国道や、集落を東西に横断する松本道や日光寺道（烏川山道）は、松本が城下町になり繁栄した近世に入ってから、よりその重要性を増してきたといわれている。

現在これらの古道は、道路改良や構造改善などにより、ごく一部を除いて原形をとどめていない。



両脇に石垣の塀と屋敷林が続く

4



下中萱の道祖神と二十三夜塔

5

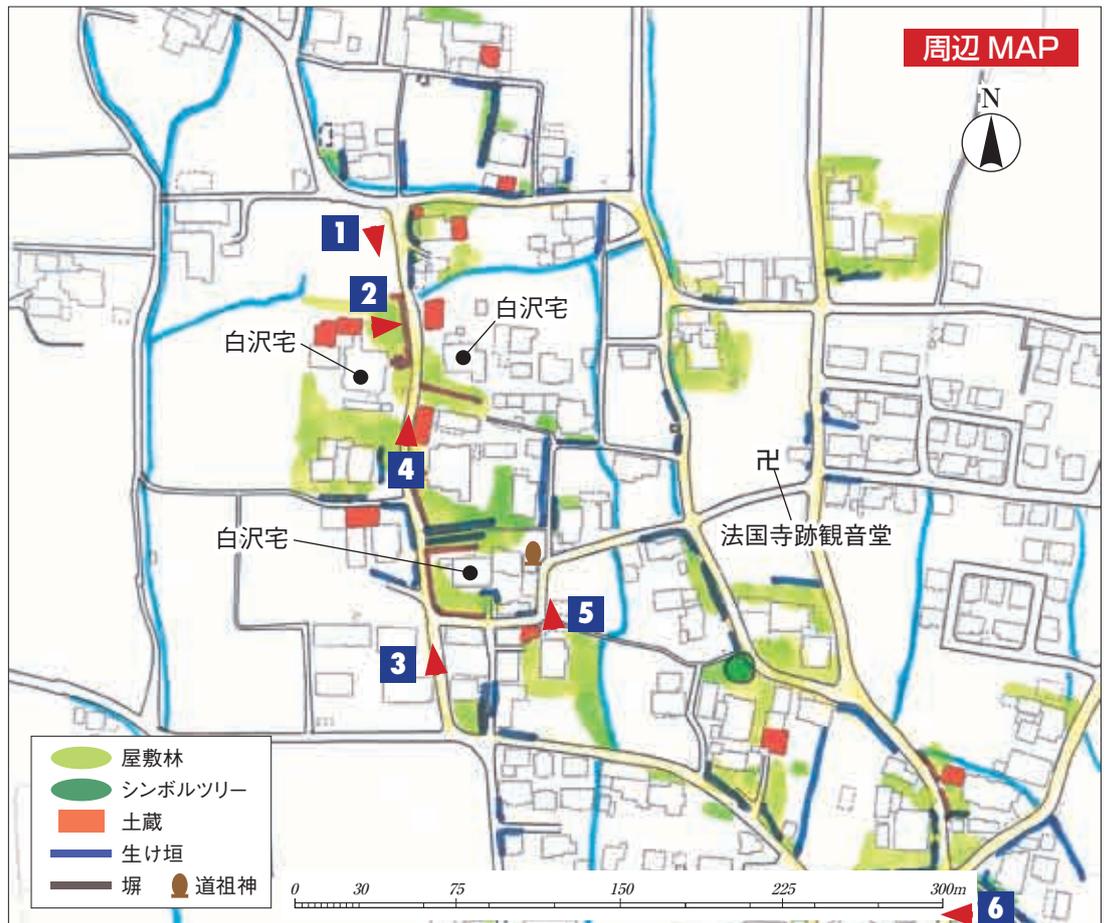


稻荷大明神

6

### 下中萱の屋敷林

昭和20年代の下中萱集落には、本棟造や茅葺の建物が多くみられたが、現在はわずかしか残っていない。中萱地区は、屋敷林としての役目をもっていた樹木を庭木として活用しているため、高木の樹木は比較的少ないが、沿道の源氏塀や石垣と調和した落ち着いた沿道景観をつくりだしている。



周辺 MAP



6

# 5-4 およびき 及木 歴史をつなぐ屋敷林

安曇野市三郷明盛



岡里宅の源氏堀と高山宅の屋敷林



岡里宅の屋敷林と本棟造の母屋



白壁の土蔵が並ぶ小道

及木は、三郷地区の北東に位置し、梓川扇状地と黒沢川扇状地の複合扇状地の扇央を占める。位置関係からして、平安後期に成立した住吉庄の中心集落の楡から分離独立した集落と考えられる。及木の名は、神事に使う麻などをゆでる「ゆびき」から転じたという説や、堰の水量を調整する梓木に由来するという説などがあるが、分からない。

天文14年（1545）の小笠原長時の代の分限帳に「旗本やりぞなえ備衆十九家」のなかに「及木孫七」が見える。中世にここを本拠とした小笠原配下の及木氏がいたらしい。西村の堀屋敷はその居館であったようで、小規模ながら周囲は角川と西川が取り巻く城下集落を形成している。

また、武田氏滅亡後に深志城を回復した小笠原貞慶は、及木源三郎に氷室の地32貫文分をあてがっている。この及木氏は東村にある堀屋敷に居住していたとされる。

江戸時代は庄野堰の枝堰の及木堰の掛かりで、流末のため水不足に悩まされたようである。楡・住吉・及木の三か村はともに住吉神社の氏子として奉



及木西村の通り



西村薬師堂前の道祖神



堰が西村の集落を巡る



土蔵の正面デザイン



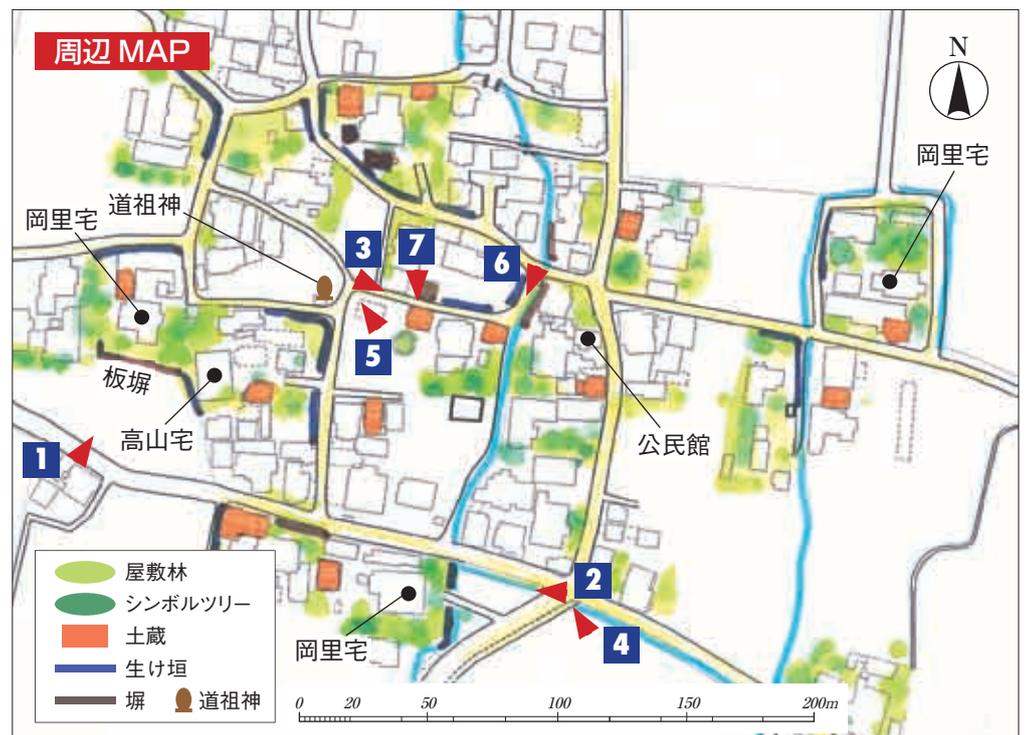
生け垣の美しい福島宅

仕していたが、明治13年（1880）に及木は氏子から分離して、伍社宮を分祀して鎮守とした。

明治に入り周辺の村と明盛村を構成し、昭和戦後三郷村となった。

### 及木の屋敷林

及木は西村（本村）・東村・北村の3集落からなる。その中でも中心をなす西村は、堀屋敷を囲んで城下集落をなしている。そのため屋敷林が集落全体をすっぽりと包み込むように発達しており、遠くからは田圃の中に浮かぶ城塞のように見える。反対に集落の中は家が集住しているものの、それぞれの境をさえぎるものは少なく意外と開放的である。



# 5-5 きたおぐら 北小倉 安曇平を望む屋敷林

安曇野市三郷小倉



大滝山登山口への道がつづく



西山からは安曇野が一望にできる



八幡神社に続く小道

西山沿いの小倉地区（旧小倉村）は古くから、立地の違いにより、鳴沢沿いの北小倉と黒沢沿いの南小倉に分かれ、そこに大正時代に小倉官林を開いてできた東小倉および室町が加わった4地区からなっている。そのうちの北小倉は鳴沢川扇状地の扇頂に位置して東に傾斜し、わずかの水田のほかは集落の東に広大な畑作地帯が広がっている。

五反田遺跡からは縄文前期の住居址が見つまっているが、弥生時代以降長らくは人が住んだ形跡がみられない。小倉の初見は室町時代の長享2年（1488）の諏訪下社文書で、「西牧小倉」とあることから西牧郷に属していたことが分かる。ここを支配したのは鎌倉初頭に東信から西牧（松本市梓川上野にあった牧場）の地頭に任じられて来た滋野氏一族の西牧氏である。西牧氏は戦国末期に小笠原氏に滅ぼされるまで有力な武将であり、北小倉の小倉城も当初は西牧氏の築いた山城であったと考えられる。

天正10年（1582）武田氏が滅ぶと、小笠原貞慶が深志城を回復し、留守中に武田氏に従っていた西牧氏はこのとき小笠原氏に滅ぼされた。



本棟造と屋敷林の落ち着いたたたずまい



三階建ての繭倉は現在移築されて神奈川県で診療施設となり再生された



小倉で有名なシダレザクラ



大倉宅の西側に珍しい竹の屋敷林  
屋号は「竹室（たけむろ）」である。

大倉宅は敷地の屋敷林を活かして住宅を新築した



小倉城の麓には城下集落が形成されており、縦道と横道が整然と区画された方形町割の里屋敷となっている。また村落の東方に長大な堀跡が発見されている。これが現在に続く北小倉の集落である。

また、小倉は交通の要衝でもあり、山麓を通る中世の千国道が、北小倉の中を抜けていた。

### 大倉宅の屋敷林

小倉城直下の八幡神社から東へ伸びる沿道にある大倉宅には、イチイなどの生け垣越しにスギやヒノキが数多くみられる。また、竹藪が他の集落に比べて多く見られるのも特徴的である。現在の小倉

宅の本棟造は、敷地内の屋敷林を使って新築が行われた。特に正面玄関の梁は12間もあり、家主も自慢の母屋である。



# 5-6 にれ 檜 代々守る屋敷林

安曇野市三郷温



西側道路から望む甕宅の屋敷林



近年の開発により景観が変わりつつある檜集落



甕宅を南西から望む

檜は旧三郷村の北西部、黒沢川扇状地の扇端に位置している。檜の名の由来については、この地に檜の木が繁茂していたという説と、古来、住吉神社の神事に捧げる「贄」が転じてニレとなり檜の字が宛てられたとする、両説が提起されている。

集落内には、檜遺跡群、西の段丘上には平成15年の発掘調査により平安時代の住居跡が多く見つかった三角原遺跡があり、先人たちが黒沢川の沢水を求め、この地で営みを始めたことがうかがえる。

## 住吉庄の中心集落

平安後期、ここに寄進地系荘園の住吉庄が開発された。平安末期には在地領主はおそらくこの地であって権門勢家の平氏の勢力下にあったであろう。しかし、住吉庄は鎌倉初頭の『吾妻鏡』に「院御領」として見え、後白河法皇に寄進されたことが分かる（のち長講堂領）。源平の合戦で平氏が滅亡後、源頼朝により全国の平氏系の荘園は没収され（平家もっかん没官領）、戦功に応じて源氏の御家人に地頭職が割り振られた。住吉庄は平家領ではなかったが、東信の滋野氏一族の西牧氏が地頭となってここに進出し



春の北アルプスと甕宅



冬の北アルプスと甕宅



甕宅の門と前庭



屋敷林の手入れも行う甕宅のリング用リフト

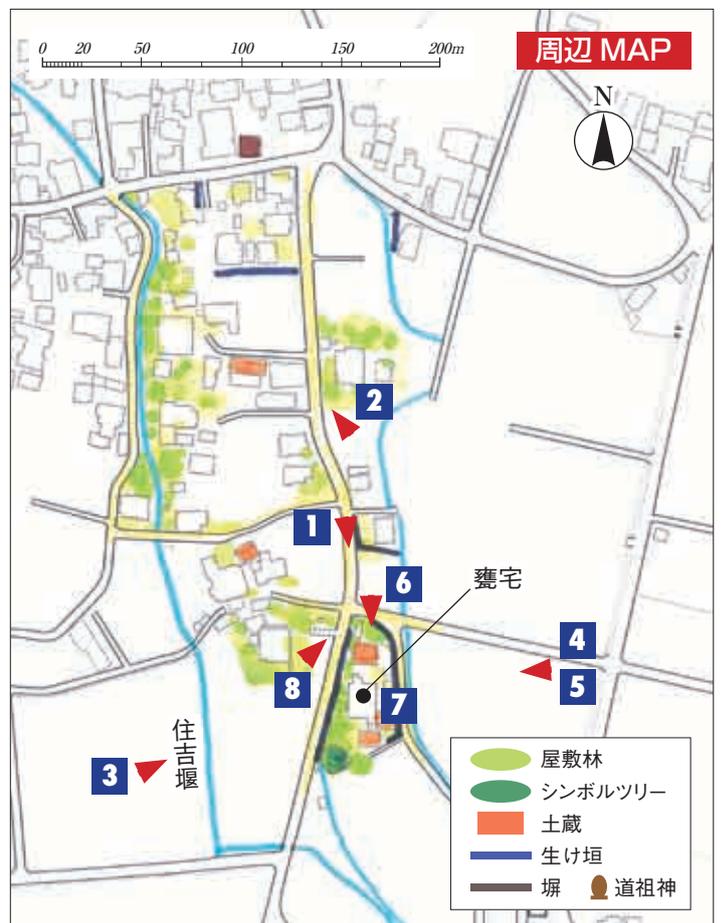
たものである。その住吉庄の鎮守が住吉神社であり、支配所が置かれたのが楡の集落であった。楡には「しょうじ」（庄司）という小字名が存在する。

### 甕宅の屋敷林

楡の南端に位置する甕宅には、手入れの行き届いた生け垣と寛永年間（1624～44）に植えられたという壮大なケヤキが見られる。屋敷林の樹種は、ヒノキ・スギ・マツなどが中心で、特に前庭のマツは当主が自ら剪定を行い、大切に維持されている。また、東側の農道からは、北アルプスと広大な田園を借景として甕宅の美しい屋敷林景観を望むことができる。

楡は、旧三郷村で最も多くの茅葺屋根の民家が集中している地域であるが、甕宅の母屋もそのうちの一軒である。幕末に建てられたという茅屋は、現在、鉄板で覆われているが、今なお安曇野らしい民家として残されているのは貴重である。

屋敷内には数棟の土蔵も見られ、終戦後は、離れとして地元の学校へ勤めている先生を下宿させていたこともあったという。



# 5-7 ふたつぎ 二木 土佐守の森の屋敷林

安曇野市三郷明盛



二木宅裏の小路と屋敷林



二木分館から眺めた二木宅の屋敷林



二木土佐守屋敷跡

二木集落は、旧三郷村のほぼ中央に位置し、三郷中学校校庭や三柱神社境内から土師器が見つかったので、古くから開発された地域であったことが知られる。室町時代以降に名が見える二木氏によって計画的に開発されたと考えられ、圃場整備前は条里型に区画された水田が見られた。

この二木氏は、南北朝に入って下伊那から中信へ勢力を移してきた信濃守護・小笠原氏の一族で、住吉庄の地頭職を幕府から与えられたため、一族の二木氏を地頭として送り込んだものである。これにはそれまで地頭であった西牧氏が反発し、信濃のほかの武将たちと組んで小笠原氏と応永7年（1400）に大塔合戦となった。しかし、その後二木氏と西牧氏は協力してこの地の開発を進めたようである。

永正～天正年間（1504～92）にかけては、二木ぶんこのかみ豊後守と弟の二木とさのかみ土佐守が二木郷に居館を置き、居館跡には標柱が立てられている。また、近世初頭のさかげと小笠原氏の転封には三男の藤左衛門がこの地に残り、四男の善左衛門が九州小倉に移って家老となっている。二木豊後守の二男の六右衛門は隣の境海道に屋



二木宅玄関前と庭園



堰の脇の河畔林



土蔵とケヤキ



沿道の屋敷林 ブロックの色違いは道路拡幅によるもの

敷を持った。

昭和29年（1954）三郷村が誕生して以後は、二木地区に三郷村役場や文化公園、体育館が建てられ、当地は文教・行政の中心地となった。

### 二木の建物群

二木集落の特徴を示す伝統的建造物は、本棟造の民家と土蔵である。特に本棟造は、集落の中心でもある二木分館（公民館）周辺に多く残されている。

当地は、これらの古い住居と宅地開発による新しい住宅やアパートが混在しているのが特徴的である。

### 二木の屋敷林

安曇野市三郷総合支所から西へ走る県道の左右には、三郷の他地域にも多い小路が何本も伸びており、生け垣越しからスギやヒノキを中心とした屋敷林を眺むことができる。また、温堰沿いの地蔵堂付近には、スギを中心とした河畔林が植樹されているのが珍しい。



# 5-8 しもながお 下長尾 大きなフジの木のある屋敷林

安曇野市三郷温



1

2軒でつくるフジの木のある屋敷林



中澤宅を東から見る



土塀のある小道

住吉庄の長尾郷の初見は、文明8年（1476）「下諏訪春秋両宮御造営帳」に「長尾上方」とある。その後の天正18年（1590）石川氏による検地（大閣検地）で長尾村が成立、その中の小村として存在した。江戸中期の享保13年（1728）長尾村は上・下二村に分村し、下長尾村となる。

下長尾の西ノ木戸は周辺に平安時代初期の栗ノ木下遺跡があって、黒沢川の自然流や湧水により早くから開発がみられた。中世には堀屋敷があったといわれ、代々庄屋職の家もあって、広大な屋敷に本棟造の母屋を中心に、土蔵や納屋などの建物が配置され、屋敷林の見事さに歴史を偲ばせる。

西ノ木戸を東西に、松本から長尾前を経て一日市場から上長尾、小倉へと続く古道が通っている。天保4年（1833）松本藩の若殿と姫様の一行が黒沢の滝や不動尊、室山への見物や参詣に通った道で、庄屋宅を休憩所として使用した記録が残されている。

## 松岡淳夫宅

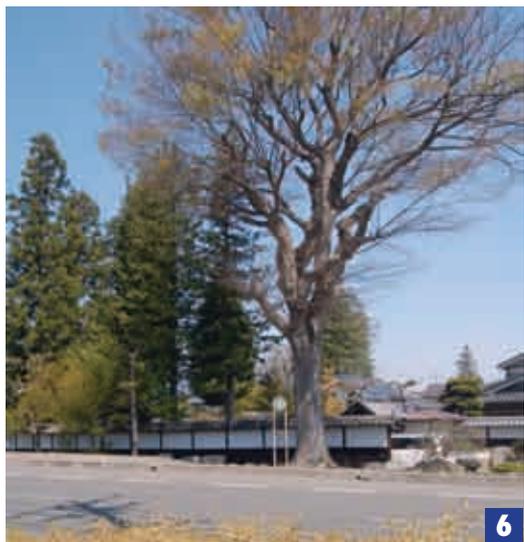
大きなフジの木があり、自分の家では高いところにある花が咲いたことが分からず、近所の人から教



松岡宅を南から見る 敷地内の蔵は現在取り壊されている。



大きなケヤキの木は腐り伐採された。



松岡宅南の道路の屋敷林

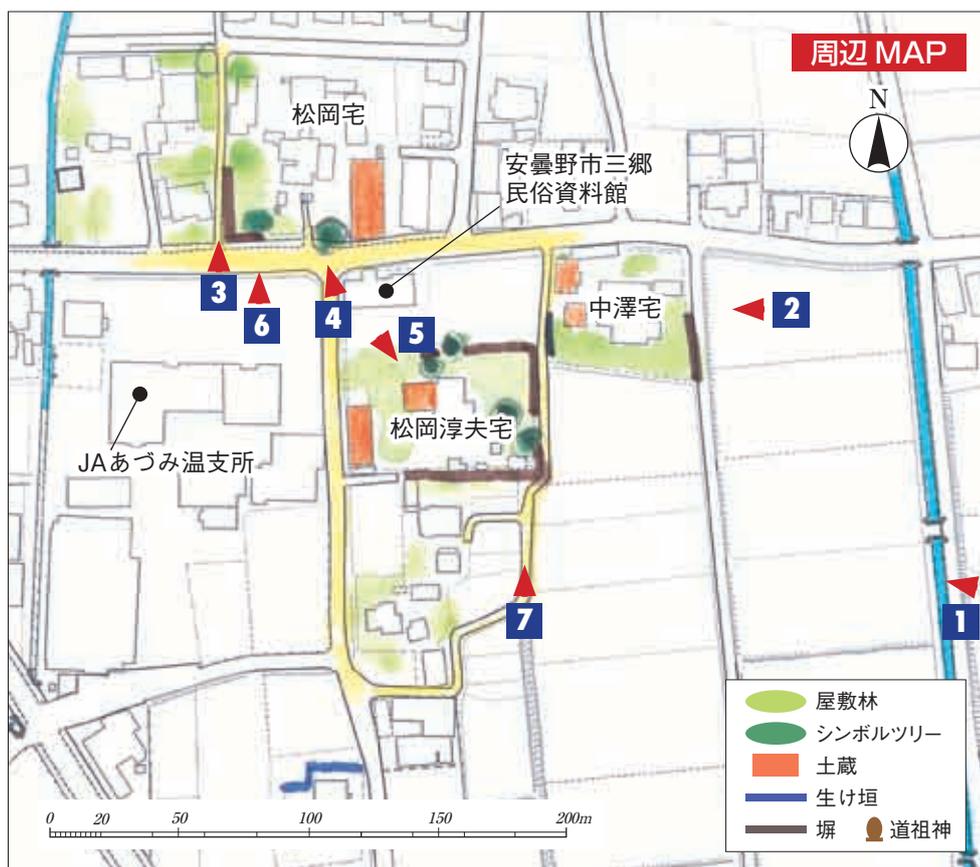


松岡宅のケヤキ

えてもらうという。むかし松本城主とお姫様が領内巡見の折に休憩に立ち寄ったと伝わる。北側には常緑樹、南側にケヤキの落葉樹が植えてあり、典型的な屋敷林配置の例をなす。

### 中澤宅

母屋は江戸後期の本棟造で、民家再生により全面改築した。美しく落ち着いたある前庭を持つ。



かみながお  
5-9 上長尾 播隆上人ゆかりの地の屋敷林

安曇野市三郷温



上長尾集落



播隆上人ゆかりの阿弥陀堂跡



長尾山平福寺の境内



塀を低くして庭を見せている家

上長尾集落は、黒沢川扇状地の段丘下で梓川扇状地の扇端付近に位置する。長尾の地名の起源は、梓川の上野から続く段丘崖の終末に立地する村、つまり「長い尾」の終わる位置にちなんで名づけられたといわれている。

近世には長尾村に属し、慶安4年(1651)に野沢村が分村し、享保13年(1728)には上・下長尾村に分村している。明治7年(1874)に野沢・上長尾・下長尾・楡・住吉の5か村で温村が誕生した。

上長尾には、先人たちの歩みがうかがえるいくつかの文化財が残されている。

住吉庄の祈願寺であったとされる長尾山平福寺は、上長尾集落の西側に位置し、平安末期から鎌倉初期にかけての造像とされる木造聖観音立像(県宝)が残されている。このことから、長尾は住吉庄園開発の母村であったと考えられる。

また、槍ヶ岳を開山した播隆上人が10か月滞在した阿弥陀堂跡も集落中心部に見られる。

#### 上長尾の建築群

戦前は伝統的な木造建築が数多く残されていたが、



屋敷林を映し出す田植え前の田園



上長尾に残されている数少ない本棟造の民家



沿道の屋敷林



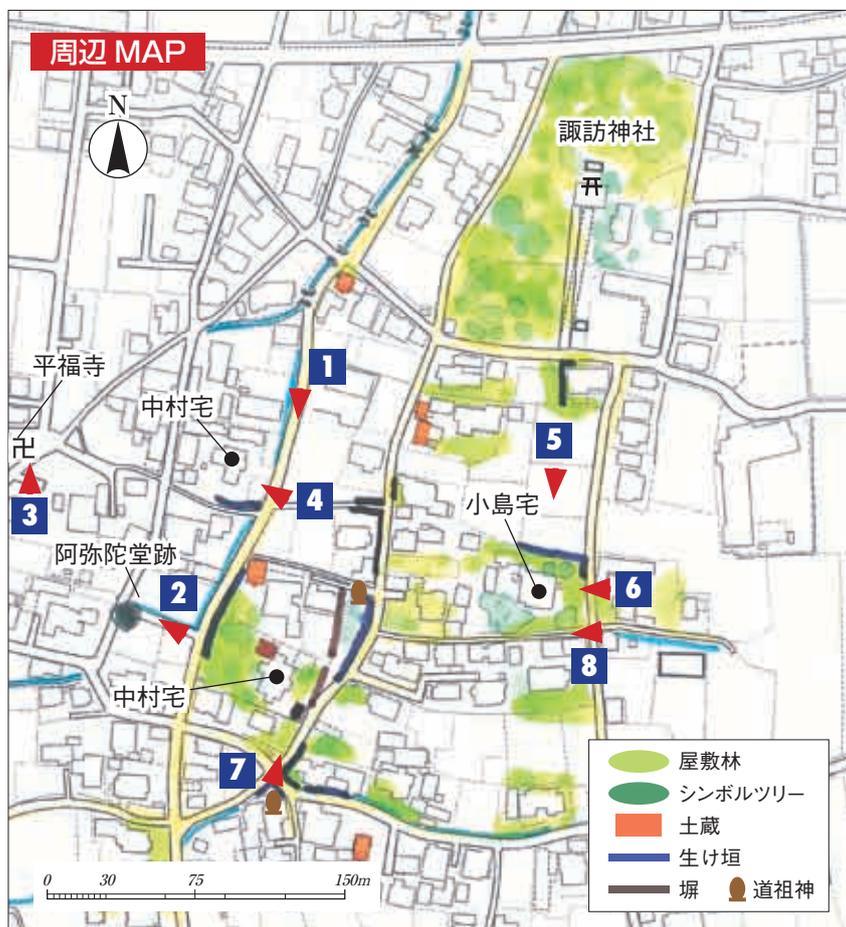
東西に伸びる小路

戦後多くの建物が建て替えられた。現在は本棟造の建物も数件残されている程度で、周辺地域の中でも伝統的建造物の減少が進む地域である。

### 上長尾の屋敷林

上長尾の屋敷林の樹種としては、イチイ・マツ・ヒノキなどが多く、これらの高木を庭に上手に取り込んでいる家が多い。中には庭の塀を低くして、道路側から庭や屋敷林を楽しむような演出をしている家も見られる。

また上長尾には、各々の家の屋敷林や生け垣の間をぬって、東西に小路が何本も伸びていて、天気の良い日には、散策も楽しめそうな通りである。



# 5-10 のびわ野沢 レンガ造の蔵のある屋敷林

安曇野市三郷温



生け垣と屋敷林の続く道は梓川、上高地につながる



小林宅の西側はスギの防風林で囲まれている



屋敷林に囲まれた通り

野沢のいわれは、河岸段丘上（上野原）の本神沢が氾濫して巾下まで押し流し、川筋（野原の沢）ができたことによることが、「年譜雑記」（務台文書）に記されている。

慶安4年（1651）親村の長尾村より25軒で分村。中世開削の温堰・長尾堰の最上流に位置し、水利に恵まれて古くから開発の進んだ水田地帯である。

明治10年代から大正・昭和にかけて、蚕種製造家が殷賑<sup>いんしん</sup>を極め、農村経済の発展を見た。蚕種を買い付けに仲買人が、県内外から多数来村。その接待に小料理屋・旅宿・飲み屋があつて賑わつたという。祭りの囃子に三味線が入る独特な演奏はその名残である。

野沢地区内に本棟造の建物が16棟現存している。かつての蚕種家の経済力によるもので、ほかにも住宅と蚕室を兼ねた家、大きな二階建ての蚕室や土蔵も多く、近在には見られないレンガ造の蔵（文庫蔵）も3棟現存している。

## 野沢の屋敷林

建物の西側にスギの屋敷林があつて西風を防いで



旧務台酒造の土蔵と屋敷林



東から見る旧務台酒造



務台宅 2 軒でつくる屋敷林



レンガ造の蔵と門の対比が面白い



野沢の集落を流れる温堰

いる。野沢では「黒沢おろし」という西からの強風があって、ほとんどの家で西側に屋敷林が見られる。この一角には3棟の本棟造があり、赤レンガの蔵もある。道をはさんだ向かい側には、自然石の玉石の石垣が、イチイの生け垣とマッチし、この通りの雰囲気をかもし出している。

### 小林宅の本棟造

小林宅の母屋は明治年代に移築された本棟造で、一部三階となっている。平成20年に改修工事が行われ、かつての雀踊りが復活された。



な の か い ち ば  
5-11 七日市場 堰がめぐる屋敷林

安曇野市三郷明盛



布山宅の門かぶりの松と屋敷林



本棟造の棟に上がる雀踊り



堰は敷地をまわり、かつては粉挽用の水車があった

住吉庄十八郷のうちの二木郷に属し、中世には三齋市の市場があったことに由来する。住吉庄の地頭となった西牧氏により、庄野堰が開削されるまでは乏水地帯で、横沢堰による原初開発が先行していた。

地内には古地名の神ノ木・野々宮や、宿駅に関わる立石のほか、孤田・元屋敷・若宮・町張り・長田、寺院に関係するトッチュウ坊・油田・伽監田などの中世地名が見られる。

寛文3年(1663)の検地の際に二木村より分村。水田率80%と地味が良く、長尾組中最高であった。地区内の梓川渡河点の「長尾前」は小倉から上長尾、七日市場を経て梓川を渡り、高松から新橋経由で松本に通じていた。また住吉から中萱、真々部を経て長尾前で合流、野沢から藤ノ木を経て長尾前へと貫く主要な道は、各村々の郷蔵から年貢米を運んだ道であり往来も多く、松本街道として重要な道であった。

地区内の「藤ノ木」は古堰の横沢堰水系の末流に立地し、中世前期に成立した古集落である。「馬口」の地字が残されていて、宿駅的な交通路としての所在を示している。



布山宅の北庭と文書蔵



三澤宅の屋敷林



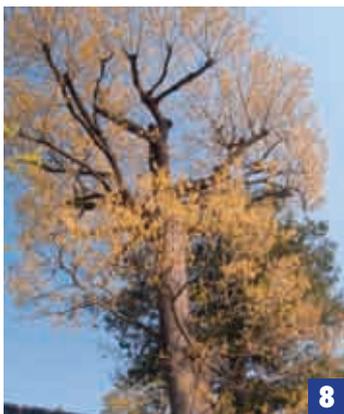
布山宅の屋敷林を南から見る 右は大きなトチノキ



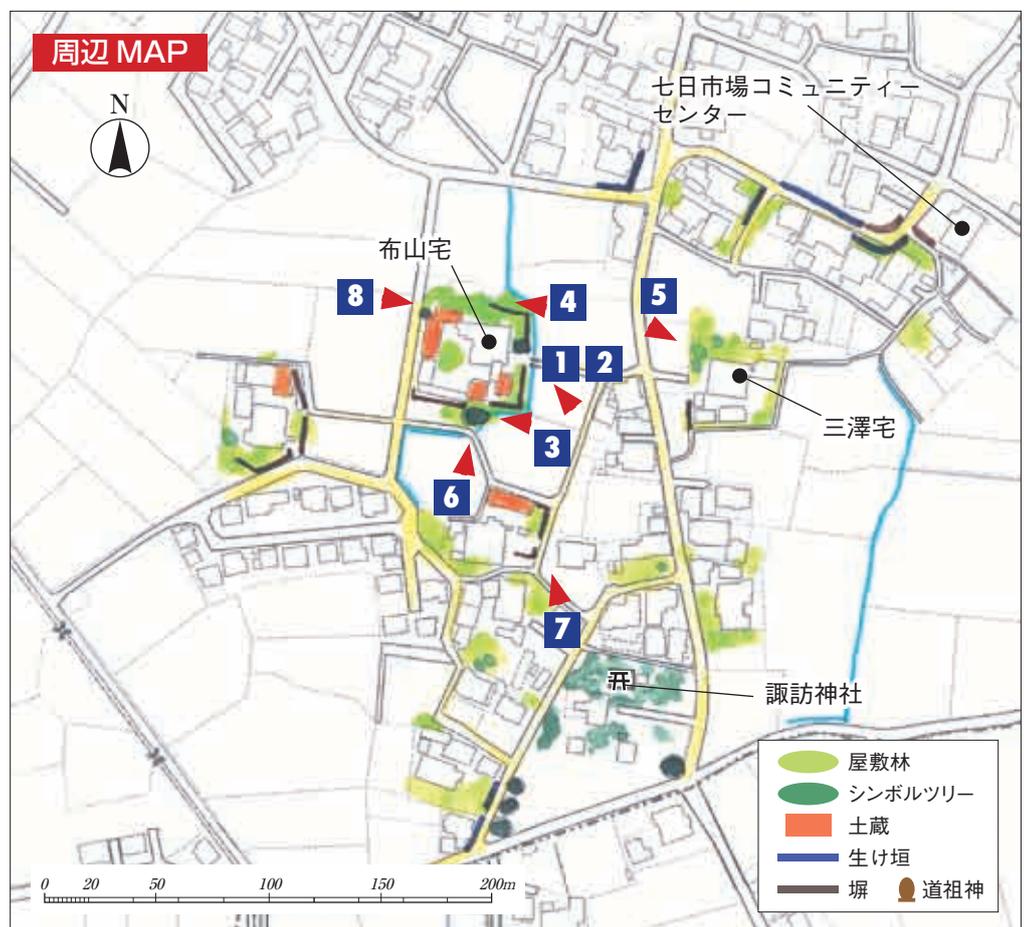
民家のたたずまいと屋敷林

## 七日市場の屋敷林

諏訪神社周辺に比較的大きな屋敷が散在している。布山宅は特に大きな屋敷を構成している。本棟造の家が多く、古民家と屋敷林と塀が美しい風景をつくっている。敷地が散在し孤立した屋敷林を構成しているのが七日市場の特徴である。



大きなクヌギの木



# 5-12 藤ノ木 二軒でつくる屋敷林

安曇野市三郷明盛



南側から望む等々力宅の屋敷林



南側道路から小道をとおして等々力信宅を望む

藤ノ木は、旧三郷村の南側、旧梓川村との境に位置している。藤ノ木には長尾藤ノ木と七日市場藤ノ木があり、地名の由来はともに富士浅間神社が祀られていたことにあるという。慶安年間（1648～52）にはすでに開発されていたが、江戸時代を通じて分村することはなかった。

明治29年（1896）旧明盛村において村内を7つの区に分けた際、第一区が藤ノ木であったといわれている。旧梓川村横沢地区と隣接していることから、横沢地区と現在も一緒に道祖神祭りなどを行っている。

## 等々力宅2軒の屋敷林

屋敷林で囲まれている奥の本家の等々力信宅は、旧上鳥羽村から出たという。手前の等々力宅は、等々力信家の分家で、2軒で屋敷林を形成している。当時は、この等々力家の屋敷内に立派なフジの木があったことから、この地が「藤ノ木」と呼ばれる所以ともいわれている。

本家の等々力信宅の本棟造は築後200年以上を経過し、戦後屋根を葺き替えるなどの大規模改修を



3 本棟造の等々力信宅



4 等々力信宅の納屋で古式の板倉



5 樹陰にこもれ陽がもれる小道



6 等々力信宅の庭園

行ったが、その際、屋根材として屋敷内のクリの木を使ったという。

現在、屋敷内の主な樹種は、スギやヒノキが中心であるが、当時はクリやアカマツも植えられていた。特にマツは、家の繁盛を示す尊い樹種ともいわれ、大切にされてきた。先々代は、屋敷内のクリの木を切って舎弟の家の土台に使ったり、燃料としても使うなど、様々な活用をしてきたという。

今でもスギの葉や枝などは、風呂の焚きつけとして使っている。家主によれば、クリの木はほとんどを伐採してしまったが、当時はクリの木の上にツリーハウスをつかって昼寝をすることもあったという。また、当時は所有者自身が高木の枝打ちを行っていたようだが、現在は数年に1回、庭師に依頼するようになっている。

今では、キハダやチョウセンゴヨウマツ、コシアブラなどの山菜を屋敷内に植えて、季節の味覚を楽しんでいる。



# 三郷の天然記念物

(旧三郷村天然記念物7件のうち)

## 旧役場前のヒマラヤスギ (ヒマラヤシーダ)

一日市場出身の白澤保美林学博士が、明治40年代に母校の旧温明小学校の校門両脇にユリノキとともに植えたものである。目通り3.12メートル、樹高25メートル。松本市あがたの森(旧制松本高等学校)校庭の同種よりも古いとされている。

インドヒマラヤの原産で、ヨーロッパやアメリカでは広く庭園に植樹されている。秋に雄花が開花すると花粉で地面は淡黄褐色になる。雌花は2～3年目に10センチもある球果になる。



## 旧役場前のユリノキ (ハンテンボク)

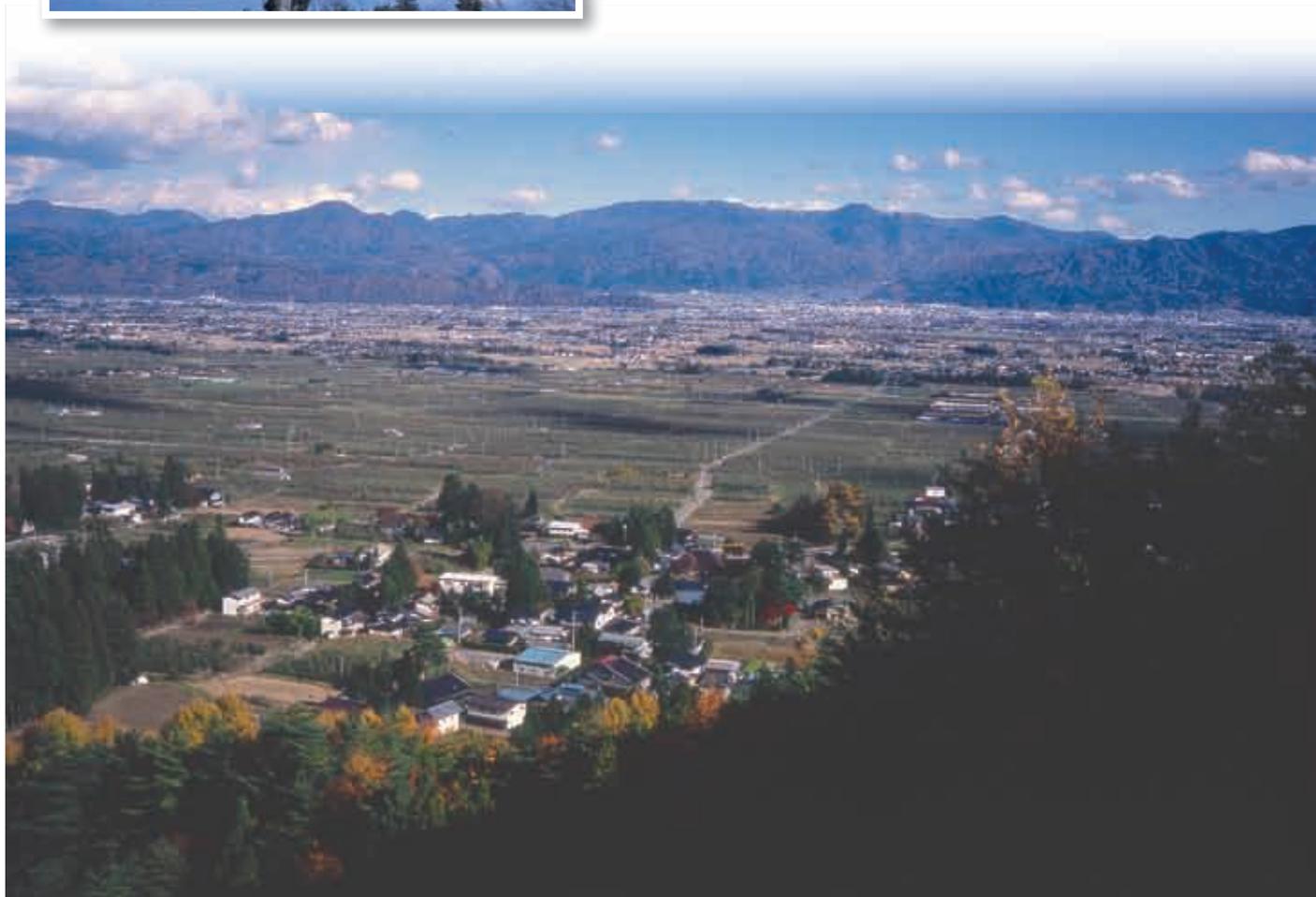
英名：チューリップツリー

ヒマラヤスギと同時期に、白澤博士により記念に植えられた。再三の道路拡幅や下水道工事などの度に根元が痛めつけられた。目通り3.10メートル、樹高25メートルで貫禄を保っている。木の名前は、6月ころ咲く花はユリに似て、葉は印半纏しるしはんてんのようだということによる。北アメリカ原産で白澤博士がドイツ留学の帰途、アメリカから持ち帰って植えたものである。この時の5本のうち、1本は上野の東京国立博物館の前庭に残っている。現在、日本に残されているユリノキでは、上野の木とともに最も古い木とされる。『三郷村誌Ⅱ 第一巻自然編』より



# 6 梓川

梓川（旧南安曇郡梓川村）は松本市の北西部に位置し、安曇野市三郷地域に隣接している。主に梓川左岸の河岸段丘によって形成され、河岸段丘の上段（上野原段丘）地域はリンゴを主体とした畑、段丘の下段地域には水田が広がっている。梓川には比較的規模の大きな屋敷林が点在し、安曇野市域と一体となった田園景観を形成している。



# 6-1 <sup>しもつの</sup>下角 庄屋邸の大きな屋敷林

松本市梓川梓



1

冬の北アルプスを背景にした中沢宅の屋敷林



2

正面玄関側から見た中沢宅の坪庭



3

中沢宅の上座敷から見た庭園

<sup>しもつの</sup>下角はもと南安曇郡梓川村梓の集落であったが、平成17年（2005）に南安曇郡の7町村のうち梓川村は安曇村・奈川村とともに松本市に合併した。しかし、この梓川村の地域は歴史や民俗の面からも、また梓川左岸の農業用水の水系の面からも、明らかに安曇野に含まれる地域なのである。

集落の名は戦国時代の史料に見える<sup>つのかげ</sup>角陰（角懸）郷に由来し、それが江戸時代に上角影村と下角影村に分かれた。明治に入って周辺の諸村と梓村となり、昭和戦後、隣<sup>やまと</sup>の倭村と合併して梓川村を構成した。集落名は「影」を略して「下角」と称していた。

古代の住吉郷に属し、梓川扇状地の上野原段丘下に位置して、集落の中<sup>りゅうだ</sup>を立田堰が流れ、開発の古い地域と考えられる。近世の下角影村は、松本藩領の上野組に属し、安政2年（1855）の書上帳によれば、家数58、人数433とある。

田園地帯に屋敷林が点在し、緑豊かな自然景観を有する地域であるが、近年、宅地分譲が進み、のどかな農村風景も変わりつつある。



北側から見た春の中沢宅

### 中沢宅の屋敷林

中沢宅は上野組の大庄屋を宝暦年間（1751～64）から、5代にわたって勤めた家である。屋号は「亀東」。敷地面積1,500坪の広大な宅地に、江戸中期の明和年間（1764～72）に梓村大久保から移築された間口10間の本棟造の母屋が建っている。

平成13年に大規模改修が施されたが、本棟造の屋敷の雰囲気はよく残されている。特に西側から正面玄関を眺めると、手入れの行き届いた坪庭と調和した、本棟造の母屋が雄大な姿を見せている。

また、上座敷からは、アカマツを中心とした美しい庭園を眺めることができる。歴史を感じる北側の塀や、スギとヒノキを中心とした屋敷林は、この平でも一、二を競うものといわれ、庭木の剪定は4人で7日を要し、地元の庭師によって定期的に行われている。

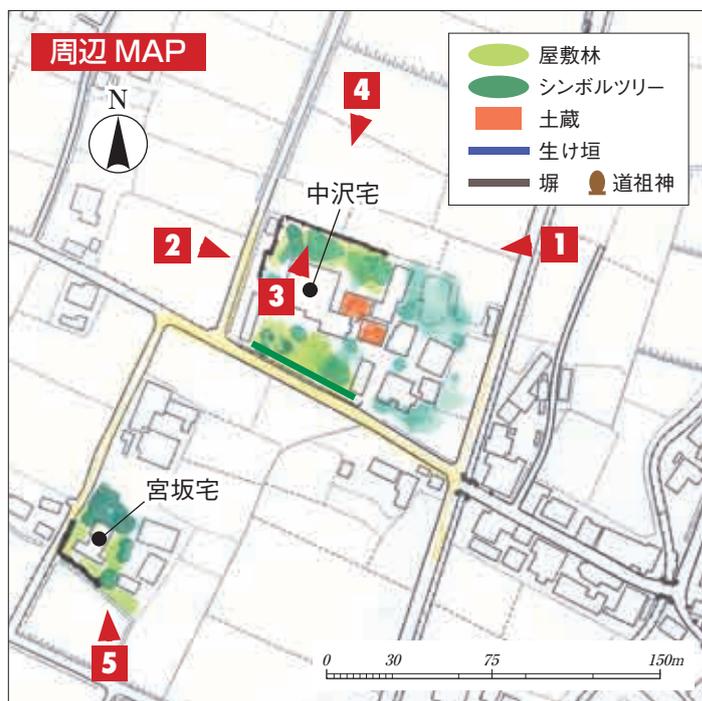
### 宮坂宅の屋敷林

初代松本藩主の石川数正の側室が、この宮坂家から迎えられたと伝えられており、その記念に植えたというアカマツが今も残っている。

また、このアカマツが覆い被さる「棟門」の瓦には、後の松本藩主・水野氏と同じ「丸むねもんに立沢たちおもだか湯」の家紋が見られる。松本城の改修時に宮坂家から瓦を寄進したことから、水野家の家紋をゆるされたという。



宮坂宅のアカマツ





東側から見た小沢宅の本棟造の母屋



旧大妻学校の碑



供出されたケヤキを惜しんで先代が建立した碑

大妻は鎌倉前期の承久の乱で、後鳥羽上皇方につき北条氏と戦った大妻太郎兼澄の領地とされる、開発の古い地域である。古代の住吉郷に属し、梓川左岸段丘上に位置し、温堰が地域内を流れる。中世の文献には「大妻北方」「大妻南方」と見え、近世には北大妻村と南大妻村に分かれた。安政2年(1855)の書上帳によれば、家数133、人数810とある。

明治期に周辺諸村と倭村となり、昭和戦後、隣の梓村と合併して梓川村を構成し、平成17年(2005)に松本市に合併した。

南大妻には、明治5年(1872)に大妻学校(懐徳館と称する)が開校された。校舎は、排仏毀釈で廃寺となった光入寺の庫裏が用いられ、明治7年に北大妻村へ移転するまで、倭村の教育の中心地でもあった。

また、大妻女子大学の初代学長である大妻コタカ女史(広島県出身)の夫の大妻良馬氏は、鎌倉初頭にこの地を支配した大妻氏の末裔であるといわれている。



玄関前のアカシヤの大木

### 小沢宅の屋敷林

屋敷全体が屋敷林に囲まれており、特にスギが多いのが特徴的である。小沢氏によると、杉は生育が早く手入れが要らないため、当時、風除けにはよく使われていたようである。

戦前、小沢宅には安曇野一といわれたケヤキがあったが、昭和19年の戦時中に供出され、先代は大変残念がったという。伐採されたケヤキを惜しんで、先代が玄関前に建立した碑からもそのケヤキの雄大さをうかがい知ることができる。

また、東側正面玄関前には、屋敷林には珍しいアカシヤの大木が2本植えられている。樹齢150年以上といわれるこの大木は、小沢邸の屋敷林のアクセントにもなっている

旧梓川村は、島々谷から梓川沿いに谷風が吹くため、小沢宅のように屋敷の南側へ屋敷林を植えた家が多いのが特徴である。

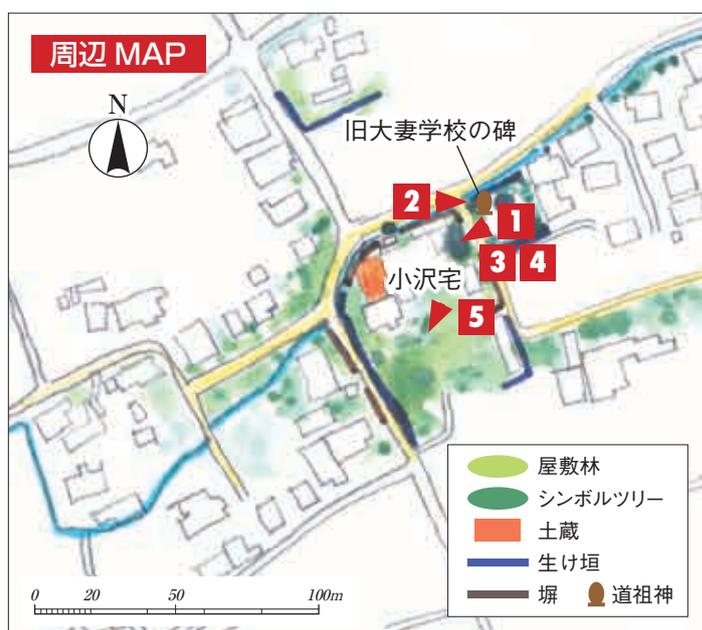
母屋は本棟造で、正面から見た外観は、南側・西側の屋敷林と調和のとれた景観をつくり出している。玄関横の式台は、当時の松本藩主がこの地を訪れた際、ここから上がって休んだといわれている。

また、屋敷内の庭園は、南側のスギやヒノキ、池を中心に植えられたサツキなどを引き込んで美しい眺めをつくりだしている。

母屋の座敷は、小沢氏と遠縁に当たる画家藤森桂谷が描いた襖絵や、松本藩で使われていた小道具など歴史を感じさせる調度品で飾られている。



上座敷から見た庭園



# 梓川の巨木

## (1) モミ

指 定：長野県天然記念物

(昭37年9月27日指定)

所在地：松本市梓川梓北々条 大宮熱田神社境内

樹 形：目通り6.24m 樹高43m

地上20mまで直立した太い幹、それより上部には四方に10数本の太枝を張り出している。付近にはスギ・ヒノキなどの高木があるが、モミの幹はそれらを一際抜きん出て高くそびえ立ち、遠方から容易に識別することができる。

樹勢まだ旺盛で樹姿端麗、県下一のモミの巨木であるといわれている。御神木として幹には注連縄を張り巡らし、根元の周囲に柵を設けて保護管理をしている。



## (2) ツガ

指 定：松本市天然記念物

(昭41年11月1日旧梓川村指定)

所在地：松本市梓川梓中塔 二村同姓共有地

樹 形：目通り4.4m 樹高29m

ツガとしては県内でも有数な大樹である。地上10mから10数本の太い枝を張り出し、主幹は少し傾いている。

樹姿は端正で樹勢は旺盛、枝張りは西方・北方へ10数m、東方と南方へは10m内外で、まわりには主にスギ・ヒノキの高木が林立している。

『梓川村誌 自然・民俗編』より



# 屋敷林考 ——私と庭の樹木——

松岡淳夫（安曇野市三郷下長尾）

私の住む家の庭には、樹齢300年を超えるといわれる大欐が6本ありました。その1本は樹の空洞化が進み、倒木の危険が出て4年前に切り倒して、現在5本が残っています。

これらの間に、朴樹、檜、<sup>ホオノキ</sup> 翌檜、<sup>アスナロ</sup> 杉の老木が重なって生え、森を形づくっています。

この大欐には、蔓の幹が径30<sup>つた</sup>センチ以上の藤蔓をからませ、時季には<sup>こずえ</sup> 欐の梢に藤の花房が咲き競います。そして、それらの樹木の下は江戸時代に始まった造園で、多少見応えのある庭になっています。

土地に緑のない道行く人はこの樹木を見て、「社の森かと思った」とも言われました。

最近、平野部の田園地帯の景観の中に、屋敷に茂る樹林を屋敷林と呼び、その由緒を加えて注目されるようになりました。

その地の古い歴史の中で、先人たちが土地を拓いて定住し、農業を興し、自然から身を守って生きてきた一つの証として、この樹林が景色の中にしっかりと根付いたものと考えます。

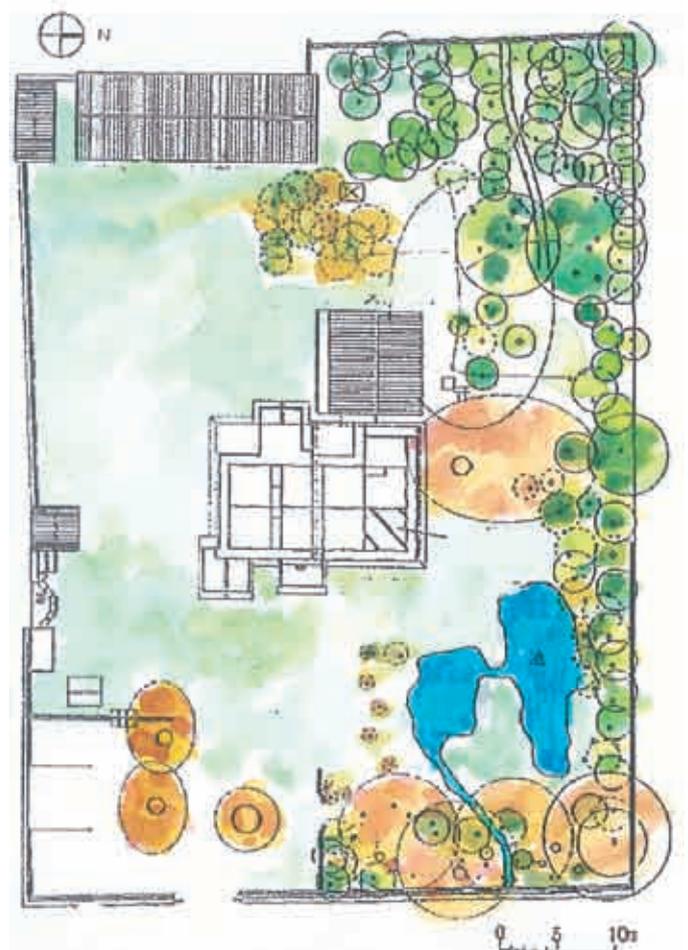
先人たちは自然の脅威にさらされ、これに立ち向かい、また自然の恵みを享受し、感謝しながら生活し、繁栄してきました。周りの樹木は、そこに住む人びとの生活を囲み、激しい寒風雨雪から<sup>しの</sup> 凌がせ、枯れ枝や薪、落ち葉の肥料などを供し、さらには境界の区割りを誇示してきたと考えます。

そして、人びとは世代を経て繁栄し、樹木は年輪を重ねて育ちながら、そこに住む人びとの生きて有り様を見つめています。

これらの屋敷林は地域文化の原風景として、心に和む景観の重要な要素であると考えます。私の歴史を託して一本の若い欐を植え、古くからの樹木の仲間に加えました。



伐採された大欐の切り株



松岡淳夫宅の配置図

# 屋敷林所有者へのアンケート調査の報告

当プロジェクトは屋敷林の現状を調査するため、2008年春からの約2年間に55軒の屋敷林所有者のお宅を訪ね、簡単なアンケート調査も行いました。そのアンケート結果を集計したのが下表です。

まずQ1は、選択肢1と2すなわち「安曇野の景観を構成する要素として屋敷林は重要である」との認識を示す人が86%を占めており、そのうちの4割（全体の35%）の方は、私有財産というより市民の共有財産であるとさえ答えています。

Q2においては73%の人が「負担は大きいが現状のまま維持していきたい」と意欲的な側面をのぞかせています。しかしQ3にあるとおり、4分の1の人が公的支援がほしいと言っており（選択肢2）、約半数（選択肢1）の所有者は、それは無理でもせめて枯葉が舞ったり不本意にも日陰を作ってしまうことなどに対して、あまり非難しない程度の、もしくはそれ以上の理解と支持を望んでいます。

Q4については、所有する屋敷林や建築物が図書に載ったり、見学者が訪れたりすることにつき、「いずれも協力したい」という方が約半数（選択肢1）いる一方で、「いずれも遠慮したい」と「冊子だけならいい」という方、すなわち「人に見に来られても困る」という方も約半数（選択肢3、4合計）いるということを示しています。しかしこれは生活の場であるのですから当然であり、むしろ前者がこれほどいるということに驚きの念を禁じえないというのが、素直な感想ではないでしょうか。

## 【アンケート票（抜粋）】

Q1) 屋敷林と安曇野の景観についての考え方。

- ①屋敷林は安曇野の重要な景観資源であり、市民の共有財産。
- ②重要な景観資源であるが、あくまでも私的財産。
- ③私的財産であり、安曇野の景観にとって重要な要素ではない。
- ④屋敷林と安曇野の景観についてあまり考えたことがない。

Q2) 屋敷林の維持管理の負担はどうですか。

- ①負担は大きく維持が困難。
- ②負担は大きいがなんとか現状のまま維持したい。
- ③負担が大きいので規模を縮小したい。
- ④維持管理の負担はそれほどでもない。

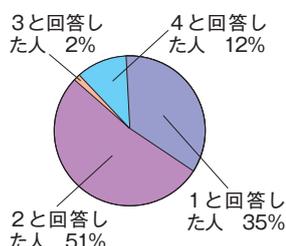
Q3) 屋敷林維持のため望むことは何か。

- ①景観的な価値をアピールしてほしい。
- ②維持管理のための公的な支援がほしい。
- ③規制もアピールもしてほしくない。
- ④その他

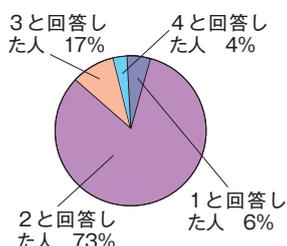
Q4) 屋敷林の冊子への掲載や見学会の開催に協力できるか。

- ①どちらにも協力可。
- ②見学会は協力するが冊子へは不可。
- ③冊子には協力するが見学会は不可。
- ④どちらも不可。

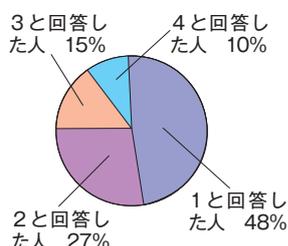
Q1 回答内訳



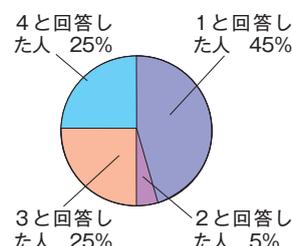
Q2 回答内訳



Q3 回答内訳



Q4 回答内訳



さて、四択以外の自由記述の部分（Q5）に記された言葉も簡単に紹介しておきます。

## 【Q5 回答抜粋】

- ・以前県の事業で屋敷林維持の補助制度があったが長続きしなかった。今度は市でそのような制度をつくってほしい。
- ・市のゴミ処理に関する指針によると、直径8センチ以下に切らなければならないとか、そもそもゴミ袋が小さい上に破れやすいなど、木などとても守れない。
- ・私どもの代までは守っていきたいと考えますが、次世代にはどうなるかわかりません。
- ・屋敷林維持を本気で支持してくださるのならば、庭の片隅で燃やすことを公に認めてください。

# 「第1回屋敷林サミットin 安曇野」の報告

「第1回屋敷林サミットin 安曇野」は、平成21年11月7日安曇野市堀金総合体育館で行われました。コーディネーターは等々力秀和氏がつとめ、砺波市から新藤正夫氏、武蔵野市から荻野芳明氏、当プロジェクトから場々洋介氏がパネリストとなり、屋敷林の保全の問題点や将来の展望について話し合いがもたれました。

屋敷林の先進地である砺波市の新藤氏からは、学校教育の場などで将来を担う子供たちに理解してもらうことや、建設業や造園業者の協力が必要との意見がありました。

一方、武蔵野市の荻野氏からは、屋敷林が少なくなってしまった武蔵野市では、行政の手厚い補助、支援があるとの報告がなされ印象的でした。

場々氏からは、安曇野市の現状を発表し、屋敷林を残すには、お金の問題と心の問題があるのではないかと話しました。屋敷林を維持継承していく費用と、周辺の人々に対して落ち葉および冬に日陰になってしまう遠慮から、不本意でも木を切ってしまう現実についてふれました。そこで、今後市民の方々には、屋敷林を共有財産として温かく見守る視点がほしいと思います。しかしながら、新興住宅地などでは住宅を建てることに手一杯で緑地にまで手が回らない現実もあります。



屋敷林サミットのポスター

当日は約200人が参加されましたが、会場からも多くの意見がありましたので、ご紹介します。

- ・大学のケヤキなどの落ち葉は、腐葉土として堆肥にし菊作りに利用している。〔駒ヶ根から参加された方〕
- ・屋敷林には暖房効果がある。〔筑波大学の学生豊川さん、茨城県から参加〕

3時間ほどのサミットの終了後、近くの西小路（堀金）ほかの屋敷林の見学会をしました。来年は砺波市でのサミットが計画され、この輪が日本中に広がることを夢見て第1回サミットは終了しました。



サミットの会場（安曇野市堀金総合体育館）



中沢宅（松本市梓川）の見学風景

## あとがき

平成4年(1992)長野県景観条例が施行され、平成6年4月から県の景観サポーター制度がスタートしました。

また一方で 安曇野市の前身である旧5か町村は、県下で第1号の重柳地区(旧豊科町)を皮切りに、県内最大の25か所の景観住民協定をもつ地域となりました。

平成15年12月、長野県松本地方事務所では当時の高見沢所長の発案で、松本エリア(県松本地方事務所管内)の屋敷林の保全活動が計画され、景観サポーターの有志がこの事業にかかわり、屋敷林の登録制度の提案を行いました。

平成20年6月、景観サポーターの屋敷林グループを中心に安曇野ブランドデザイン会議に「屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト」が設立され、以来18回に及ぶ現地調査と、55回にわたる会議を経て今回の活動報告の発刊となりました。

これまでにお力添えをいただきました多くの方々に御礼を申し上げます。

屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト 一同

### ■参考文献一覧

『南安曇郡誌』第1～3巻、別篇I(南安曇郡誌改訂編纂会・昭和31～59年)

『穂高町誌』自然編・歴史編上/民俗編・歴史編下(穂高町誌刊行会・平成3年)

『豊科町誌』歴史編・民俗編/水利編(豊科町誌刊行会・平成7年)

『三郷村誌II』第1～5巻(三郷村誌刊行会・平成16～18年)

『堀金村誌』上・下巻(堀金村誌刊行会・平成3、4年)

『梓川村誌』自然/民俗編・歴史編(梓川村誌篇さん委員会・平成5、6年)

『明科町史』上・下巻・自然編(明科町史編纂会・昭和60年、平成21年)

『長野県の地名』日本歴史地名大系第20巻(平凡社・昭和54年)

『角川日本地名大辞典20 長野県』(角川書店・平成2年)

『明治初期長野縣町村繪地圖大鑑 別巻〈市町村変遷表〉』(郷土出版社・昭和60年)

『命の水—安曇平の水利史—豊科編—』(豊科町教育委員会・昭和58年)

『豊科町の土地に刻まれた歴史』(豊科町教育委員会・平成3年)

小穴喜一『土と水から歴史を探る』(信毎書籍出版センター・昭和62年)

『安曇野建築探訪』(社)長野県建築士会南安曇支部、(社)長野県建築士事務所協会南安曇支部・平成5年)

※その他、地元の方々にご意見・ご指導をいただきました。

### ■制作スタッフ(順不同)

場々洋介 宮崎崇徳 宗像 章 等々力秀和 細萱充仁 木船潤一 高松伸幸 権藤誠人 岩原 清  
松岡淳夫 内川亜紀 土田勝義 降旗政人 中沢倫明 高見沢賢司 渡辺 研 高橋隆蔵

### ■事務局

安曇野ブランド推進室

### ■協力者

豊川 尚(調査)

鈴木研一(写真)

高原正文(歴史)

### ■組版・印刷・製本

(株)日輪(長野市)



活動報告 安曇野の屋敷林 その歴史的まちなみを訪ねて

発行日 平成23年(2011)3月15日〈非売品〉

編集・発行 屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト©

〒399-8392 安曇野市穂高総合支所内 安曇野ブランド推進室

TEL0263-82-3131 FAX0263-82-6622